

陸前高田市文化財調査報告 第38集

よしだけじゅうたく

吉田家住宅跡発掘調査報告書

平成26・27年度区画整理事業関連発掘調査

2021

岩手県陸前高田市教育委員会

吉田家住宅跡発掘調査報告書

平成 26・27 年度区画整理事業関連発掘調査

序

陸前高田市は、岩手県南部に位置し、県内では温暖な気候の地域にあり、山、川、そして三陸の海がもたらす豊かな自然の恩恵を享受し、縄文時代から現在にいたるまで発展してまいりました。白砂青松で知られる名勝高田松原、国指定史跡の中沢浜貝塚などの歴史文化遺産が多数存在しております。「周知の埋蔵文化財包蔵地」としましては、縄文時代の貝塚、墨書き土器・刻書き土器を出土する古代遺跡、そして中世に築城された城館跡などが市内に約270か所存在しており、長い歴史の営みを現在に伝えております。このような自然や歴史文化遺産を保存し後世に伝え活用していくことは、現在を生きる私たちの責務です。

一方、市勢発展や地域活性化に伴う各種開発等により消滅していく遺跡があることも事実です。このような各種開発等によって失われた遺跡を元に戻すことはできず、この遺跡が持つ我々の先人が生きた証は永久に失われてしまいます。

陸前高田市教育委員会では、開発事業や東日本大震災の様々な復興事業と貴重な遺跡の保護を両立するため、関係機関と事前の協議・調整を行いながら、やむを得ず消滅する遺跡については発掘調査を実施してまいりました。

本書は、平成26・27年度に区画整理事業に伴い実施した、吉田家住宅跡における発掘調査成果を収録したものです。吉田家住宅は、仙台藩氣仙郡を治めていた大肝入の屋敷で、平成18年に岩手県有形文化財（建造物）に指定されましたが、平成23年の東日本大震災による津波で全壊する被害に遭いました。このため、陸前高田市は今後の復元計画の基礎資料とするために、埋蔵文化財調査を実施しました。本書が、地域の方々をはじめとした学術研究、教育活動に広く活用され、ひいては文化財保護思想の普及啓蒙に役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書作成にあたり、ご指導、ご協力をいただきました関係各位に深く御礼申し上げます。

令和3年3月

陸前高田市教育委員会
教育長 大久保 裕明

例　　言

- 1 本報告書は、岩手県陸前高田市気仙町字町裏 12・123・13-1・14-1・14-2 に所在する吉田家住宅跡の発掘調査成果を収録したものである。
- 2 今回の調査は、平成 26・27 年度区画整理事業に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課の指導のもとに、陸前高田市教育委員会が実施した。
- 3 岩手県遺跡登録台帳における遺跡コード・略号は次のとおりである。
　　遺跡コード：-（遺跡登録なし） 略号：YDJ-1・2
- 4 発掘調査期間・調査面積・担当者は次のとおりである。

　　調査期間 第 1 次（平成 26 年度）～調査期間：平成 26 年 11 月 20 日～平成 27 年 3 月 16 日

　　担当者：阿部敬生

　　第 2 次（平成 27 年度）～調査期間：平成 27 年 5 月 25 日～11 月 30 日

　　担当者：瀧本正志

　　調査対象面積 4,090m²

- 5 室内整理期間・担当者は次のとおりである。

　　整理期間：平成 26 年 11 月～平成 28 年 2 月

　　担当者：阿部敬生（平成 26 年度） 瀧本正志（平成 27 年度）

- 6 本報告書の執筆分担は次のとおりである。

　　I～V：（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

　　VI：（株）加速器分析研究所

　　附　編：川根正教（東京工芸大学）

- 7 各種委託業務は、次の機関等に依頼した（順不同）。

　　基準点測量：（有）さくら設計

　　空中写真測量：（株）タックエンジニアリング

　　陶磁器の実測（一部）：（株）ラング

　　石製品石材鑑定：花崗岩研究会

　　放射性炭素年代測定：（株）加速器分析研究所

　　報告書の執筆・編集：（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

- 8 本書では以下の地形図を使用した。

　　『1/25,000 地形図 大船渡・陸前広田・今泉・鹿折』（国土地理院）

　　『1/50,000 地形図 盛・気仙沼』（国土地理院）

　　『1/2,500 災害復興計画基図（迅速図）2 版 X-NF66-4』（国土地理院）

- 9 野外調査及び室内整理にあたり、以下の機関等から御協力いただいた（順不同・敬称略）。

　　岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課、吉田裕（吉田家当主）、佐々木孝、陸前高田古文書研究会（会長：細谷英男）、月館敏栄（元八戸工業大学）、高橋恒夫（東北工業大学）

- 10 出土陶磁器は、大橋康二氏（佐賀県立九州陶磁文化館名誉顧問）に鑑定、ご教示いただいた。

- 11 出土錢貨は、川根正教氏（東京工芸大学）に鑑定いただき、玉稿を賜った。紙数の都合で図版を割愛し、附編として本書に収録している。

- 12 本遺跡の出土遺物及び諸記録類は、陸前高田市教育委員会で保管している。

- 13 これまでに、調査成果の一部を公表しているが、本書の記載内容を正式なものとする。

凡　　例

1 遺構図の用例は次のとおりである。

(1) 遺構実測図の縮尺は下記のとおりである。

礎石建物跡 1/80、1/100、1/150

門跡 1/100

堅穴建物跡、カマド状遺構、炉跡 1/80

各図版にはスケール及び縮尺を付した。

(2) 遺構実測図及び本文で示した座標は、平面直角座標X系に基づいて表示している。

(3) 推定線は破線で表した。また、スクリーントーンを使用して遺構の状況を表した（凡例図参照）。

(4) 遺構内の土器をP、石器・礫をSで示した。

(5) 層位は、アラビア数字などを使用した。

(6) 土層色調観察には、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を使用した。

2 遺物実測図の用例は次のとおりである。

(1) 遺物実測図の縮尺は、陶磁器1/3・1/4・1/5、土製品1/2・1/3、陶製品1/2、

石製品・貝・角製品1/2・1/3・1/8、金属製品1/2・1/5、錢貨1/1・2/3、炉壁1/3で表した。

(2) スクリーントーンを使用して、溶着津付着、還元範囲を表した（凡例図参照）。

3 写真図版の用例は次のとおりである。

(1) 遺物写真図版については、縮尺は基本的に遺物実測図に準じている。

遺構使用トーン凡例

	還元	K10%
	焼土(弱)	K20%
	焼土(強)	K40%
	炭化物	K60%

遺物使用トーン凡例

	溶着津付着	K100%(不透明度50%)
	還元	K100%(不透明度30%)

目 次

I 調査に至る経過	1
1 調査の経緯	1
2 調査体制	2
II 立地と環境	3
1 吉田家住宅跡の位置	3
2 地理的環境	3
3 歴史的環境	5
(1) 周辺の遺跡	5
(2) 吉田家住宅の来歴	7
III 調査と整理の方法	10
1 野外調査の方法	10
2 整理の方法	10
3 野外調査の経過	10
IV 検出遺構	12
1 概要	12
2 主屋	12
3 土蔵	21
4 納屋（長屋）	23
5 味噌蔵	26
6 小屋	27
7 門	28
8 吉田家住宅建設以前の遺構群	28
V 出土遺物	32
1 陶磁器	32
(1) 陶器	32
(2) 土師質土器	34
(3) 磁器	34
2 土・陶製品	40
3 石製品、貝・角製品	42

4 金 属 製 品	42
5 錢 貨	45
6 炉 壁・鉄 淚 類	45
 VI 自然科学的分析	 63
1 放射性炭素年代測定 (AMS 測定)	63
(1) 測定対象試料	63
(2) 化学処理工程	63
(3) 測 定 方 法	63
(4) 算 出 方 法	63
(5) 測 定 結 果	64
 VII 調査のまとめ	 68
 附編 「吉田家住宅」跡から出土した錢貨等について	 69
1 錢貨等の分類種別	69
2 寛永通宝の分類について	69
3 出土錢貨からみた検出遺構の年代について	69
4 陸前高田における寛永通宝の出土状況	70
報告書抄録	99

図版目次

凡例図

第1図 吉田家住宅跡位置図	1	第17図 小屋跡	26
第2図 調査範囲と周辺の地形図	4	第18図 門跡 1・2	27
第3図 周辺の遺跡分布図	6	第19図 吉田家住宅建設以前の造構群（1）	29
第4図 吉田家屋敷縦図（1）	8	第20図 吉田家住宅建設以前の造構群（2）	30
第5図 吉田家屋敷縦図（2）	9	第21図 陶磁器（1）	33
第6図 主屋現状平面図	12	第22図 陶磁器（2）	35
第7図 調査全体図（1）	13	第23図 陶磁器（3）	37
第8図 調査全体図（2）吉田家住宅建設以前の 造構群	14	第24図 陶磁器（4）	39
第9図 主屋上層建物跡1	15・16	第25図 土・陶製品	40
第10図 主屋上層建物跡2・主屋区断面図	17・18	第26図 石製品、貝・角製品	41
第11図 主屋下層建物跡1	21	第27図 金属製品（1）	43
第12図 土蔵一階現状平面図	21	第28図 金属製品（2）	44
第13図 土蔵跡	22	第29図 銭貨（1）	46
第14図 納屋（長屋）現状平面図	23	第30図 銭貨（2）	47
第15図 納屋（長屋）跡	24	第31図 銭貨（3）	48
第16図 味噌蔵跡	25	第32図 銭貨（4）	49
		第33図 銭貨（5）	50
		第34図 銭貨（6）、炉壁	51

表目次

第1表 周辺の遺跡表	5	第6表 金属製品観察表	57
第2表 硅石一覧表	31	第7表 銭貨観察表	57
第3表 陶磁器観察表	52	第8表 炉壁観察表	62
第4表 土・陶製品観察表	56	第9表 鉄滓類観察表	62
第5表 石製品、貝・角製品観察表	56	第10表 鉄滓類計測表	62

写真図版目次

写真図版1 米軍撮影航空写真・調査区全景	79	写真図版11 陶磁器（5）	89
写真図版2 主屋（1）	80	写真図版12 陶磁器（6）	90
写真図版3 主屋（2）	81	写真図版13 土・陶製品、石製品、貝・角製品	91
写真図版4 土蔵・納屋（長屋）	82	写真図版14 金属製品（1）	92
写真図版5 味噌蔵・小屋・門	83	写真図版15 金属製品（2）、銭貨（1）	93
写真図版6 吉田家住宅建設以前の造構	84	写真図版16 銭貨（2）	94
写真図版7 陶磁器（1）	85	写真図版17 銭貨（3）	95
写真図版8 陶磁器（2）	86	写真図版18 銭貨（4）	96
写真図版9 陶磁器（3）	87	写真図版19 銭貨（5）	97
写真図版10 陶磁器（4）	88	写真図版20 銭貨（6）、炉壁、鉄滓類	98

I 調査に至る経過

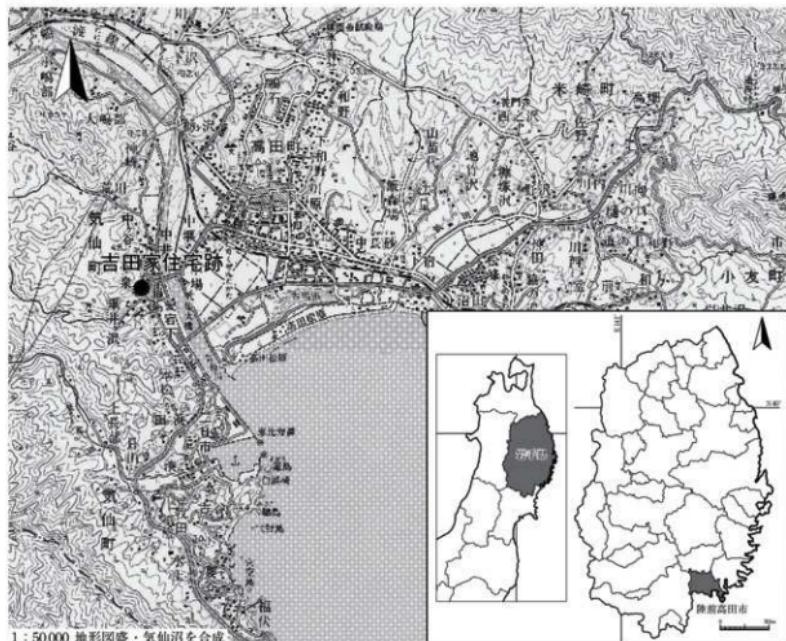
1 調査の経緯

本書は、平成26・27年度に実施された岩手県指定有形文化財（建造物）吉田家住宅跡の発掘調査報告書である。

江戸時代の仙台藩大肝入屋敷の遺風を伝える建造物として、平成18年に県指定を受けた吉田家住宅であるが、東日本震災津波により建物基礎・礎石を残し全壊してしまった。吉田家住宅が存在した気仙町今泉地区でも、大規模な盛土工事による地盤嵩上げを伴う市街地復興土地区画整理事業が計画され、平成26年10月、陸前高田市市街地整備課から市教育委員会に、市が復元整備を計画している吉田家住宅の敷地内の文化財調査が依頼された。

市教育委員会は、県指定建物の建築学的調査の記録は保有していたが、建物基礎や地業に関わる調査は実施していなかった。流失を免れ回収された建物部材をもとに、今後復元が計画されている吉田家住宅の建物の変遷を明らかにし、復元事業の基礎的資料とするため屋敷地内4,090m²を対象に発掘調査を実施した。

調査は、平成26年11月20日～平成27年3月16日、平成27年5月25日～11月30日の期間で行った。



第1図 吉田家住宅跡位置図

2 調査体制

平成 26・27 年度の吉田家住宅跡の調査体制は、以下である。

調査主体 陸前高田市教育委員会

総括 平成 26 年度：大久保裕明（生涯学習課長）

平成 27 年度：堺 伸也（生涯学習課長）

事務局 高橋一成（同課課長補佐）

吉田志真（同課生涯学習係長）

桐木 光（平成 26 年度 同課主任主事／京都市派遣）

藤元剛史（平成 27 年度 同課主任主事／京都市派遣）

曳地隆元（同課学芸員）

村上紀子（平成 27 年度 同課文化財専門員）

調査員 阿部敬生（同課主査／神戸市派遣）第 1 次（平成 26 年度）担当

瀧本正志（同課主査／福岡市派遣）第 2 次（平成 27 年度）担当

作業員 千葉晃子、鈴木界市、大和田武喜、金野由紀夫、佐々木美佳、村上実枝、

佐々木多美子、村上由美子、伊勢谷和雄、田沢博昭、梅澤敏行、近藤美也子、

及川恵美子、菅野由美子、後藤美知香、横澤桐子、梅木良子、佐藤キヨ子、

佐藤美代子、荒木コギク、戸羽さおり、佐々木かおり、村上真知子

II 立地と環境

1 吉田家住宅跡の位置

吉田家住宅跡は岩手県陸前高田市氣仙町字町裏 12・12-3・13-1・14-1・14-2 に所在し、国土地理院発行 50,000 分の 1 地形図「盛」の図幅に含まれる。また、吉田家住宅跡は北緯 39 度 00 分 32 秒、東経 141 度 36 分 55 秒の経緯度付近に記載される。

第 1 図に吉田家住宅跡の位置を示したが、陸前高田市は岩手県の南東端に位置し、東は大船渡市、北は住田町、西は一関市大東町、南には宮城県気仙沼市に接している。市域のほぼ中央を気仙川が南流しており、広田湾に注いでいる。今回報告する吉田家住宅跡は、気仙川のすぐ西側にある。

吉田家住宅跡は、陸前高田市役所から南西に約 2.3km、東日本大震災津波伝承館から西に約 1.1km の気仙川によって開拓された右岸低位段丘に立地している。

2 地理的環境

気仙川は、気仙郡住田町の高清水山付近の土倉峠を源とする全長 44km、流域面積 520km² を測る二級河川で、気仙川水系の本流である。気仙川水系には、中原川、川原川、小泉川、矢作川、生出川、雪沢川の支流が含まれており、これらの河川から合流した気仙川河口付近は右岸に丘陵が迫っているため、陸前高田市街地がある左岸側に氾濫を繰り返していたと考えられ、現在も沖積平野が広く発達している。

一方、海岸線はリアス式海岸特有の岬と湾が交互に連続する複雑な地形となっており、広田半島は南東方向の太平洋に大きく突出し、西方には湾口部約 3.5km、湾奥まで約 7 km の逆 U 字状の広田湾を形成している。

また、市域は北上山地南東部に位置しており、北の氷上山 (874.4m) をはじめ、東の箱根山 (446.8m)、広田半島の仁田山 (254.1m)、大森山 (147.2m)、西の笠長根山 (519.9m) などの 800m 以下の低山やこれを越える山地に囲まれている。

第 2 図に吉田家住宅跡周辺を拡大した地形図を示した。東日本大震災以前の街並みを示しており、この街並みは文政 5 年 (1822) の今泉村絵図に記載された内容とはほぼ一致している。また、写真図版 1 に 1948 年米軍撮影の航空写真を載せたが、今泉村の町場を南北に走る表道路は直角に 4 回折れ曲がっており、計画的に町割りされていることが窺える。

吉田家住宅は、表道路から 100 m ほど西奥の山手に入った場所にあり、広大な土地を有した屋敷であった。また、背後に山を控えた自然の要衝となっており、社寺も多く配置されている。嘉永 5 年 (1852) 8 月 14 日の「御出馬今泉町御下宿割家數四拾八軒」と記された今泉町絵図によれば、「御殿吉田宇右衛門」の裏道に面した建物が「お代官屋」と示されており、気仙郡の行政上に重要な代官屋と大肝入屋敷が隣接して設けられていた様子が分かる (高橋 1987)。

参考文献

高橋恒夫 1987 「仙台領気仙郡の大肝入・吉田家住宅とその大工棟梁・七五郎について - 遺構と文献資料を中心に - 」『日本建築学会計画系論文報告集』第 379 号



第2図 調査範囲と周辺の地形図

第1表 周辺の遺跡表

No.	遺跡コード	遺跡名	種別	時代
1	-	青田家住宅	近世民家跡	中世・近世・近代
2	NF66-1388	船ヶ脇館	城館跡	中世
3	NF66-1356	東館（今泉古館）	城館跡	中世
4	NF66-1349	西館	城館跡	
5	NF66-2358	愛宕F II	散布地	奈良・平安
6	NF67-1020	中井	散布地	
7	NF66-0368	神崎	集落跡	绳文
8	NF66-0338	障ヶ森	散布地・城館跡	中世
9	NF56-2303	内館（劍崎館）	城館跡	中世
10	NF66-0237	山谷I	集落跡	
11	NF66-0255	山谷II	散布地	绳文
12	NF66-0159	外道尻I	散布地	
13	NF66-0251	外道尻II	散布地	绳文
14	NF66-0139	外道尻III	集落跡	
15	NF56-2252	寺前I	集落跡	绳文
16	NF56-2270	寺前II	散布地	绳文
17	NF56-2363	越戸内經塚	經塚・散布地	绳文・中世
18	NF56-2169	觀音寺	散布地	绳文
19	NF56-2214	應昭	城館跡	中世
20	NF56-2311	單見洞	散布地	奈良・平安
21	NF56-2315	細觀沢	散布地	奈良・平安
22	NF57-2012	圓の里館（花輪館）	城館跡	近世
23	NF57-2014	下沢I	散布地	绳文
24	NF57-2006	下沢II	散布地	绳文

No.	遺跡コード	遺跡名	種別	時代
25	NF57-2045	相川I	集落跡	绳文・奈良・平安
26	NF57-2102	相川II	散布地	绳文
27	NF57-2182	鳴石	散布地	绳文
28	NF57-2186	西和野I	散布地	奈良・平安
29	NF57-2189	西和野II	散布地	绳文
30	NF57-2197	小森前	散布地	绳文
31	NF57-0200	中和野II	散布地	绳文
32	NF57-0230	中和野III	散布地	绳文
33	NF57-0147	貝塚	貝塚	绳文
34	NF57-0155	西和野	集落跡	绳文
35	NF57-0167	下和野	集落跡	
36	NF57-0186	古泉館（東館）	城館跡	中世
37	NF57-0163	洞の沢	散布地	
38	NF57-0172	八幡館（高田城）	城館跡	中世
39	NF57-0089	西館	散布地	奈良・平安
40	NF57-0038	柏ヶ沢	貝塚	
41	NF77-0006	川口	散布地	绳文
42	NF77-0037	二日市館（八幡館・須賀館）	城館跡	中世
43	NF77-0058	二日市塚	貝塚	绳文
44	NF77-1033	上戸部館	城館跡	中世
45	NF76-1315	牧田貝塚	貝塚	绳文・平安
46	NF77-1044	水上I	散布地	
47	NF77-1050	水上II		绳文
48	NF77-1066	双六塚	祭祀跡	
49	NF77-1089	要谷館	城館跡	近世

3 歴史的環境

(1) 周辺の遺跡

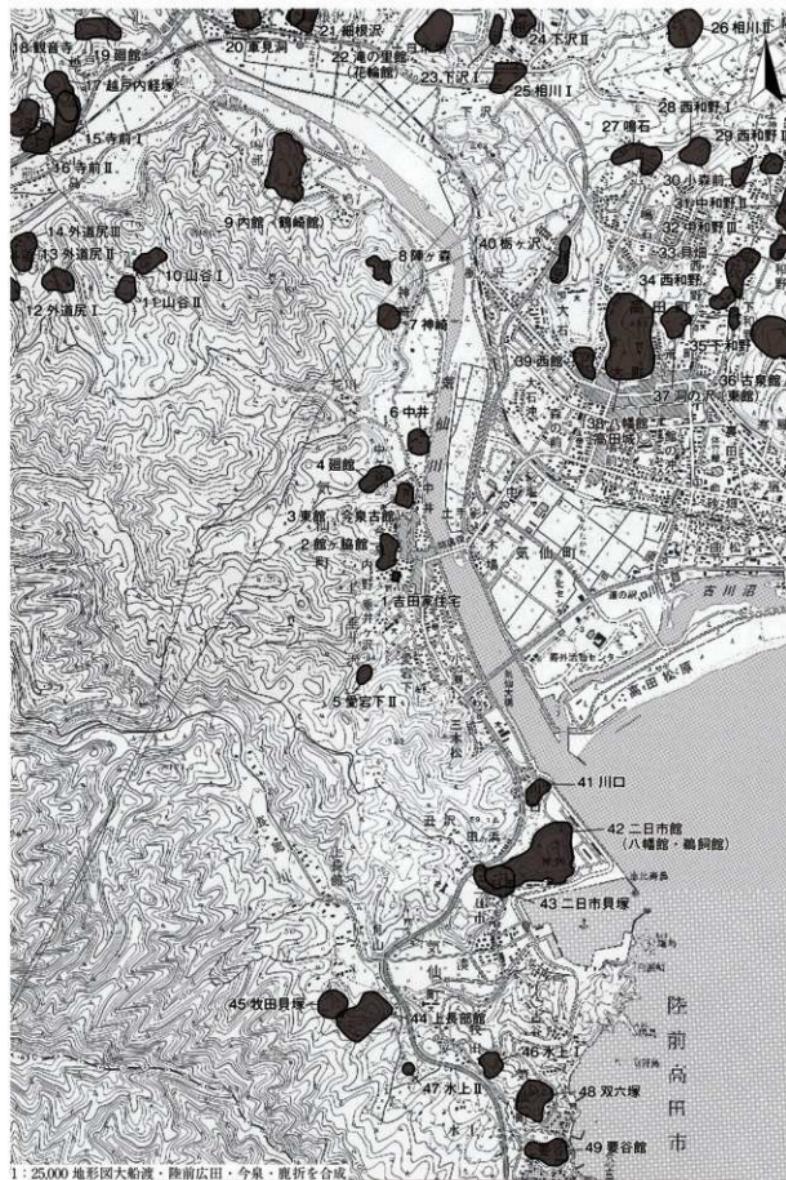
第1表及び第3図に周辺の遺跡を示した。岩手県遺跡台帳（令和元年度版）によると、陸前高田市には計267箇所の遺跡が登録されている。このうち、吉田家住宅を含む計49箇所を図表で掲載した。

陸前高田市では、東日本大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財調査が増加しており、近年における発掘調査成果の蓄積が進んでいる。

28 西和野I 遺跡は、土地区画整理事業高台IVに関連して、(公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが平成27年に調査を行い、古代の方形周溝や土坑が確認された。9世紀後半の土師器のほか、弥生時代後期の土器、後北C₂・D式に比定される続縄文土器が出土した((公財) 岩文理2017)。

38 高田城跡は、土地区画整理事業高田西地区に関連して、(公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが平成26・27年の2ヵ年に亘って調査を行い、16世紀後半までに廃絶した中世城館の作事や普請の痕跡が確認された。遺物は、16世紀後半の中国産磁器のほか、中世の茶臼、近世の国産陶磁器、錢貨が出土した((公財) 岩文理2018)。

また、25 相川I 遺跡は、震災以前の一般国道340号道路改築(高田バイパス)工事に関連して陸前高田市教育委員会が平成13年に調査を行い、绳文時代中期後半の竪穴住居跡や奈良時代の竪穴住居跡を確認している(陸前高田市教委2002)。



第3図 周辺の遺跡分布図

(2) 吉田家住宅の来歴

吉田家住宅は、仙台藩領氣仙郡（現在の陸前高田市、住田町、大船渡市、釜石市唐丹）の24箇村を治めていた大肝入の住宅遺構である。吉田家は、安永6年（1777）の「氣仙郡今泉村品替御百姓書出」や同家の系譜帳によると、元和6年（1620）に仙台藩氣仙郡上有住村から今泉村に移住し、同年に「伊達政宗黒印状」（元和6年極月3日）によって吉田右衛門（筑後）が氣仙郡の大肝入に任命された。仙台藩の大肝入は、村方役人のなかでも最上位に位置する役職で、地方有力者が藩から任命され、職掌は代官の命を受けて、管内の行政・司法・警察を掌り、代官所に出任した（高橋 1987）。吉田家は、明暦2年（1656）～延宝3年（1675）の矢作久右衛門と元禄7年（1694）～宝永2年（1705）の松坂十兵衛の期間を除き、宝永2年以降は明治2年（1869）に至るまで、連綿として大肝入の職を世襲してきた気仙地方きっての名家であり、明治期以降は「大庄屋」と呼ばれている。

吉田家の広大な屋敷地には、主屋のほかに土蔵1棟、味噌蔵1棟、納屋1棟、木小屋1棟、門2棟や庭園なども良好に残存していた。このうち、吉田家主屋には主屋を建築した大工棟梁・七五郎の銘が入った墨書箱が残っており、これに享和2年（1802）6月と記されている。高橋によれば、七五郎は文化10年（1813）の「今泉町家敷并代替り之事」や慶応3年（1867）の「氣仙郡高人數御改塗」、龍泉寺跡過去帳、嘉永5年（1852）の「今泉町絵図」、文政元年（1818）の「諸職人御役御定事并氣仙郡村々諸職人名前留」の各史料から、大肝入吉田家へ出入りしていた今泉村の大工棟梁であることが推察されている。また、この墨書箱に記載された年代から、現存する建物は大肝入の吉田宇右衛門尚保の代の普請と推定されている（高橋 1987）。

屋敷地内の土蔵は、残存する棟札から明治14年（1881）に棟梁・吉田忠吉によって建築されたことが分かるが、嘉永5年（1852）の屋敷絵図にもほぼ同規模の土蔵が同じ位置に描かれており、藩政期に建設されたものを明治14年に改修した可能性が指摘されている。また、味噌蔵、納屋（長屋）の建設年代は不明だが、これらも嘉永5年の屋敷絵図にも描かれていることから、藩政期まで遡ることが報告されている（岩手県教委 2006）。

旧仙台藩領内において、この種の遺構がほとんど解体されているなかで、建設年代や大工棟梁名が明確で、現存する文献史料から藩政期の使われ方も一部明らかである本住宅遺構は、仙台藩の地方支配を伝える極めて貴重な遺構である。このことから、平成18年9月26日には、主屋、土蔵、味噌蔵、納屋（長屋）の1件4棟が岩手県有形文化財（建造物）に指定された。

吉田家住宅は現存する住宅であったため、これまでに埋蔵文化財の発掘調査は行われていないが、建築学・歴史学からのアプローチが進められてきた。

建築学では、東北工業大学の高橋恒夫による氣仙大工についての一連の論考が非常に詳しい（高橋 1985・1986・1987）。高橋は、遺構と文献資料から大肝入吉田家住宅を詳説した。また、現況と天保9年（1838）や嘉永5年（1852）の絵図を対比して建物配置の変化を示している（高橋 1987）。平成18年の文化財指定のための調査報告書では、高橋と八戸工業大学の月館敏栄（当時）が主屋、土蔵、味噌蔵、納屋（長屋）について詳細な報告をしている（岩手県教委 2006）。

また、吉田家には寛延3年（1750）から明治元年（1868）まで118年間の大肝入としての執務記録「定留」95冊（寛政11年、文化12年、天保元年の3箇年分を欠く）や「定留頭書（目録）」2冊、伊達政宗黒印状など24冊の計121冊、文政期の氣仙郡村絵図23点、幕末の藩主出馬宿絵図など6点の計29点の合計150点がほぼ完全な形で保存されており、「吉田家文書」として平成7年4月28日

に岩手県有形文化財（古文書）に指定されていた。吉田家文書については、陸前高田市郷土史研究会や岩手古文書学会（初代会長故森ノブ）、陸前高田古文書研究会の尽力によって解説が進められていた。東日本大震災当時、吉田家文書のうち 144 点は市立図書館に保管されており、津波の被害を受けたものの流失は免れ、岩手県立博物館による安定化処理、国立国会図書館による本格的な修復作業が行われた。しかし、吉田家の土蔵にあって被災した伊達政宗黒印状（初代吉田宇右衛門筑後の大肝入任命状）はか 5 点の計 6 点は流失し不明となっている。

また、津波により吉田家住宅は全壊し、調査の結果、被災後の残存率などを踏まえて、土蔵、味噌蔵、納屋（長屋）の附属屋 3 棟は滅失と判断され、平成 30 年 12 月 7 日に主屋のみを岩手県有形文化財として指定継続することとし、名称についても「吉田家住宅」から「旧吉田家住宅主屋」に変更された（陸前高田市ホームページから抜粋）。

現在は、回収された建物の残存部材を活用して、主屋建物を復旧する取り組みを進めている。

参考文献 〔公財〕岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（公財）岩文理

（公財）岩文理 2017 「西和野 I 遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 669 集

（公財）岩文理 2018 「高田城跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 691 集

陸前高田市教育委員会 2002 「相川 I 遺跡発掘調査報告書」陸前高田市文化財調査報告第 24 集

高橋恒夫 1985 「陸前高田地方の民家普請における気仙大工とその技法について－江戸期および明治期の遺構・文献資料を中心にして－」『日本建築学会計画系論文報告集』第 349 号 日本建築学会

高橋恒夫 1986 「社寺普請における気仙大工とその系譜について－江戸期および明治期の棟札・文献資料を中心にして－」

『日本建築学会計画系論文報告集』第 363 号 日本建築学会

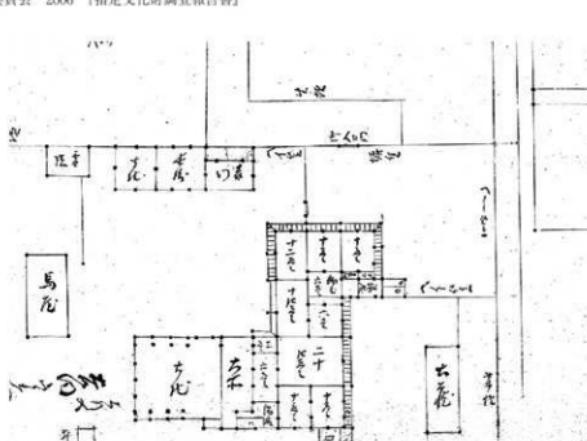
高橋恒夫 1987 「仙台領氣仙郡の大肝入・吉田家住宅とその大工棟梁・七五郎について－遺構と文献資料を中心にして－」

『日本建築学会計画系論文報告集』第 379 号 日本建築学会

月館敏栄 2013 「津波で流失した県指定文化財吉田家住宅の復元活動－CG 及び模型復元－」『岩手県立博物館日曜講座資料』

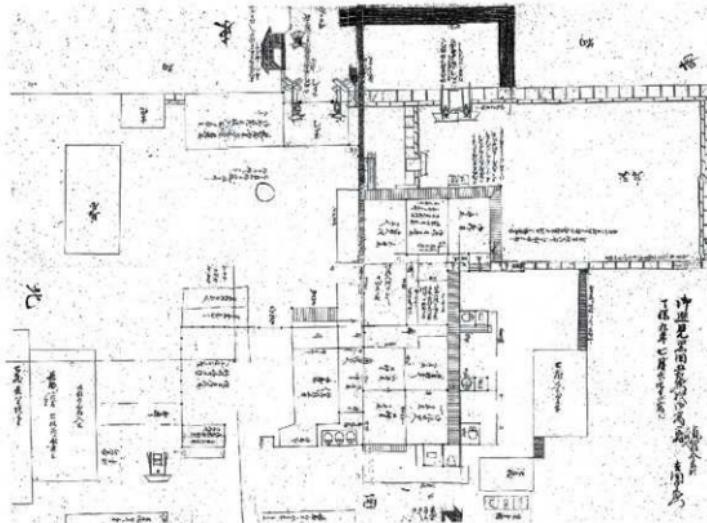
岩手県立博物館

岩手県教育委員会 2006 「指定文化財調査報告書」

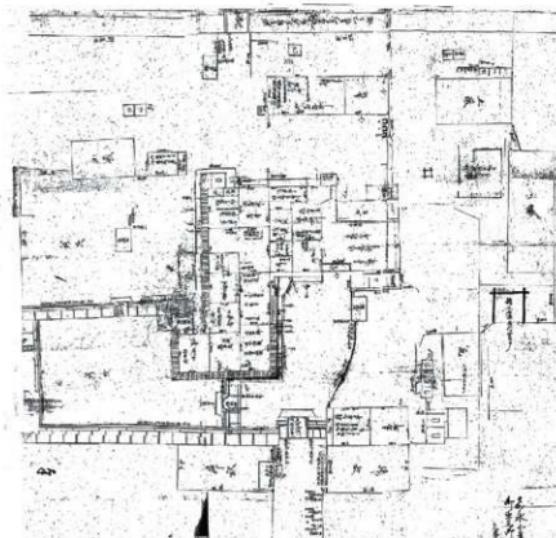


気仙郡今泉町鷹絵図（文化・文政頃（1804-1829）今泉村大工 七五郎書 複写）※屋敷部分を抜粋掲載

第4図 吉田家屋敷絵図（1）



天保 9 年（1838）7月 24 日御巡検使御宿繪図（複写）※主要部分を抜粋掲載



嘉永 5 年（1852）8月 14 日御出馬御宿繪図（複写）※主要部分を抜粋掲載

III 調査と整理の方法

1 野外調査の方法

各遺構の調査方法については、ピットなど小型の遺構は二分法で行い、堅穴などの大型の遺構は、四分法などを用いて行った。各々について堆積土層観察用のセクションベルトを設け、土層を観察しながら精査を進めた。

この際、土層の堆積状況、遺物の出土状況、遺構の完掘状況を中心に写真撮影及び実測を随時行った。実測は、平面図はCUBIC社製造構実測ソフト「遺構くん」を用いて光波トランシットによる電子平板測量（平成26年度）、簡易造り方測量（平成27年度）を行い、断面図は手取りで図化した。また、三次元データを作成するため、株式会社タックエンジニアリングによるデジタル写真測量を平成26年12月19日、平成27年6月30日、平成27年9月2日、平成27年11月11日の計4回実施した。また、作成されたオルソ画像を平面図作成の素図として使用した。

遺構・遺物の写真撮影については、デジタル一眼レフカメラと35mmフィルム一眼レフカメラ（モクロ・カラーリバーサル）を併用した。

遺構実測図の縮尺は1/20を基本としたが、小型遺構は1/10で遺構実測図（第一原図）を作成した。掲載については、凡例に挙げた縮尺にリサイズしている。

なお、調査の進行上、土層断面の写真や実測を省略し、状態の記録や計測等のみに留めた遺構もある。

遺物の取り上げ方は、遺構内出土分については出土遺構名と出土層位を記した。包含層など遺構外遺物は、出土地点・基本層位を記入して取り上げた。

2 整理の方法

遺構の整理は、第1原図や遺構実測ソフトで図化してきた遺構図データを基に、註記や遺構の切り合い、配置などを検討しながら第2原図を作成した。断面図は、トレース図化を行った上で、平面図との合成を行った。現場段階で断面図が作成されていない遺構については、必要に応じて空断面図を作成した。断ち割り断面の記録がない場合もある。遺構名は現場段階で命名したものを優先した。

遺物は種類ごとに大別し、登録番号を付けた。遺物は全点を観察し、種類ごとに掲載遺物を決めた。

本報告書掲載にあたっては、登録番号に改めて掲載番号を付した。ただし、観察表には索引しやすいようにいずれの番号も載せた。観察表の（ ）内数値は残存値、〈 〉内数値は推定値である。

遺物実測は、陶磁器の一部について高精度の実測図を短期間で完成させるために、（株）ラングが特許取得している「物体の構造線自動抽出システム」による図化を行った。

遺物写真は、（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター写場にて写真技師が撮影を行った。撮影には、キヤノンEOS5D（デジタルカメラ・1,200万画素）を使用している。

原稿の執筆・編集は、（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターに業務委託した。

3 野外調査の経過

（第1次（平成26年度））

11月20日から作業開始。除草作業を行う（～12月3日）。11月26日、雨天のため作業休止。11月27日から主屋部分の礎石検出。12月2・3日、雨天のため作業休止。12月4日、主屋礎石周辺の津波堆積層除去、精査。12月5・8日、主屋津波堆積層の除去。12月9・10日、主屋の精査。12月11日、雨天のため作業休止。12月12日、主屋精査と味噌蔵・土蔵・納屋（長屋）の礎石検出。12月15日、除雪、主屋・土蔵の精査。12月16日、主屋・土蔵の精査。12月19日、空中写真測量。2月16日、主屋の礎石列断割、津波堆積層除去。2月17日、早朝に津波注意報発令に伴い、作業休止。2月18～25日、主屋の津波堆積層除去。2月20日、遺構くんによる図化作業開始。礎石精査。2月24～26日、主屋の精査。全景写真撮影。2月27日、主屋北側礎石列際の断ち割り。3月2・3・6・11・13・16日、主屋礎石列の断ち割り・断面実測。3月4・10日、雨天のため作業休止。3月12日、主屋礎石列の断ち割り・断面実測。礎石22断割中に元文一分判金出土。3月16日、平成26年度調査終了。

〈第2次（平成27年度）〉

5月25日から作業開始。堂の前貝塚から調査機材搬送。前年度養生の撤去。調査前全景撮影。5月26日、調査区内の部材仮収蔵庫A棟の撤去と部材の移動。5月27～29日、主屋指定建物基礎検出。6月1日、主屋指定建物台所部分のコンクリート除去。6月2日、主屋指定建物改築部基礎壊乱掘り下げ。6月3～5日、主屋指定建物下屋の犬走り部分のコンクリート除去。主屋指定建物全景撮影。6月8日、土蔵調査前状況撮影・検出。6月9日、雨天のため作業休止。6月10日、土蔵基壇部の四隅検出。主屋機械掘削。6月11日、主屋遺構くん測量。6月12日、雨天のため作業休止。6月15～17日、主屋の基準杭設置。土蔵基壇部検出（～17日）。6月17・18日、味噌蔵遺構検出。6月19～24日、調査員出張のため作業休止。6月25・26日、土蔵跡基壇断面実測。土蔵・味噌蔵検出。6月29日、空中写真測量前の清掃。6月30日、空中写真測量。全景撮影。7月1日、雨天のため作業休止。7月2日、旧土間建物検出。7月3日、部材仮収蔵庫C棟の撤去と部材の移動。味噌蔵・土蔵の基準杭設置（～8日）。7月6日、旧土間建物・納屋検出（～14日）。土蔵平面実測（～24日）。7月17～21日、作業休止。7月22～24日、納屋検出。7月23日、部材仮収蔵庫B棟の撤去と部材の移動。7月26～30日、味噌蔵平面実測。7月27日、納屋全景撮影・掘り下げ。7月28日、土蔵平面実測（～29日）。7月29日、全景撮影。7月30日、納屋・旧土間建物検出。7月31日～8月17日、調査員不在で大部分の作業休止。8月3～5・13・15・16土蔵・納屋平面実測。8月18日、排水作業。8月19・21日、納屋平面実測。主屋下層検出。8月20日、主屋指定建物釜戸検出。8月24日、重機による旧土間建物表土除去（～27日）。主屋検出。納屋指定建物礎石確認。8月25日、納屋全景撮影。8月28日、調査員出張のため作業休止。8月31日、主屋指定建物礎石撮影。旧土間建物検出（～2日）。9月1日、主屋指定建物礎石撤去・撮影・実測。9月2日、空中写真測量。9月3～8日、主屋下層検出。9月4～7日、主屋下層平面実測。9月9日、雨天のため作業休止。9月10日、検出。9月11・13日、排水。9月14日、主屋指定建物礎石撤去・撮影・実測。9月15～17日、検出。9月18～23日、作業休止。9月24・25日、検出（～10月13日）・実測。10月2日、主屋下層建物基礎撮影。10月3～14日、平面実測。10月8日、旧土間下層掘り下げ。SL10断ち割り。10月16～20日、調査員出張のため作業休止。10月21～23日、旧土間建物検出・平面実測（～29日）。10月24日、主屋下層平面実測。10月30日、作業休止。11月2～26日、検出・平面実測。11月11日、空中写真測量、主屋下層建物全景撮影。11月21日、SL09・11～13撮影。11月24日、SB01・SL08・10撮影。11月25日、主屋・旧土間建物最下層炉跡実測・撮影。11月27日、SL01～06・21撮影。11月30日、年代測定サンプル採取。平成27年度調査終了。

IV 検出遺構

1 概要

今回の調査から、吉田家住宅建設以前の遺構として中世の堅穴建物跡1棟・カマド状遺構6基・鍛冶炉21基、吉田家住宅に関わる近世～現代の礎石建物跡7棟・門跡2基・建物に関わるピット141個、礎石237個を確認した。

第7図に調査全体図を示した。調査区は、主屋、土蔵、納屋（長屋）、味噌蔵の4地区に分けられる。この他に小屋跡1棟・門跡2基を確認した。また、第8図は吉田家住宅建設以前の中世末と考えられる鍛冶関連遺構群である。次節は区域ごとに、調査内容を記載する。

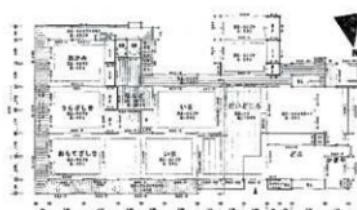
2 主屋

主屋は、岩手県指定有形文化財の上層建物跡1棟と、減築以前の上層建物跡1棟、下層建物跡1棟の計3棟に分けられる。県指定の上層建物跡1は、高橋恒夫による建築学的調査が詳細に行われており、上部構造については平成18年の指定文化財調査報告書と合わせて写真と現状平面図・立面図（東西南北4方向）・梁行断面図が作成されている（高橋1987・岩手県教委2006）。建築年代は、大工棟梁・七五郎の墨書きから享和2年（1802）6月と推定されているが、文化・文政頃（1804-1829）や天保9年（1838）、嘉永5年（1852）の3枚の屋敷絵図では県指定主屋からL字型に曲がり、土間部が北側に9間ほど突き出た形態であったとされる。この部分は、明治初年に維持・管理が困難になつたことから解体され、指定時の直屋に減築されたと報告されている（岩手県教委2006）。上層建物跡2はこの減築以前の建物と推定され、享和2年（1802）に建設されたL字型に曲がる形状を残す遺構と見られる。また、上層建物跡1と重なって、下層から下層建物跡1が確認されており、享和2年（1802）以前に建築された建物の可能性がある。

上層建物跡1（第6・9図、写真図版2・3）

岩手県指定有形文化財の礎石建物跡である。規模は、芯芯寸法で桁行25.5m（84.16尺）、梁間13.5m（44.6尺）である。第6図に文化財指定時の主屋現状平面図を示した。東側の表門側に10疊の座敷が3室並び30疊の続き座敷となっており、最も格式高い「御座ノ間」（おかみ）が南側に突き出している。西側から南側西半にかけては、近年の増改築による工事の影響で、礎石が認められない箇所が多い。また、嘉永5年絵図によると北側西半から北側には土間部である「御臺所」が統いており、北側へ9間ほど突き出た平面L字型を呈していたと見られるが、明治初年に解体されたと報告されている（岩手県教委2006）。

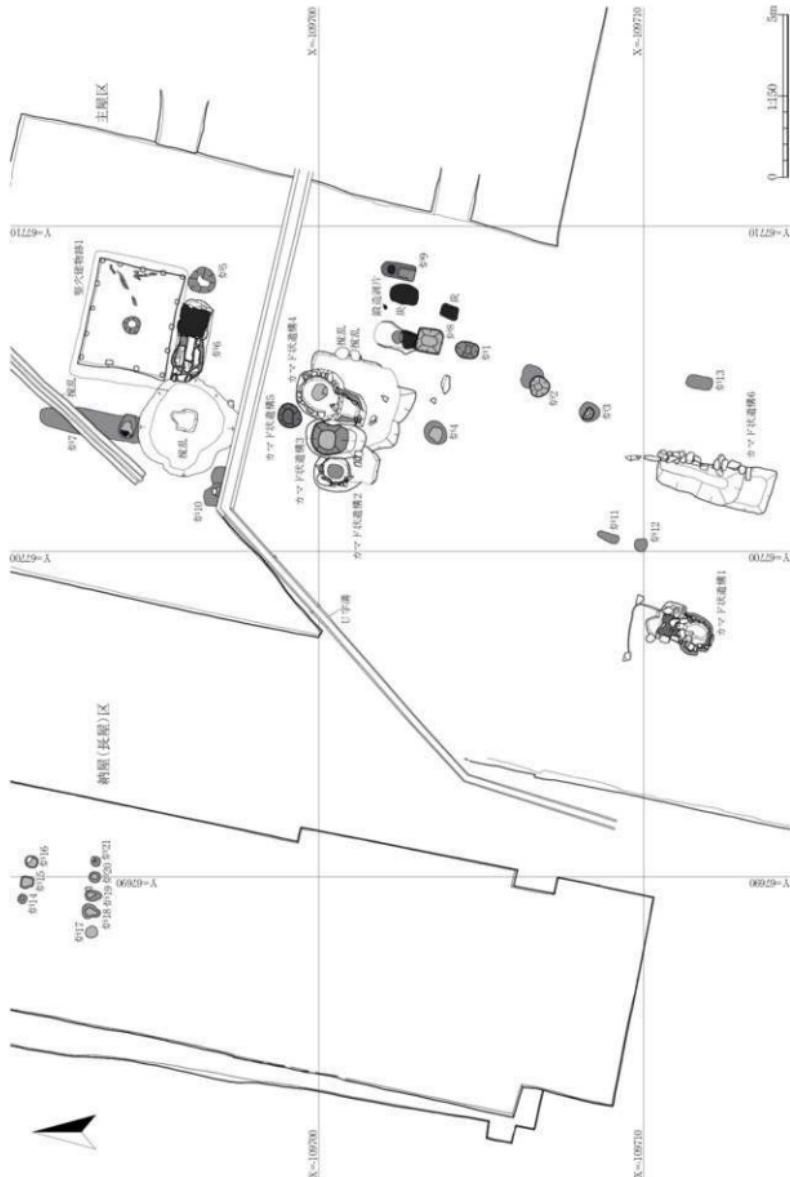
第9図に、今回の調査で確認した遺構平面・断面図を示した。これに、平成18年（2006）に作成された主屋現状平面図を参考にして、間取りと柱



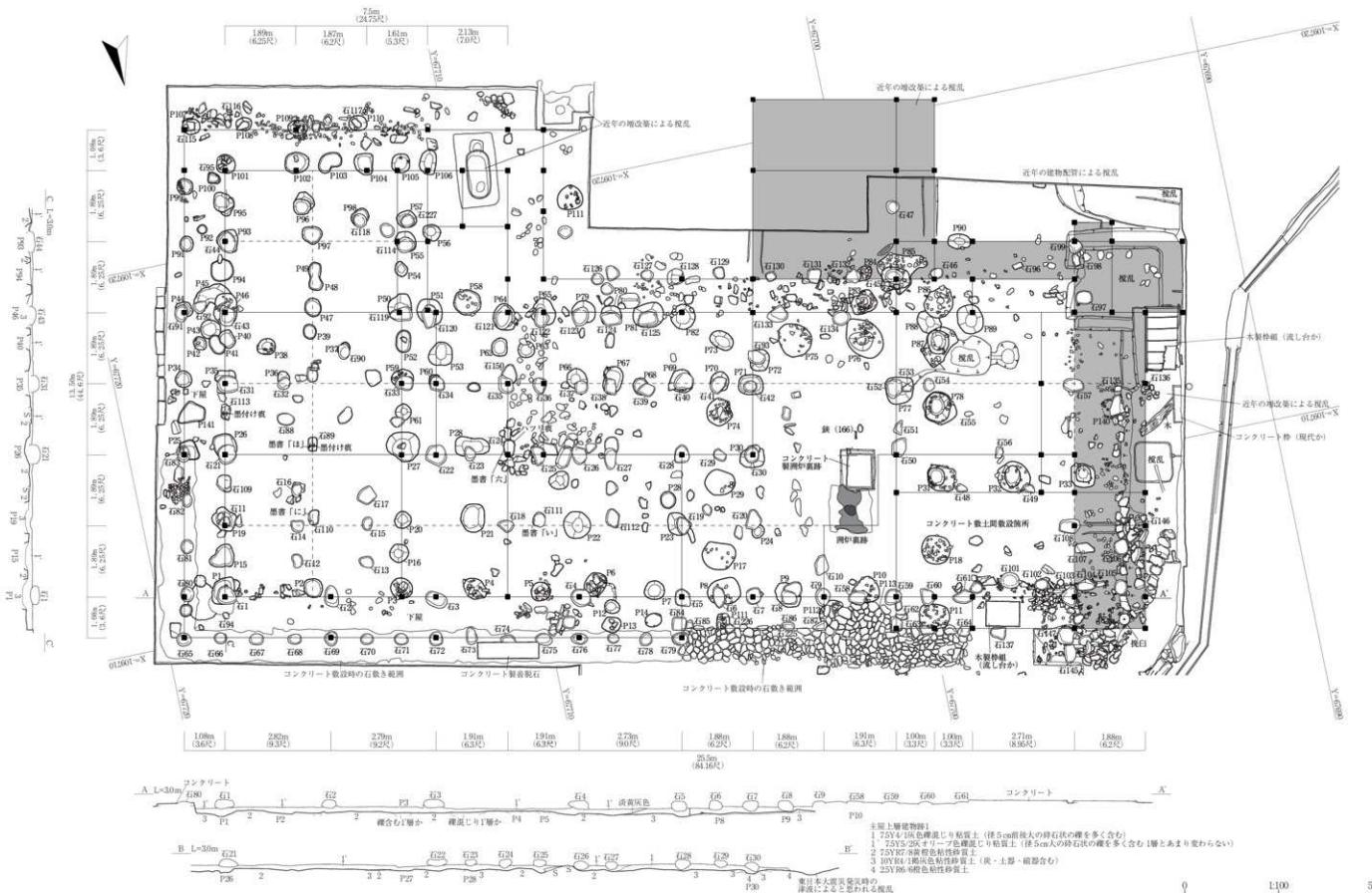
第6図 主屋現状平面図（指定文化財調査報告書）



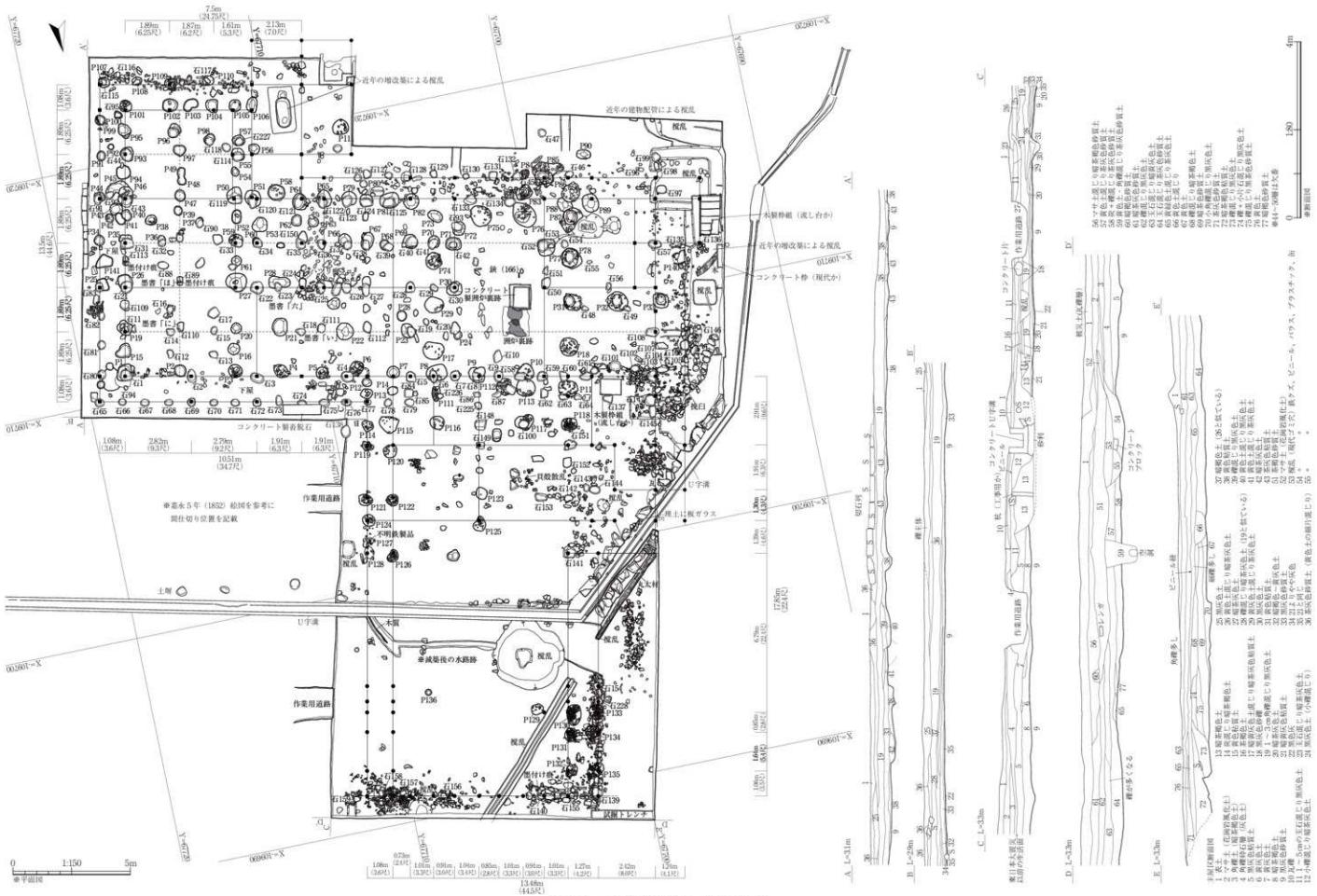
第7図 調査全体図（1）



第8図 調査全体図（2）吉田家住宅建設以前の遺構群



第9図 主屋上層建物跡1



第10図 主屋上層建物跡2・主屋区断面図

の位置を合わせて掲載した。この図面は平成18年文化財指定時の主屋の状況を示しており、間取りも指定時の状況に沿っていることをお断りする。なお、文化財調査報告書は内法寸法で示されている。震災等の影響から柱の位置に礎石がないものや外れている石もあるが、東半は概ね元位置を保っていると考えられる。西半の「ながし」や「かまや」、浴室は近年の増改築工事によって建築されたことから基礎が造られた箇所に布掘りが施されており、乱れていることも確認された。また、土間と勝手口から縁台付近は近年にコンクリートが敷設されており、犬走りには打設前に10~30cm大の亜角礫が敷き詰められていた。座敷のある東側北半から北側の「いま」前までの下屋にも、礎石周りに石敷き→コンクリートが敷設されていた。「いま」前には、コンクリート製沓脱石が設置されていた。

「おかみ」、「うらざしき」、「おもてざしき」の3室が並ぶ座敷部分は、40~50cm大の礎石が整然と認められた。礎石が設置された面は、7.5Y4/1~5/2灰茶~灰オリーブ色疊混じり粘質土で、径5cm大の礎を多く含む層である。平面図の破線は大引きの位置を推定しているが、各間取りの四辺中央と交差する中心には礎石（床東石）もしくは礎石を設置したビットが認められており、緻密な設計に基づいていることが分かる。なお、礎石が失われた箇所についても、根固石が入れられたビットの平面形状を示しているが、掘り方の平面・断面形状は確認されていないため不明である。また、おかみの西側には近年の増改築によって便所が設けられていたが、3枚の屋敷絵図にはこの部分に風呂と南側に突き出た形で便所が設置されていたと推定される（第10図主屋上層建物跡2を参照）。「なんど」と6畳間を挟んだ西側には、前後に2分割され食い違いになった「いま」の空間が認められるが、これは嘉永5年絵図に描かれている「だいどころ」に突き出た空間が「いま」に取り込まれたためと考えられる。「だいどころ」から土間に繋がる箇所は板敷きだが、この部分には改築以前の圍炉裏跡が認められ、南隣にはその後に設置されたコンクリート製の圍炉裏が設けられている。改築前の規模は、1.15×1.2mの方形に黄褐色粘土が貼られており、中心には径0.3m円形の強変焼土、また南北に大きくなればよりもやや弱い焼土が広がる。西端の「ながし」や「かまや」に繋がる部屋や土間は、嘉永5年（1852）と天保9年（1838）の絵図では10畳敷が2部屋並んでいた空間で、増改築以前の建物はこの部分までと考えられる。北側東半、東側、南側を巡って設けられている下屋は、座敷は1.08m（3.6尺）で統一されており、柱間にも約3.0尺ごとに東石が設置されている。南側は失われている礎石が多いが、北側、東側と同様と見られる。南側西半は0.91m（3.0尺）とやや狭く作られており、近年の改築の影響かやや乱れている。

柱間寸法は、現存する上部建物を計測したため端数が出ているが、続き座敷の1.89m（6.25尺）、「なんど」付近の1.91m（6.3尺）、「だいどころ」の1.88m（6.2尺）があるが、概ね6.3尺を基準寸法にしたと考えられる。

前述したが、本遺構の礎石に用いられている礎は40~50cm大のものが多い。これに対して、やや小さめの30~40cmで、墨書きがされる扁平疊が少数だが散見される。石24は「六」、石89は「ほ」、墨付け痕、石110は「に」、石113は墨付け痕があり、主に東石として使用されていることから見て、本建物建築以前の建物で使用されていた礎石の再利用の可能性がある。

整地層を中心には、陶磁器、金属製品、銭貨などの遺物が出土している。詳細はV章及び遺物観察表を参照頂きたいが、中世末~近代（16世紀後半~19世紀）を主体とする遺物が出土している。

大工棟梁・七五郎の墨書き箱から享和2年（1802）に建設されたと推定され、出土遺物の年代とも齟齬はない。これを廻る年代の遺物は、上層建物跡2や下層建物跡1に伴うとみられる。

上層建物跡2（第10図、写真図版3）

上層建物跡1から北側へL字型に延びる土間部の建物を確認したことから、明治初年の解体以前の建物部分として上層建物跡2と呼称する。前述した上層建物跡1の間取りは、L字型の建物形状が示されている最も年代の近い嘉永5年（1852）の屋敷絵図を参考にした。

南側は、間取りはやや異なるが建物規模は上層建物跡1と同じで、芯芯寸法で桁行25.5m（84.16尺）、梁間13.5m（44.6尺）である。これに、L字型に繋がる北側の規模は桁行17.85m（22.4尺）、梁間13.48m（44.5尺）で、西側の張り出し部分を除く梁間は9.82m（32.4尺）と見られる。大半の礎石は解体時に撤去され、附属屋改築材として再利用されたため残存していない。また、根固石の入るピットも部分的に確認されるのみで、建物の規模や間仕切りを推定する根拠として弱い印象を受ける。それでも、南側に繋がる部分と北端と推定される箇所に礎石と見られる石が並ぶ様子が認められる。

南側は、続き座敷の「御座ノ間（おかみ）」と「うらざしき」は、「うらざしき」の押入がなく、「なんど」（御物置）が広く取られている。「おもてざしき」は西側に1間分拡張して12畳敷となつており、これは文化・文政頃（1804-1829）の屋敷絵図と同じ造りとなっている。「おもてざしき」の西側には、14畳敷の「御勝手」があり、上層建物跡1の「いま」として残る。また、「御座ノ間（おかみ）」の西側には「御湯殿」が設けられ、隣接して南側に突き出る形で便所が配置される。西側には、24畳敷1部屋と10畳敷2部屋が連なり、南西隅に便所が設けられる。24畳敷北側の中ノ口（玄関）には3畳敷2部屋と8畳敷1部屋が隣接し、西端に6畳半敷1部屋（文化・文政期絵図では「湯殿」）、さらに北側に8畳敷1部屋と12畳敷の「御臺所」、また北端に33畳敷の「御臺所」と東西に「土間」、入口が造られる（天保9年絵図ではすべて土間）。このうち、中ノ口までは礎石が残存もしくは根固石入りピットが認められるが、これより北側の桁を支える礎石などは確認されなかった。北端には礎石と見られる大砾が散見される。石139は40～50cm大で北西隅の礎石と考えられる。北東隅は根固石と思われる石や20～30cm大の外れた石（石157～159）は認められるが、明確な礎石は転用された可能性があり、判然としない。また、嘉永5年絵図には北西に4畳敷、北東に養垣で囲まれた風呂場が描かれているが、これも推定は困難である。東西には下屋が付けられていたと見られ、東側は1.09m（3.6尺）、西側は1.27m（4.2尺）を測るが、北側は調査区外で確認されていない。また、西側の土間入口付近は後世の水路のため不明である。

礎石は、上層建物跡1と同様に40～50cm大のものが多い。また、北端付近は明確な掘り方を持たず根固石を帯状に敷く傾向が認められ、礎石の設置方法に違いがある。これは、続き座敷を有する特別な空間の南側に対して、「御臺所」や土間を伴う作業場的な空間の違いに起因すると考えられ、すぐに修繕ができるやや簡素な造りとなっていた可能性がある。北端西寄りの石140には建物推定線と同じく東西方向に走る墨付け痕が認められる。

本遺構は、明治初年に解体された土間部を含むL字型の建物で、建築年代は上層建物跡1と同じく享和2年（1802）と考えられる。解体された時期の明治初めは戊辰戦争の敗戦によって陸奥国が5分割され、明治4年（1871）には廃藩置県によって仙台藩が廢止、気仙郡が作られ最終的に岩手県の管轄となる激動の時代であった。明治2年（1869）には仙台藩から大肝入の任を解かれており、同時期に解体が行われたことは関連が指摘される。

下層建物跡1（第11図）

主屋南側西方に重なる、南北に長い長方形プランとして検出した。上層建物跡2の一部とも考えたが、屋敷絵図とも柱位置が合わず、文化財指定時の平面状況図にも記載されないことから、上層建物

跡1・2よりも古い時期の遺構と想定した。

ただし、柱筋は2遺構と同じであることから、連続する時期の遺構と推定される。

規模は桁行8.85m(29.2尺)、梁間5.73m(18.9尺)で、いずれも礎石は認められずに根固石を入れたピットのみが残存する。

柱間寸法は、芯芯寸法で梁間が1.91m(6.3尺)で統一されているのに対して、桁行は中央が1.97m(6.5尺)、その南北が1.82m(6.0尺)、北側1.45m(4.8尺)、南側1.79m(5.9尺)を測る。

P31西側には、P31～33が直行する形で並ぶことから、西側にもプランが延びる可能性もある。

時期を決定する本遺構に帰属する遺物は出土し

ていないが、上層建物跡1・2と方向が揃うこと、享和2年(1802)に建築されたと推定される上層建物跡1・2よりも古い時期であることから、18世紀後半に建てられた礎石建物の可能性がある。

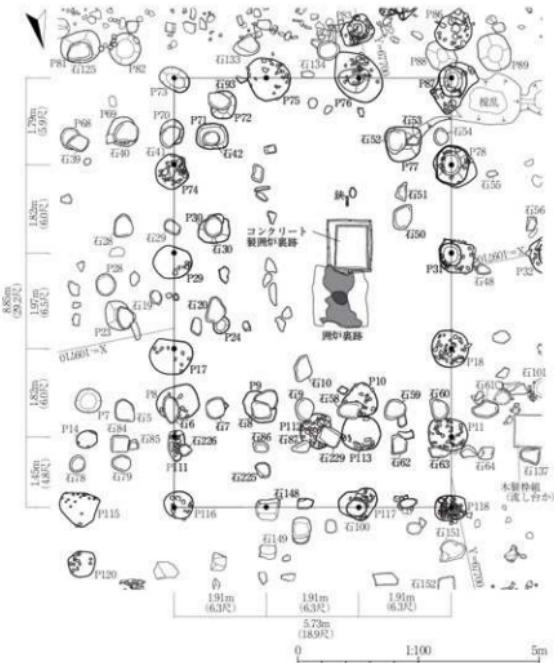
3 土 蔵

土蔵跡(第12・13図、写真図版4)

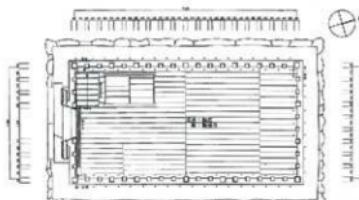
旧岩手県有形指定文化財の礎石建物跡である。上部建物は、主屋と同様に建築学的調査が行われており、指定文化財調査報告書に写真と一階・二階現状平面図、立面図(南・東2方向)、梁行断面図が作成されている(岩手県教委2006)。建築年代は、棟札から明治14年(1881)に棟梁・吉田忠吉によって建設されたと推定されている。

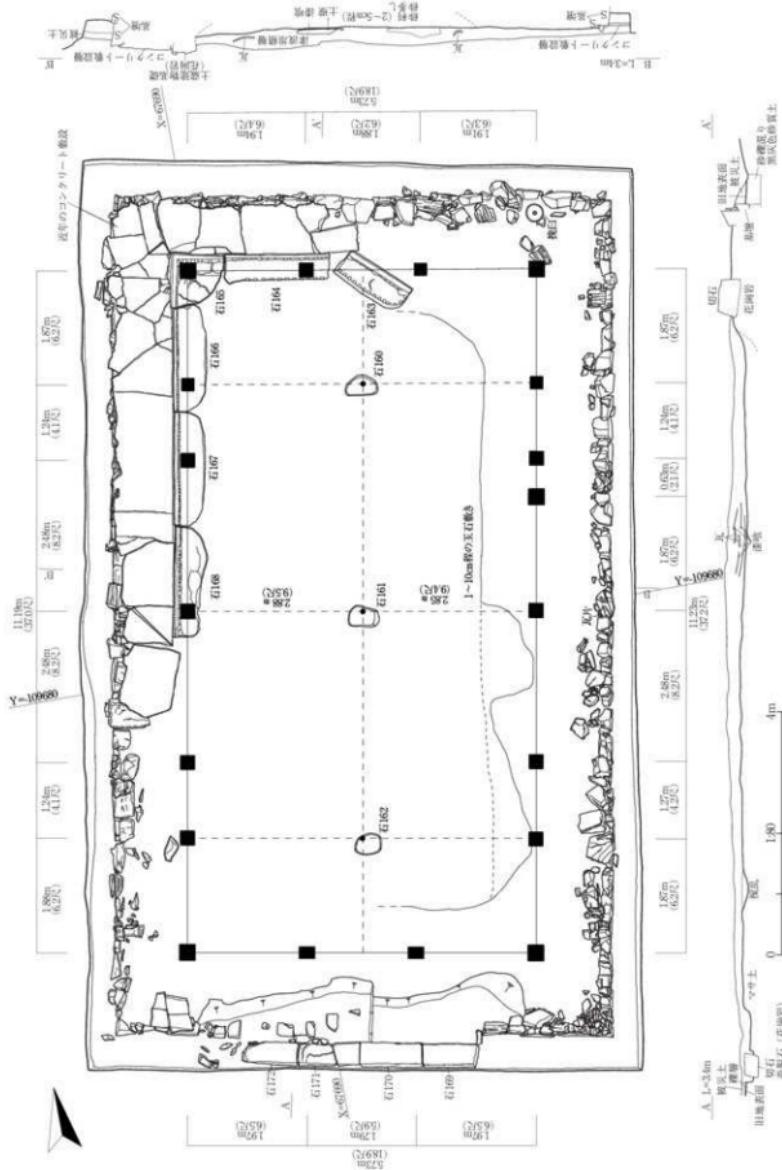
規模は、芯芯寸法で東側桁行11.23m(37.2尺)、

西側桁行11.19m(37.0尺)、梁間5.73m(18.9尺) 第12図 土蔵一階現状平面図(指定文化財調査報告書)



第11図 主屋下層建物跡1





第13図 土蔵跡

で、東側の桁行がやや短い。

第13図に、平面・断面図と指定文化財調査報告書に掲載されている柱の位置を示した。礎石は、津波の影響で全体の3/4が失われており、西側北半と北側西半、中央の床束石3個が残存している。中央の床束石は40~50cm大の扁平蝶が用いられているが、その他は長さ1.2~1.8m、幅40~50cmの長方形の切石が用いられている。北西隅の切石は、建物に合わせて直角面が形作られている。側面には石を削った際の矢穴や成形時の加工痕が認められる。入口部分の南側には、沓脱石に設置された1.0×0.38mのやや短い切石が4個並べられており、失われているが切石によって土蔵へ入る段が作られていたと見られる。柱間寸法は、入口のある南側の中央は1.79m(5.9尺)、両側が1.97m(6.5尺)、北側は1.88m(6.2尺)~1.94m(6.4尺)、東・西側は1.87m(6.2尺)、2.48m(8.2尺)が多く用いられている。中央の大引きが交差する位置にも規則正しく石が並べられており、東側が2.85m(9.4尺)、西側が2.88m(9.5尺)となるように設置されている。礎石の外側には、建物への水の侵入を防ぐこと、また水捌けを良くすることを目的とした基壇が設置されている。基壇は、自然石や略長方形に打ち割った花崗閃緑岩や凝灰岩を二段に乱積みしており、南側に設けられた入口部分以外を巡っている。規模は、8.21m(27.1尺)×13.85m(45.7尺)で、高さ0.61m(2.0尺)である。礎石からの距離は南北で1.24m(4.1尺)、東西で1.30m(4.3尺)になるよう設計されている。また、内部は砂や小石、粘土で版築が施されていると見られ、表面には1~10cm大の玉石が認められる。

土蔵は嘉永5年(1852)の屋敷絵図にも描かれていることから、主屋上層建物跡2とほぼ同時期に建てられたと推定されている。ただし、矢穴が残る切石を礎石に用いる工法は、門跡2基以外の他の建物には認められないことから、基壇から敷き直す全面的な改修であった可能性がある。このことから、古い土蔵を解体した後、明治14年(1881)に棟梁・吉田忠吉によって改めて再建設されたと推測される。

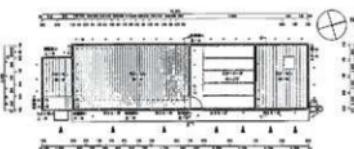
4 納屋（長屋）

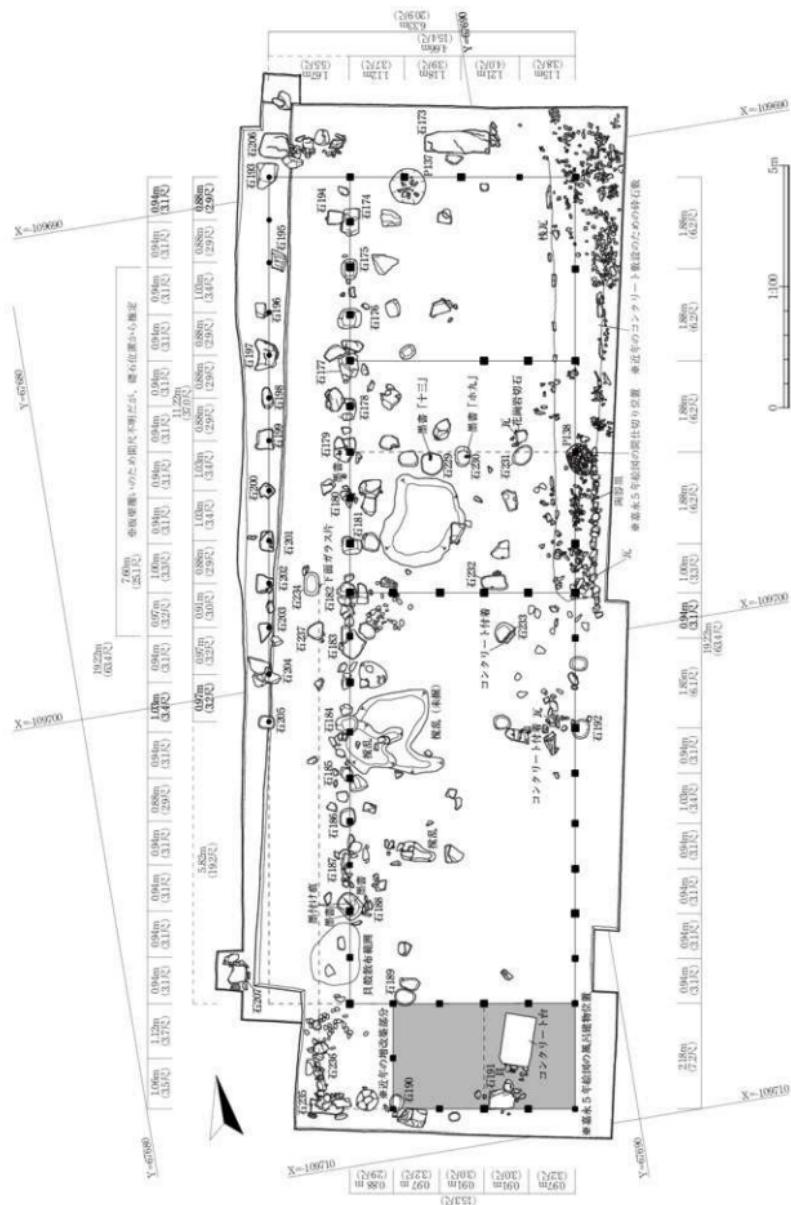
納屋（長屋）跡（第14図、写真図版4）

旧岩手県有形指定文化財の礎石建物跡である。上部建物は、主屋と同様に建築学的調査が行われており、指定文化財調査報告書に写真と現状平面図、立面図（南・東2方向）、梁行断面図が作成されている。切妻造の建物で、南北に棟高の異なる建物を接合した形態を示しており、南側の低い棟の柱には馬屋の入口に横に渡す馬塞棒（ませぼう）の痕跡が認められる。このことから、元来は馬屋として土間敷の建物であったことが推測されている（岩手県教委2006）。また、月館は南側は納屋、北側は別当馬車小屋としている（月館2013）。

規模は、芯芯寸法で桁行19.22m(63.4尺)、南側梁間4.64m(15.3尺)、北側梁間4.66m(15.4尺)で、南側の梁間がやや短い。南側に付く下屋は近年の増改築によるが、嘉永5年の屋敷絵図には東半に風呂建物が描かれている。また、この箇所の西側には石235・236などの礎石が認められ、これを北側へ延長した箇所にも石234・237が設置されることから、下屋が西面と南面に付けられていた可能性がある。

西側の拡張部分から建物と軸が揃う礎石列 第14図 納屋（長屋）現状平面図（指定文化財調査報告書）





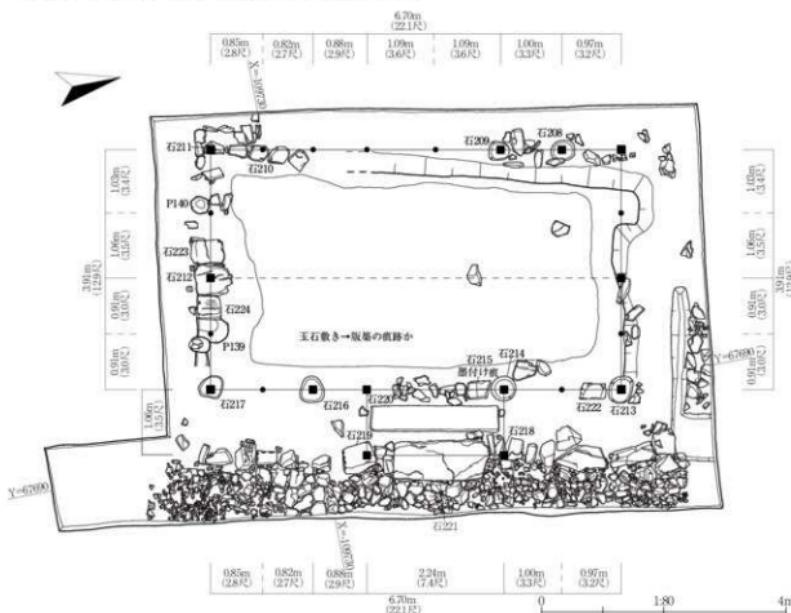
第15圖 納屋（長屋）跡

(石 193～205) を確認した。建物からの距離は 1.67m (5.5 尺) で、やや幅広い下屋であった可能性がある。下屋は建物の南西隅の列まで延びると考えられるが、南側の礎石は確認されなかった。建物の西側は柱が 3 強の間隔で隙間無く設けられていることから考えると、土間敷の下屋であったと推測される。また、北西隅に石 206、北側に脊脱石と見られる石 173 の切石が置かれていることから北面にも下屋があり、北側建物への入口が設けられていた可能性がある。北側に入口があったとすれば、切石が用いられるのは土蔵跡を改築した明治 14 年 (1881) 以降と考えられることから、少なくとも改修はこの時期であると推測される。指定文化財調査報告書によれば、内外の改造が大きく、特に背面の外壁は土壁が落とされ、板壁で覆われていると報告されており、前述の下屋を解体した際の影響と考えられる (岩手県教委 2006)。

嘉永 5 年絵図によれば、本遺構は北側 3 間が「臺所」、南側 5 間が「貯所」と描かれている。この時期の間取り位置を図に示した。この位置にはやや外れるが石 229～231 が認められ、このうち石 229 には墨書「十三」、石 230 には墨書「ホ九」が記されており、旧主屋で用いられた礎石の転用と考えられる。石 179 に墨書、石 188 にも墨書と墨付け痕が認められる。

建物の東側礎石は、震災の影響と近年のコンクリート敷設工事のために大半は失われている。写真から、コンクリートの打設は東側の礎石（基礎部分）から犬走りまで行われていると見られ、この工事の際に大半の礎石は撤去された可能性がある。

幾度かの大規模な改修が行われていると考えられるが、建物西側に残る 40～50cm 大の礎石、墨書きの残る旧主屋礎石の転用、建物そのものに切石が用いられないことから、主屋上層建物跡 2 と同時期の享和 2 年 (1802) 前後に建設されたと推測される。



第 16 図 味噌蔵跡

5 味 増 蔵

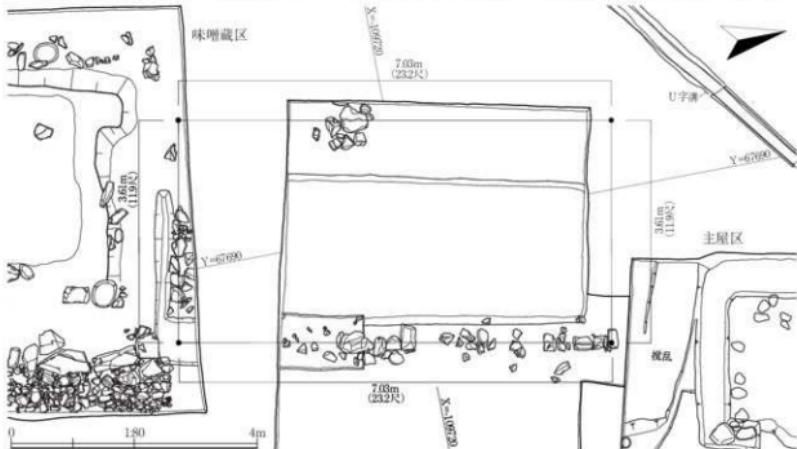
味噌蔵跡（第16図、写真図版5）

旧岩手県有形指定文化財の礎石建物跡である。上部建物は、主屋と同様に建築学的調査が行われておるが、整理段階では指定文化財調査報告書の写真のみで現状平面図などは確認できなかった。二重屋根構造の二階建ての簡素な造りの土蔵で、南側隅の地盤が沈み傾いていることが報告されている。（岩手県教委 2006）。

規模は、芯寸法で桁行 6.70m (22.1 尺)、梁間 3.91m (12.9 尺) である。東側の中央に入口が設けられており、この部分に下屋が付けられている。写真から下屋の柱位置を想定すると、二つの階段状の切石（石 220・221）を挟むように、幅 2.24m (7.4 尺)、奥行き 1.06m (3.5 尺) で造られている。

礎石は北側や西側中央付近は失われているが、その他は元位置をほぼ留めている。文化財指定時の写真を観察すると、北側には切石が用いられていることから、地盤沈下の影響で傾いた箇所を改修した痕跡と考えられる。指定文化財調査報告書の南側隅の地盤沈下の報告も考慮すれば、南側中央の間を空けないで並ぶ石 212・223・224、外れた石のピットである P139 も後世の修繕痕跡と推測される。内部には玉石敷きが確認されていることを見ると、北側の切石による改修は土蔵跡が再建設された明治 14 年（1881）頃と見られ、地盤沈下した基礎修繕に土蔵と同じ手法で内部も版築が施されたと考えられる。

柱間寸法は一定でないが、主に 3 尺前後で設計されており、四隅を入れて東西 4 節所に桁行の柱、南北中央に各 1 節所の梁間の柱が入れられる。礎石が失われている箇所については、向かい合う辺の間尺を 2 分割して掲載しており、礎石が残存する場合は黒四角、残存しない場合は黒丸で表示している。また、中央に大引きの位置を破線で示したが、外れた石片が乗るものと明確ではない。調査では確認されていないが指定文化財調査報告書の写真では基壇の様に並ぶやや小形の切石も認められており、土蔵跡に近い構造の改修が施されていると考えられる。入口のある東側に広がる切石の破片など



第17図 小屋跡

による礫敷きはこれの名残と推測される。

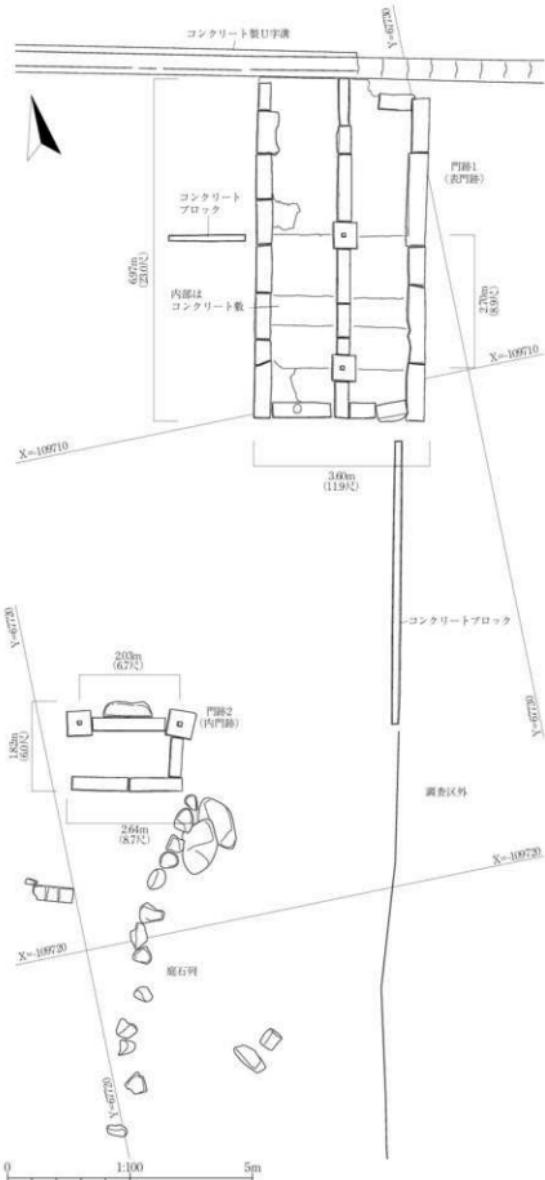
地盤沈下の影響で幾度かの改修が行われていると考えられるが、40～50cm大の礎石、改修箇所以外に切石が用いられないことから、主屋上層建物跡2と同時期の享和2年（1802）前後に建設されたと推測される。

6 小 屋

小屋跡（第17図、写真図版5）

味噌蔵に並んで建設されたと見られる小型の土蔵跡である。嘉永5年絵図では、二間半×一間半の2部屋ある建物として描かれており、3畳敷の「御番人詰所」と「御湯沸処」と記されている。味噌蔵との間は竪垣で塞がれている。大半の礎石が失われており、東側と南側東半、北側の一部に礫が集中している。味噌蔵などに見られた40～50cm大の礎石は認められず、20～30cm大の石を列状に並べているため明確な礎石は不明である。規模は推定値で、桁行7.03m(23.2尺)、梁間3.61m(11.9尺)である。確認された規模と絵図に描かれた規模に違いがあり、桁行は短い可能性がある。

嘉永5年以外の2枚の屋敷絵図には描かれておらず詳細は不明であるが、絵図



第18図 門跡1・2

に基づけば、描かれない天保9年（1838）から嘉永5年（1852）の間に建設された遺構と考えられる。

7 門

門跡1・2（第18図、写真図版5）

主屋東側の市道に面した入口に門跡1（表門跡）と、表門を潜って南側の庭へ向かう箇所を区切るように門跡2（内門跡）が認められる。嘉永5年（1852）絵図にも2つの門は描かれており、門跡1は「大手御門」、門跡2は「詰御門」と記されている。

門跡1は長さ0.9～1.8m、幅0.4mの切石を南北に長い長方形に並べて造られており、東西辺の中央南寄りに約3尺の方形の孔を彫り込んだ一辺0.5mの2つの礎石を設置している。礎石の芯寸法は2.70m（8.9尺）、全体の規模は南北が6.97m（23.0尺）、東西が3.60m（11.9尺）を測る。門は四脚門であったことが報告されており（月館 2013）、近年の改修工事によって内部にはコンクリートが敷設されていた。

門跡2は、門跡1と同じく長さ0.8～1.5m、幅0.3mの切石を東西に長い長方形に並べており、北辺の隅に約3尺の方形の孔を彫り込んだ一辺0.5mの2つの礎石を設置している。北辺中央には、1.0×0.4mの南側を直線に加工した扁平礎1個を設置して、門を潜る際の踏み石としている。礎石の芯寸法は、震災の影響でやや外れているが2.03m（6.7尺）、全体の規模は南北が1.82m（6.0尺）、東西が2.64m（8.7尺）である。内門は「うらぎしき」の中程に設けられており、庭から「おかみ」への侵入を遮断する役割があったと考えられる。

いずれの門跡も、嘉永5年絵図と同じ位置に造られたと考えられるが、切石を用いる手法で造られていることから、土蔵跡と同時期の明治14年（1881）頃に改修されたと考えられる。

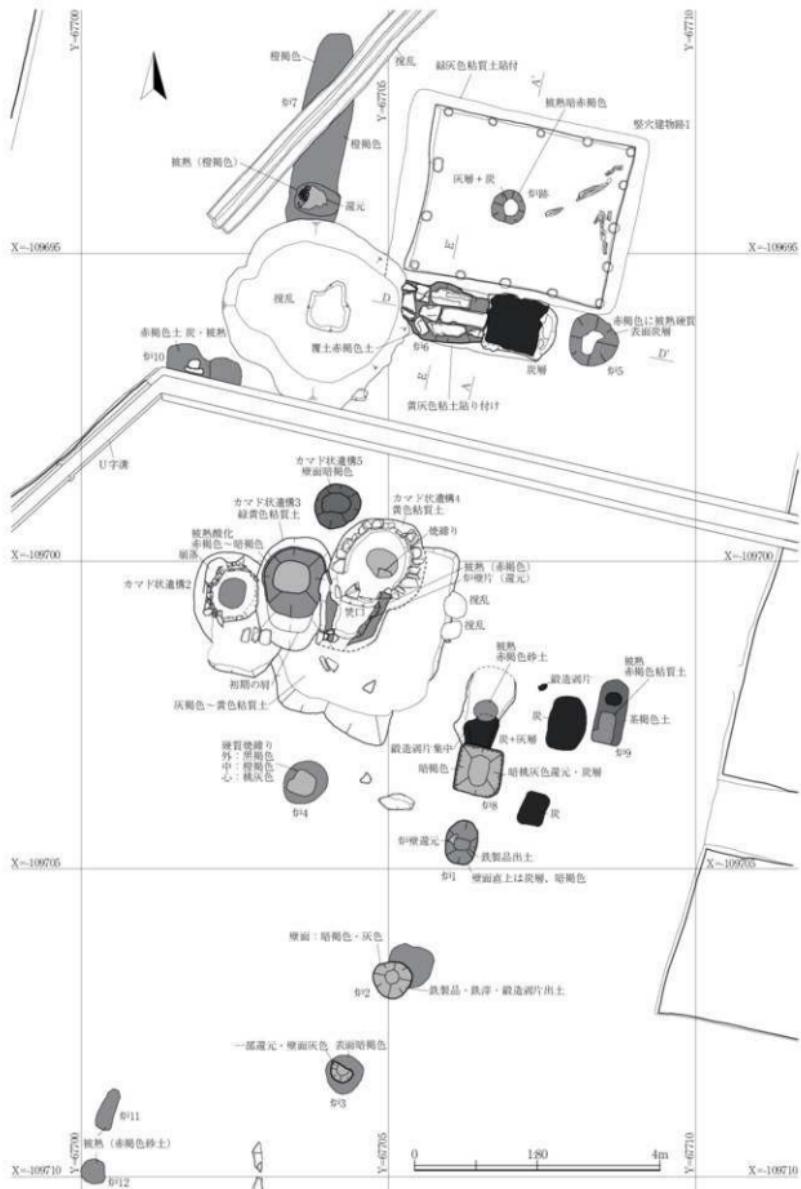
8 吉田家住宅建設以前の遺構群

堅穴建物跡1（第19・20図、写真図版6）

主屋区北側に位置する。炉6と重複しており、本遺構が新しい。規模・形状は長さ3.36m、幅274mの東西にやや長い長方形で、深さ0.16mを呈する。壁際の四隅に4個の柱穴状ピットが設けられており、西辺以外の3辺には等間隔に3個ずつ壁柱穴が認められる。西辺は壁柱穴が2個となっており、建物入口が想定される。柱穴状ピットは径0.12～0.16mで、断面A南側のピットは深さ0.8mと深い。床面及び埋土中の壁際には板状の炭化材が確認されていることから、壁面には土留めもしくは壁板が巡らされていたと推測される。また、壁と壁板の間には緑灰色粘質土が貼り付けられており、防湿のための裏込め粘土と考えられる。床面中央に直径0.52m、深さ0.12mの炉が確認されており（現場：SL24）、底面は一部還元していることから、鍛冶炉として利用されたと推定される。埋土から、207～210 永楽通寶、286・327～334 寛永通寶が出土していることから新しい元禄10年（1697）以降に求められるが、埋土が薄く後世の混入を否定できない。元和6年（1620）には前身の吉田家住宅が存在すること、形状は中世の堅穴建物の特徴であることから、中世後半～末の遺構と考える。

カマド状遺構1～6（第19・20図、写真図版6）

すべて主屋区に位置する。現場段階のSL10をカマド状遺構1、SL11～13をカマド状遺構2～4（対応不明）、未命名をカマド状遺構5・6とした。カマド状遺構2～5は重複しており、5→2→3→4の順に新しくなる。カマド状遺構5は写真では石組みが残存しているが、燃焼面のみ記録されて

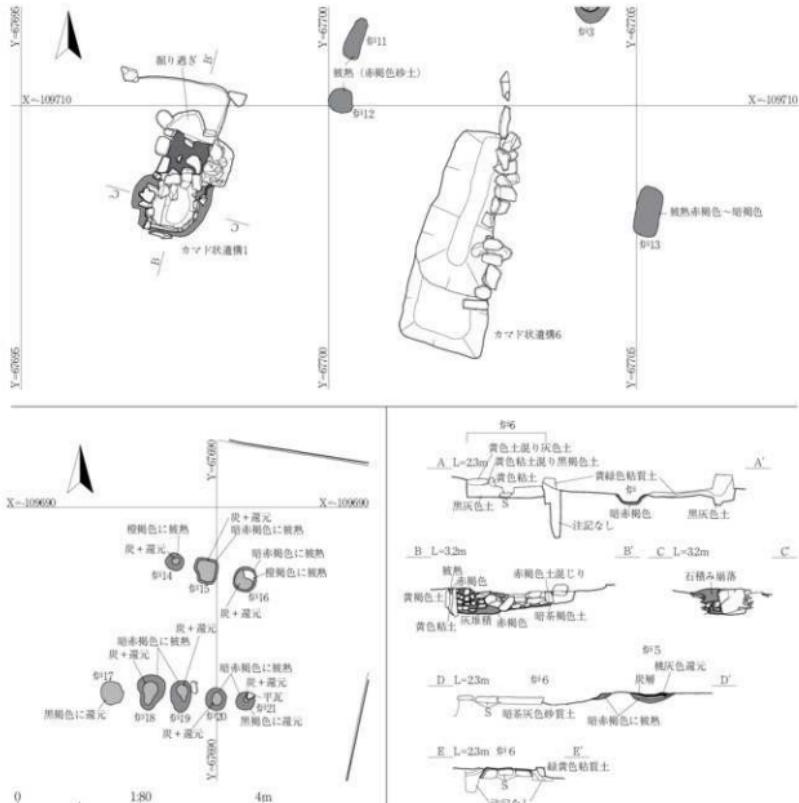


第19図 吉田家住宅建設以前の遺構群（1）

いる。カマド状遺構 1~4 には石組みのカマド部分が残存しており、1・2 は径約 0.7m、3・4 は約 1.0m でいずれも前庭部を有し、この部分が焚き口と推測される。カマド状遺構 6 は記録が少なく不明だが、残骸と見られる。残存するカマド部分の高さはカマド状遺構 1 から約 0.4m、いずれも還元または赤褐色に焼き縮まっている。放射性炭素年代値は警告数値で從えないが、遺構形状と他遺構との関連から中世後半~末に帰属すると考えられる。

炉 1~21 (第 19・20 図、写真図版 6)

すべて鍛冶炉で、主屋区に 13 基、納屋（長屋）区北側に 8 基が集中して確認された。現場段階の SL01~03 を炉 1~3、SL06 を炉 4、SL14~20 を炉 14~20、未命名を炉 7~13・21 とした。炉 6・8 は石敷きの前庭部（作業スペース）や防湿のため焼き縮め、炭化物充填された地下構造を有する。その他は、還元部分を含む燃焼面のみが確認された。170・171 取瓶や鍛冶滓約 12kg、鍛造剥片 187.0g（炉 1）が出土していることから、鍛造と鋳造作業が行われたと考えられる。炉 1~3 の放射性炭素年代値と重複関係から、15 世紀後半~16 世紀代の一連した鍛冶関連遺構群と考えられる。



第 20 図 吉田家住宅建設以前の遺構群（2）

第2表 磁石一覧表

名 称	通称名	ビット 数	上部開口幅 (mm)	用途 (機器・電子機器など)	上部開口幅 (mm)		上部開口幅 (mm)	
					標準	最大	標準	最大
1	主翼	-	-					
2	主翼	-	-					
3	主翼	-	-					
4	主翼	-	-					
5	主翼	-	-					
6	主翼	P8	-					
7	主翼	-	-					
8	主翼	P9	-					
9	主翼	-	283					
10	主翼	-	2.77					
11	主翼	-	2.49					
12	主翼	-	-					
13	主翼	-	-					
14	主翼	-	-					
15	主翼	-	-					
16	主翼	-	-					
17	主翼	-	-					
18	主翼	-	-					
19	主翼	P23	2.59					
20	主翼	P24	-					
21	主翼	P26	-					
22	主翼	-	-					
23	主翼	P28	-					
24	主翼	-	2.60	黒書「六」ハツリ値				
25	主翼	-	-					
26	主翼	-	-					
27	主翼	-	-					
28	主翼	-	-					
29	主翼	-	-					
30	主翼	P30	2.52					
31	主翼	P25	2.49					
32	主翼	P26	2.57					
33	主翼	P59	-					
34	主翼	P60	-					
35	主翼	-	-					
36	主翼	-	-					
37	主翼	P66	-					
38	主翼	P67	-					
39	主翼	P68	-					
40	主翼	P69	-					
41	主翼	P70	-					
42	主翼	P71	-					
43	主翼	P46	-					
44	主翼	P93	-					
45	主翼	P85	-					
46	主翼	-	-					
47	主翼	-	-					
48	主翼	-	2.87					
49	主翼	P32	2.89					
50	主翼	-	-					
51	主翼	-	-					
52	主翼	P77	-					
53	主翼	P77	-					
54	主翼	-	-					
55	主翼	-	-					
56	主翼	-	-					
57	主翼	-	-					
58	主翼	P10-P113	2.82					
59	主翼	-	2.82					
60	主翼	P11	2.81					
61	主翼	-	2.80					
62	主翼	-	2.84					
63	主翼	P11	2.71					
64	主翼	-	2.77					
65	主翼	-	-	規格：壁石Ⅰ				
66	主翼	-	-	規格：壁石Ⅱ				
67	主翼	-	-	規格：壁石Ⅲ				
68	主翼	-	-	規格：壁石Ⅳ				
69	主翼	-	-	規格：壁石Ⅴ				
70	主翼	-	-	規格：壁石Ⅵ				
71	主翼	-	-	規格：壁石Ⅶ				
72	主翼	-	-	規格：壁石Ⅷ				
73	主翼	-	-	規格：壁石Ⅸ				
74	主翼	-	-	規格：壁石Ⅹ				
75	主翼	-	-	規格：壁石Ⅺ				
76	主翼	-	-	規格：壁石Ⅻ				
77	主翼	-	-	規格：壁石Ⅼ				
78	主翼	-	-	規格：壁石Ⅽ				

名 称	通称名	ビット 数	上部開口幅 (mm)	規格：壁付直角	名 称	通称名	ビット 数	上部開口幅 (mm)	規格：壁付直角
79	主翼	-	-	規格：壁石Ⅹ-V	158	主翼	-	2.24	
80	主翼	-	-	規格：壁石Ⅹ-VI	159	主翼	-	2.23	
81	主翼	-	-	規格：壁石Ⅹ-VII	160	主翼	-	2.96	
82	主翼	-	-	規格：壁石Ⅹ-VIII	161	主翼	-	2.99	
83	主翼	P25	2.42	規格：壁石Ⅹ-Ⅸ	162	主翼	-	3.03	
84	主翼	-	-	規格：壁石Ⅹ-X	163	主翼	-	3.33	
85	主翼	-	-	規格：壁石Ⅹ-X-I	164	主翼	-	3.37	
86	主翼	-	2.72	規格：壁石Ⅹ-X-II	165	主翼	-	3.40	
87	主翼	P112	2.75	規格：壁石Ⅹ-X-III	166	主翼	-	3.36	
88	主翼	-	-	規格：壁石Ⅹ-C	167	主翼	-	3.35	
89	主翼	-	2.61	規格：壁石Ⅹ-D	168	主翼	-	3.27	
90	主翼	P27	-	規格：壁石Ⅹ-L	169	主翼	-	2.86	
91	主翼	P44	2.41	規格：壁石Ⅹ-M	170	主翼	-	2.85	
92	主翼	P45	2.52	規格：壁石Ⅹ-N	171	主翼	-	2.85	
93	主翼	P72	-	規格：壁石Ⅹ-O	172	主翼	-	2.87	
94	主翼	-	-	規格：壁石Ⅹ-P	173	納屋	-	2.89	
95	主翼	P100	2.62	規格：壁石Ⅹ-Q	174	納屋	-	2.78	
96	主翼	-	-	規格：壁石Ⅹ-R	175	納屋	-	2.78	
97	主翼	-	2.60	規格：壁石Ⅹ-S	176	納屋	-	2.80	
98	主翼	-	-	規格：壁石Ⅹ-T	177	納屋	-	2.72	
99	主翼	-	-	規格：壁石Ⅹ-U	178	納屋	-	2.66	
100	主翼	P117	2.49		179	納屋	-	2.64	黒書
101	主翼	-	2.59		180	納屋	-	2.79	
102	主翼	-	2.56		181	納屋	-	2.78	
103	主翼	-	2.75		182	納屋	-	2.78	
104	主翼	-	2.61		183	納屋	-	2.77	
105	主翼	-	2.56		184	納屋	-	2.83	
106	主翼	-	2.47		185	納屋	-	2.82	
107	主翼	-	2.55		186	納屋	-	2.81	
108	主翼	-	2.81		187	納屋	-	2.84	
109	主翼	-	2.59		188	納屋	-	2.80	黒書、壁付直角
110	主翼	-	2.61	黒書「E」	189	納屋	-	2.90	
111	主翼	-	2.60	黒書「S」	190	納屋	-	-	
112	主翼	-	2.60		191	納屋	-	2.78	
113	主翼	-	2.63	規付直角	192	納屋	-	2.68	
114	主翼	P56	-		193	納屋	-	2.96	
115	主翼	P107	2.42		194	納屋	-	2.82	
116	主翼	P108	2.48		195	納屋	-	2.91	
117	主翼	P110	2.62		196	納屋	-	2.97	
118	主翼	P98	-		197	納屋	-	2.99	
119	主翼	P90	-		198	納屋	-	3.02	
120	主翼	P91	-		199	納屋	-	2.99	
121	主翼	P64	-		200	納屋	-	3.01	
122	主翼	P65	-		201	納屋	-	2.96	
123	主翼	P79	-		202	納屋	-	2.98	
124	主翼	P80	-		203	納屋	-	2.94	
125	主翼	P81	-		204	納屋	-	2.96	
126	主翼	-	-		205	納屋	-	3.03	
127	主翼	-	-		206	納屋	-	2.93	
128	主翼	-	2.74		207	納屋	-	2.98	
129	主翼	-	2.63		208	規物収	-	3.09	
130	主翼	-	2.60		209	規物収	-	3.11	
131	主翼	-	2.63		210	規物収	-	3.20	
132	主翼	-	-		211	規物収	-	3.20	
133	主翼	-	-		212	規物収	-	3.40	
134	主翼	-	-		213	規物収	-	3.11	
135	主翼	-	2.59		214	規物収	-	3.14	
136	主翼	-	2.37		215	規物収	-	3.19	黒付直角
137	主翼	-	2.71		216	規物収	-	3.26	
138	主翼	-	-		217	規物収	-	3.33	
139	主翼	-	2.28		218	規物収	-	3.16	
140	主翼	-	2.20	規付直角	219	規物収	-	3.26	
141	主翼	-	2.49		220	規物収	-	3.26	
142	主翼	-	2.26		221	規物収	-	3.20	
143	主翼	-	2.31		222	規物収	-	3.14	
144	主翼	-	2.32		223	規物収	-	3.27	
145	主翼	-	-		224	規物収	-	3.41	
146	主翼	-	2.35		225	主翼	-	2.48	
147	主翼	-	-		226	主翼	P111	2.48	
148	主翼	-	-		227	主翼	P37	-	
149	主翼	-	2.48		228	主翼	-	2.36	
150	主翼	-	2.29		229	納屋	-	2.56	黒書「十三」
151	主翼	-	2.64		230	納屋	-	2.78	黒書「十九」
152	主翼	-	2.41		231	納屋	-	2.74	
153	主翼	-	2.45		232	納屋	-	2.86	
154	主翼	-	2.31		233	納屋	-	2.84	
155	主翼	-	2.20		234	納屋	-	3.00	
156	主翼	-	2.23		235	納屋	-	-	
157	主翼	-	2.23		236	納屋	-	-	
158	主翼	-	-		237	納屋	-	3.01	

V 出土遺物

今回の調査で出土した遺物のうち、陶磁器 127 点、土・陶製品 6 点、石製品 9 点、貝・角製品 2 点、金属製品 39 点、錢貨 211 点、炉壁・鉄滓類 5 点の計 399 点を掲載した。以下に、遺物の種類ごとに記載する。

1 陶 磁 器

中世末期～近代の陶磁器 127 点を掲載した。内訳は、陶器 31 点、土師質土器 3 点、磁器 93 点で、いずれも吉田家住宅に関連すると考えられる。なお、個別の特徴については観察表に記載している。

(1) 陶 器

1～6 は碗である。1・2 は肥前産の呉器手碗で、見込みが深く高台と丈の高い高麗茶碗を模した器形を有する。全面に貫入が認められる灰釉が施され、17 世紀後半と考えられる。3 は肥前産の灰釉碗で、高台は露胎である。17 世紀後半と推測される。4 は大堀相馬産の腰折碗で、淡緑灰白色の灰釉に茶褐色の鉄釉を流し掛けている。18 世紀代。5 は大堀相馬産とみられる碗で、内外面に貫入が入る灰釉を施し、高台は露胎させている。18 世紀代。6 は瀬戸美濃系の鎧茶碗で、外面下半に斜位の刻みを施す。外面上半と内面に黒色の鉄釉、外面下半は灰釉を掛け分けている。18 世紀後半～幕末。

7 は小碗である。大堀相馬など東北の窯が産地とみられ、外面上半と内面に失透性の薺灰釉を施している。外面下半～高台は露胎で、外面上半に釉を付けた際に持ち上げた指痕が認められる。19 世紀前半に位置付けられる。

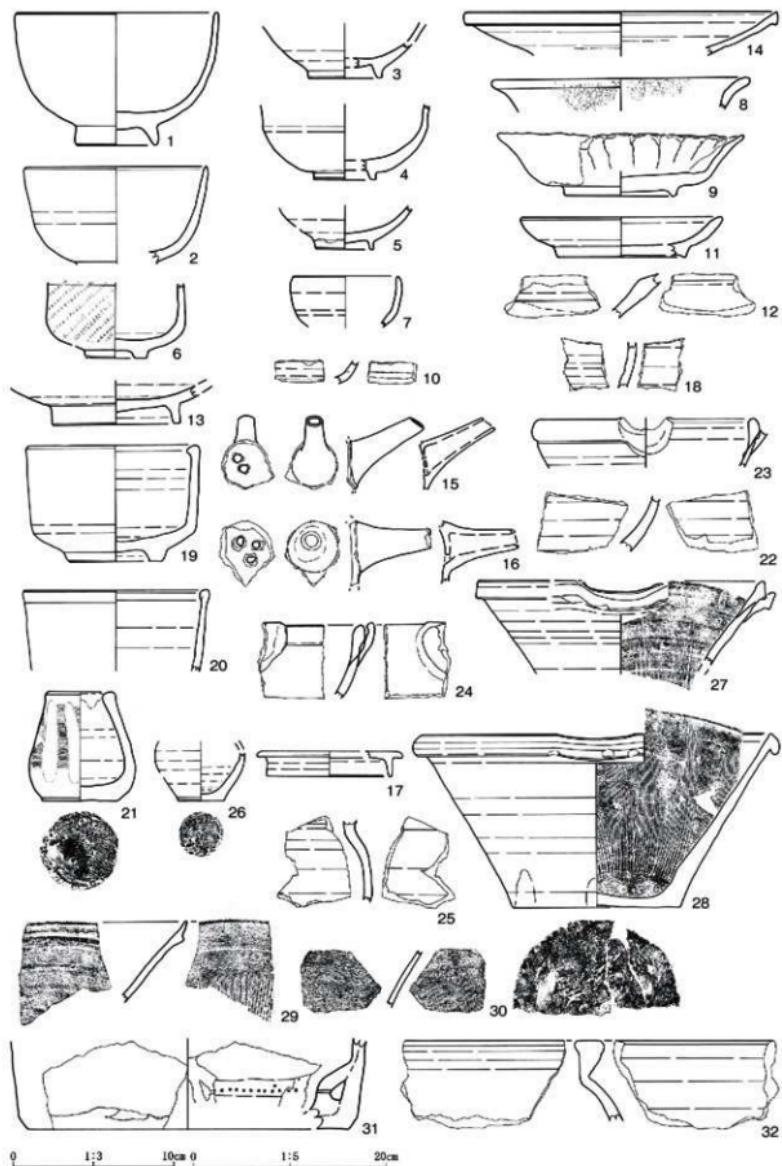
8～14 は皿である。8・11 は美濃産の志野皿で、8・9 は大窯期の 16 世紀後半～末、10・11 は連房式登窯期の 16 世紀末～17 世紀前半に位置付けられる。いずれも長石釉だが、8・9 は貫入が顯著で厚く白濁し、10・11 は前者より釉は薄く、ピンホール状の小さな孔が多く認められる。12 は美濃産の織部折縁皿で、灰釉と綠釉を掛け分けている。16 世紀末～17 世紀初頭と推測される。13 は瀬戸・美濃産の灰釉皿で、内面は蛇目釉剥ぎ、高台部は露胎である。18～19 世紀代。14 は東北産とみられる口縁外帯形の灰釉皿で、内面下半は露胎もしくは蛇目釉剥ぎ、外面下半～高台は露胎である。蓋の可能性もある。

15・16 は急須、17 は急須蓋である。いずれも相馬産とみられ、灰釉を施している。17 は白化粧に鉄絵を描いた上に、透明釉を掛け緑釉を落としている。15・16 は 19 世紀代、17 は 18 世紀後半から 19 世紀までと考えられる。

18 は湯呑である。瀬戸・美濃産で、内面は鉄釉、外面は鉄釉・灰釉の掛け分け。17 世紀前半。

19・20 は火入、21 は灰吹である。19・20 は肥前産、21 は瀬戸・美濃産と考えられる。19 は外面灰釉で高台部は露胎、内面は口縁玉縁の直下まで灰釉で以下は無釉である。20 も同形だが、やや薄手の作りである。いずれも香炉の可能性もある。21 は煙草の灰を捨てる筒形の灰落として、口縁部が窄まる器形を呈する。外面は鉄釉と灰釉を掛け分けしており、内面は口縁のみ灰釉で他は無釉である。19・20 は 17 世紀末から 18 世紀前半、21 は 18 世紀代と推測される。

22 は鉢、23・24 は片口鉢である。22 は瀬戸・美濃産の黄瀬戸鉢もしくは大皿で、大窯期の 17 世



第21図 陶磁器 (1)

紀代と考えられる。23・24は相馬産の口縁切込丸形で、灰釉に薺灰釉かを掛け流している。18世紀後半～19世紀代。

25は壺、26は小壺である。25は瀬戸産で、内外面に茶褐色の錫釉が施される。18世紀代か。26は東北産で、内外面に灰釉、底面は露胎で回転糸切り痕が残る。近代かと推測される。

27～30は擂鉢である。いずれも在地産と考えられ、内外面に鉄釉が施される。28の内底面は使用による摩耗が著しい。30は淡黄色の胎土で、やや薄手の作りである。28・30は18世紀代、27・29は18～19世紀代と広く捉えておく。

31は七輪である。東北産と考えられ、外面は灰釉を施釉し、底部は露胎である。脚付の可能性もある。内面は無釉で、風口が合体した二重構造を呈している。18～19世紀代。

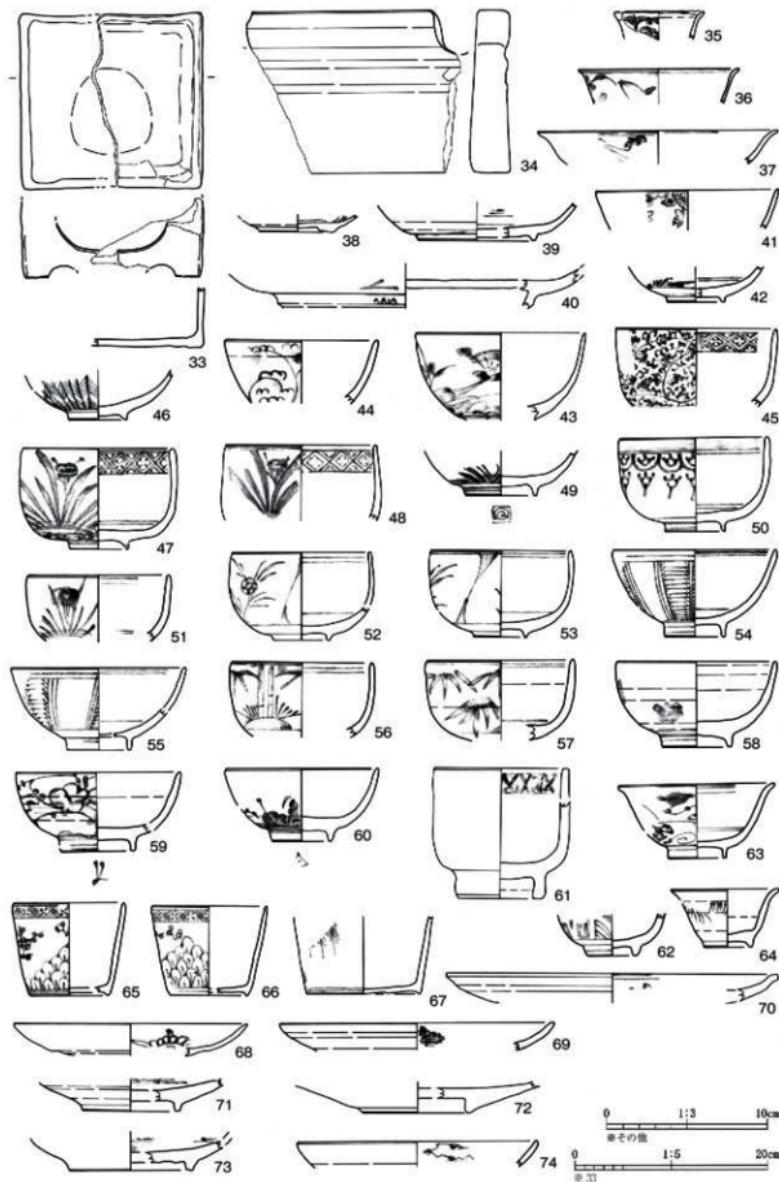
(2) 土師質土器

32は素焼きの甕で、火消壺の可能性がある。平らで幅広の口端部で、ロクロ成形のみで仕上げられている。在地産で、18～19世紀代か。33は箱形脚付の手焙りで、側面に焚き口の孔が空けられている。在地産で、18～19世紀代。34は焜炉の付属品とみられる器台型土製品で、上下が開口した円錐を輪切りにした形状で、短径側に切り込みが入れられている（小林 1991）。在地産と思われ、18世紀初頭～前葉と考えられる。

(3) 磁器

35～40は中国産（景德鎮窯系か）とみられる磁器で、35・36は碗、37～40は皿である。碗の器厚は薄手で、釉を入れても2mm程度である。35端反碗は、体部が八角形かの形状でこれに沿って窓絵が描かれる。36端反碗は草花文を施す。明末清初の17世紀前半。37端反皿も草花文か。17世紀前半。38は蛇目高台の皿で、見込みに菖蒲と蝶文が描かれる。高台に砂を付着し、砂目積みの痕跡を残す。17世紀前半（1620～40年代）。39は見込に团龍文が描かれ、高台には38と同様に砂が付着する。16世紀末～17世紀初頭。40はやや厚手の大きめの皿で、高台に劍先文（鋸歛文）、見込には團線内に草花文を描く。17世紀前半。

41～63は碗である。41は肥前・有田産で、草花文かの染付が施される。器厚は3mm弱と薄手。17世紀後半（1670年代）～18世紀初頭。42は肥前産で外面に水仙文かとみられる文様、見込みに不明（五弁花文か）の文様を施す。17世紀末～18世紀前半と推測される。43は肥前産で外面に水仙文を施文する。18世紀前半。44は肥前産染付で、外面に唐草文を描く。18世紀前半。45は肥前産で外面に唐草文、内面に四方擗文を描出す。18世紀中葉～末葉。46は肥前系の染付で、外面に矢羽根文が施文される。18世紀後半。47・48はいずれも肥前産の揃いの染付碗で、口縁部が内傾する。外面に水仙文、内面に四方擗文、見込みには五弁花文が入れられる。18世紀後半。49は肥前産染付で、外面に水仙文を描き、底裏に「角渕福」銘を入れる。高台に二重團線を引いているが、指抑えのためか無釉となっている。18世紀第2・3四半期。50は肥前産染付で、外面に輪宝文、見込みに五弁花文を入れる。1780～1810年代。51は肥前系の染付で、外面に水仙文を描き47・48に似る。18世紀後半（1780～1810年代）。52・53は肥前系の揃いの染付碗で、外面に捺り靈芝文、見込みには五弁花文が描かれる。1780～1810年代。54・55は肥前産の揃いの染付小広東碗で、外面に算本文、見込みに昆虫文が描かれる。昆虫文は18世紀後半に入れられる。1770～1810年代。56・57は肥前産の揃いの染付碗で、口縁部が内傾する茶飲用とみられる。外面には雪持笠文が描かれる。1780～1810年代。58～60は肥前・波佐見産とみられる染付碗である。58はコンニヤク印判による桐文散らし文



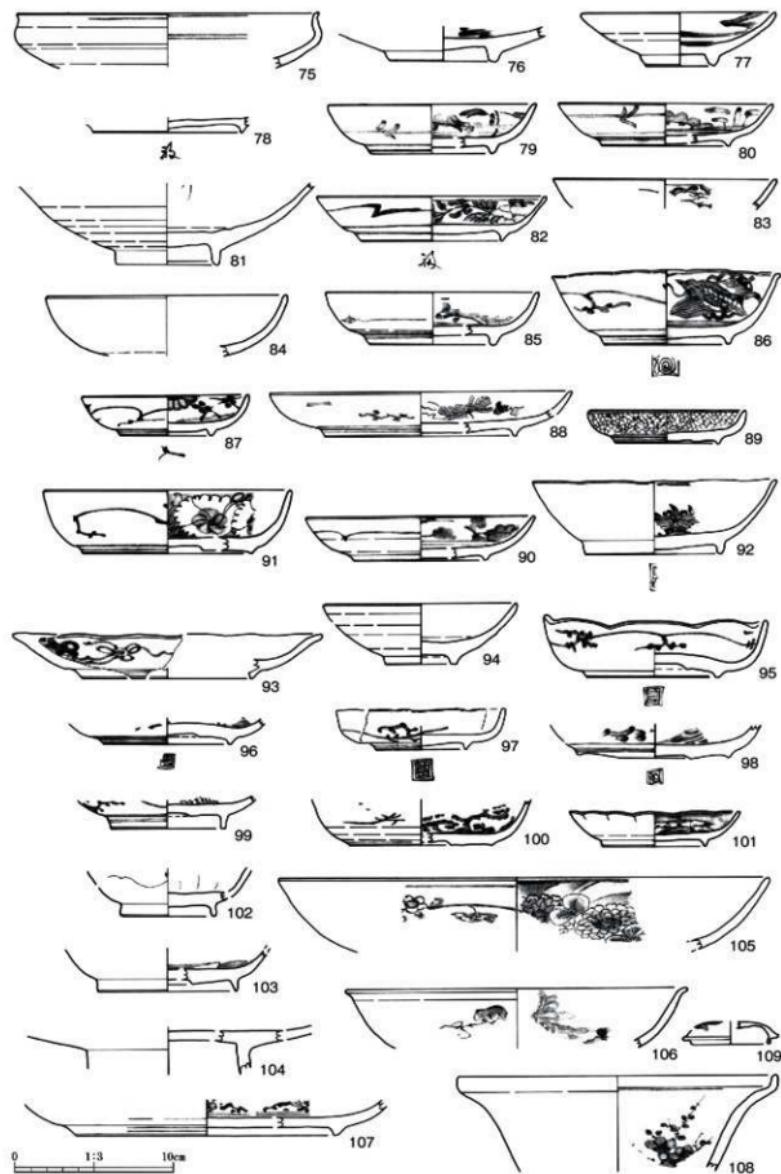
第22図 陶磁器 (2)

を施文する。18世紀後半。59・60は外面文様もほぼ同じの雪輪梅樹文を描く染付碗だが、59の方が一回りサイズが大きい。おそらく揃いの碗と思われる。いずれも裏底に「大明年製」銘が入れられる。18世紀後半。61は瀬戸産の瑠璃釉碗で、2破片に分かれているが同一個体で筒丸形を呈する。外面と高台内に瑠璃釉で口銷、内面に四方禪文を施文する。1820～60年代。62・63は瀬戸産の端反碗で、62は体部下半～底部の破片である。62は窓絵に青海波文と水仙文かが交互に描かれる。63は外面に捺り墨芝文、見込みにも墨芝文が入れられる。いずれも茶飲み用で、19世紀前半（1820年代）。

64は肥前産、罐反りの小杯である。内外面には灰釉を施し、外面には鉄絵で竹文が描かれる。高台には砂が付着している。17世紀後半～18世紀初頭頃。

65～67は猪口である。65・66は肥前産染付の揃いの猪口で、外面には四方禪文と梅樹文、山文が描かれる。18世紀前半と推測される。67は肥前産染付で、蛇目凹形高台を呈する。外面には柳文か、見込みには十字花文が入れられる。1780～1810年代と考えられる。

68～103は皿である。68・69は肥前産染付で、揃いの皿とみられる。内面文様はほぼ同じ菊花文を描く。初期肥前とみられ、1620～40年代と推測される。70～74は、肥前産の初期有田と考えられる染付皿で、1630～40年代に位置付けられる。70は端反皿で、内面に草花文かが描かれる。71は体部下半～底部の皿で、見込みに葡萄文が施される。72は見込みに鳥文かを描く。73は蛇目凹形高台で、高台に砂を付着する。見込みに山水文を施す。74は口銷で、内面に唐草文を施す。75は肥前産の染付皿で、内湾形を呈する。1630～50年代。76は肥前・有田産で、紅葉文かを下絵付け後に灰釉を施している。1630～40年代。77は肥前・有田産で内外面に灰釉を施し、見込みを蛇目釉剥ぎしている。高台は露胎。内面に草文かを施している。1660～70年代。78は肥前産の染付皿で、見込みに水仙文、底裏に「渦福字」銘を施している。1660～70年代。82とはほぼ同類で、長吉谷窯の可能性もある。79は肥前産染付で、内外面には鉄絵による唐草文と圈線を施し、灰釉を掛けている。1690～1730年代。80は肥前系の染付皿で、外面に唐草文、内面に雪輪松竹梅文を描く。1690～1730年代。81は肥前産（波佐見か）と思われる染付皿で、見込みは蛇目釉剥ぎである。合わせて、高台疊付部分も釉を剥いでいる。内面は竹もしくは柳文を描き、灰釉を施している。17世紀後半（1650年代か）。82は肥前産染付で、外面に唐草文、内面には花唐草文と見込みに水仙文を施している。底裏には丸に「渦福字」銘を表している。78とはほぼ同類で、長吉谷窯の可能性がある。17世紀後半（1660～70年代か）。83は肥前・有田産染付で、外面に唐草文か、内面には山水文を描く。17世紀後半。84は肥前産磁器か、相馬産陶器か判断の付かない皿で、染付がされていることから磁器皿に含めた。内外面に灰釉が施されており、高台部周辺は露胎である。見込みに染付が認められるが、不明である。17世紀後半。85は肥前産染付で、染付部分が呉須の発色不良で黒くなっている。外面に唐草文か、内面は草花文もしくは梅樹文が描かれる。高台に砂が付着している。17世紀末～18世紀初頭。86は肥前産染付で、輪花形を呈する。外面は唐草文、内面は4分割の窓絵に芭蕉の葉と実、樹木などが描かれる。見込みには手描きの五弁花文が入れられる。底裏に「角渦福」銘が施される。18世紀前半。87は肥前産染付で、外面に唐草文、内面に菊花文と露草文を交互に配置する。見込みは、コンニャク印判による五弁花文が付される。底裏には「大明年製」銘を表している。18世紀第2・3四半期と推測される。88は肥前・有田産染付で、外面に唐草文、内面に葡萄文を描出する。18世紀前半～中葉。89は肥前産染付で、内外面に冰裂文を施している。蛇目凹形高台で、高台内は釉剥ぎしている。18世紀中葉～末葉。90は肥前・波佐見産の染付皿で、外面に唐草文、内面に花唐草文が描かれる。見込みは蛇目釉剥ぎされている。18世紀中葉～末葉。91は肥前産染付で、外面は唐草文、内面は草花文もしくは花唐草文が施される。18世紀中葉～末葉。92は肥前・有田産染付で、輪花形を呈する。



第23図 陶磁器 (3)

見込みに菊花文が描かれる。底裏に「角渦福」を表している。18世紀後半。93は肥前産染付で、輪花形を呈する。外面は宝尽くし文、見込みに梅樹文が描かれる。18世紀後半。94は肥前・波佐見系で、内外面に藻灰釉を施している。高台部周辺は露胎、見込みは蛇目釉剥ぎされている。18世紀後半。95～97は肥前産染付で、底裏「角筒江」銘から武雄筒江窯で製作されたとみられる。蛇目凹形高台で、高台内釉剥ぎである。95は輪花形を呈し、外面は唐草文、内面は見込みに家屋・幔幕・梅樹文を描く。96は外面に唐草文、内面は花唐草文、見込みに環状松竹梅文を施している。97は外面に唐草文、見込みに壽字などを入れる。いずれも、18世紀後半。98は肥前産染付で、外面は唐草文、見込みに巴文と波文を交互に配する。蛇目凹形高台・高台内釉剥ぎで、底裏に「角渦福」を表している。18世紀代。99は肥前産染付で、外面は唐草文、内面は蛸唐草文、見込みに環状松竹梅文を表す。蛇目凹形高台・高台内釉剥ぎである。18世紀第4四半期～19世紀初頭。100は肥前産染付で、外面は唐草文、内面は蛸唐草文、見込みに十字花文を施している。蛇目凹形高台・高台内釉剥ぎ。18世紀末～19世紀初頭。101は肥前・有田産染付で、輪花形を呈する。内面は波文・松文・帆掛け舟文を描く。外面文様は省略される。18世紀末～19世紀前半。102は肥前・有田産と思われる、型打ちの菊花形皿である。外面は唐草文・透明釉、内面は型打ちの菊花部分を呉須でなぞっている。103は肥前産染付で、おそらく輪花形を呈し、見込みに山水文が描かれる。蛇目凹形高台・高台内釉剥ぎ。佐賀県嬉野市塙田町志田窯で製作された可能性がある。1820～60年代。104は肥前産染付で、残存する高台部の高さから大振りの皿とみられる。内面は山水文が描かれる。1630～50年代と推測される。105は肥前・有田産染付で、外面は花唐草文、内面は菊花文が施される。残存から、直径30cmを超える大皿とみられる。宴席などに用いられたか。1660～70年代。106は肥前産染付の端反皿で、外面は唐草文もしくは葡萄文、内面は山水文を描く。上手物で、長吉谷窯で焼かれた可能性がある。107は肥前系の染付皿で、底径が推定値で16.5cmあり、大皿の部類に入る。内面に花唐草文、見込みに山水文を描く。破断面に焼き緋が痕が認められる。1780年代までを上限とする。

108は鉢である。関西系（京都か）とみられる染付で、朝顔形に開く器形で口端部が直立する。外面は瑠璃釉、内面は梅樹文が施される。19世紀代。

109は蓋物蓋である。肥前産染付で、外面はコンニャク印判で紅葉散らし文を施している。欠損しているが、摘まみ状の把手が付く。18世紀前半。

110は徳利である。肥前産染付で、外面に網目文と花文、内面は無釉である。17世紀後半。

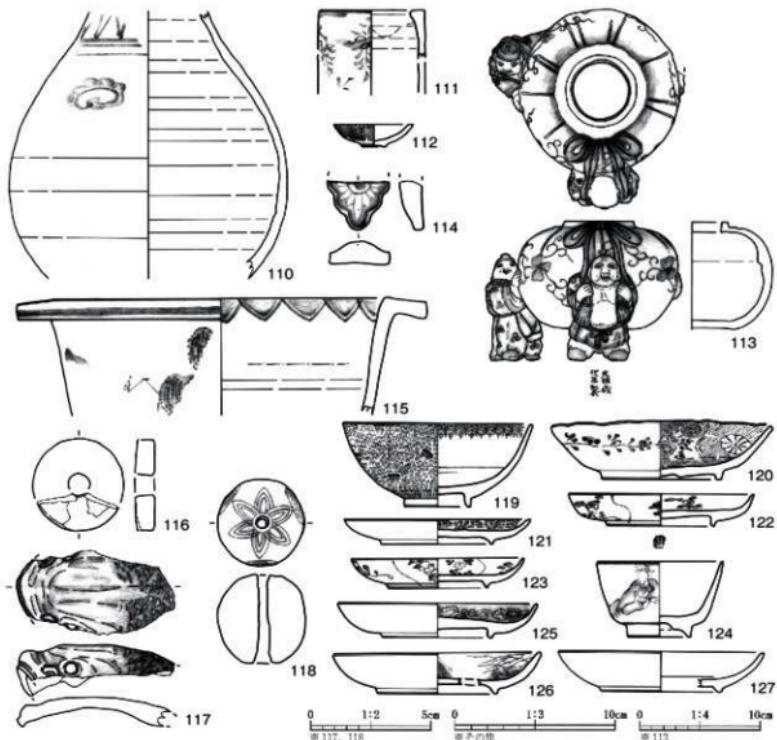
111は花生である。肥前産染付で、筒形を呈する。外面は枝垂れ桜文・幔幕文、内面の施釉は口縁部まで以下は無釉である。18世紀代。

112は紅皿である。肥前系で、中に紅を入れて伏せて置く容器である。外面は貝殻を模した文様、内面は灰釉を施す。型押して製作したとみられる。1780～1860年代。

113・114は香炉である。113は肥前・有田産染付で、蓋付きの七宝富寿染付香炉である。宝尽くしをモチーフとしており、布袋、恵比寿、大黒天が宝袋を持ち上げている図が表現される。蓋に七宝が造作されているが、欠損している。外面は花唐草文、内面・底裏は無釉である。底裏に、「大明成化年製」銘を表している。19世紀後半以降。114は肥前・有田産染付で、香炉の脚部である。外面は花文、内面は無釉である。欠損部に、接着を促す格子目が入れられている。18世紀後半～19世紀前半。

115は植木鉢である。関西系（湖東焼など）かとみられる染付で、鍔縁桶形を呈する。外面は山水文、口端部に雲文、内面に連弁文を施す。内面口縁部より下は無釉である。1800～1860年代。

116は戸車である。肥前産かとみられ、外径は推定で5.7cm、内径は1.4cm。白磁を施しているが、外縁は使用によって摩滅している。1780年代を上限とする。



第24図 陶器（4）

117は鯉形の置物である。肥前・有田産染付で、型押しで成形されている。18世紀前半。

118は風鏡である。掛け軸の軸先に付ける錘で、孔に房を通す。2個一対で用いる。肥前・有田産かの染付で、上部に連弁文、側面に亀甲文や青海波文、麻葉文などを型押しし、赤色は上絵付けで仕上げている。近代以前と推測される。

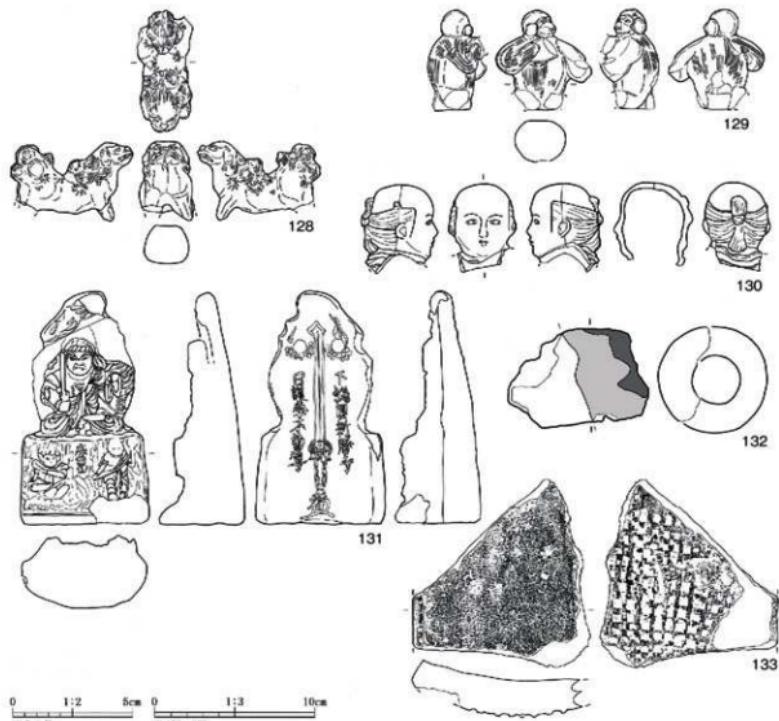
119～127は近代の磁器である。119～123は型紙摺り、124～127は銅版転写で施文されている。119は瀬戸・美濃産の碗で、外面は鹿の子文、銀杏文、格子文、内面は輪宝文、見込みに環状松竹梅文が表現される。1870～1910年代。120・121は肥前系の皿で、120は輪花形を呈する。外面は梅文、内面は花散らし文、見込みに環状松竹梅文が施される。蛇目凹形高台・高台内袖剥ぎである。121は内面に鹿の子文、輪宝文、見込みは連弁文内に鳥・青海波・梅花文、中心に花文を施す。いずれも明治～大正時代と広く捉える。122・123は瀬戸・美濃系もしくは東北産かで、123の方がやや小振りだが揃いの皿とみられる。内外面ともに捺り雲芝文が表現される。122の裏底に変形字の銘があるが、判読できない。いずれも明治～大正時代と考えられる。124は瀬戸・美濃系の碗で、茶飲み用とみられる。外面は人物文で、蛇目凹形高台・高台内袖剥ぎである。125は肥前系の皿で、内面に花

唐草文、見込みに桐文、麻葉文、亀甲文を施す。126は瀬戸・美濃系の皿で、内面に山水文。127は肥前産の武雄窯江窓で製作されたとみられる皿で、口鋸で内面に青磁釉、見込みは家屋文と山水文を表している。124～127は、いずれも明治後半～大正時代とみられる。

2 土・陶製品

土・陶製品6点を掲載した。このうち、中世の鍛冶に関連する羽口と古代とみられる瓦以外は、吉田家住宅に関連すると考えられる。個別の特徴については観察表に記載している。

128～131は土・陶人形類である。128は素焼きの獅子である。型押しで成形されており、左右を型取り後に貼り合わせて指で馴染ませている。脚4本のうち、1本のみを残存する。表面に雲母粉か彩色の痕跡が認められる。18世紀代の在地産か。129は素焼きの猿である。手づくねで成形されており、座位で鉄砲を構えている。腕・脚を欠損している。18世紀代の在地産か。130は陶製の町人風童子の人形である。前後を型取りして、貼り合わせている。中空で、頭部のみを残存している。18～19世紀代。131は素焼きの置仏である。前後を型取りして、貼り合わせている。中空で、底面に貫通

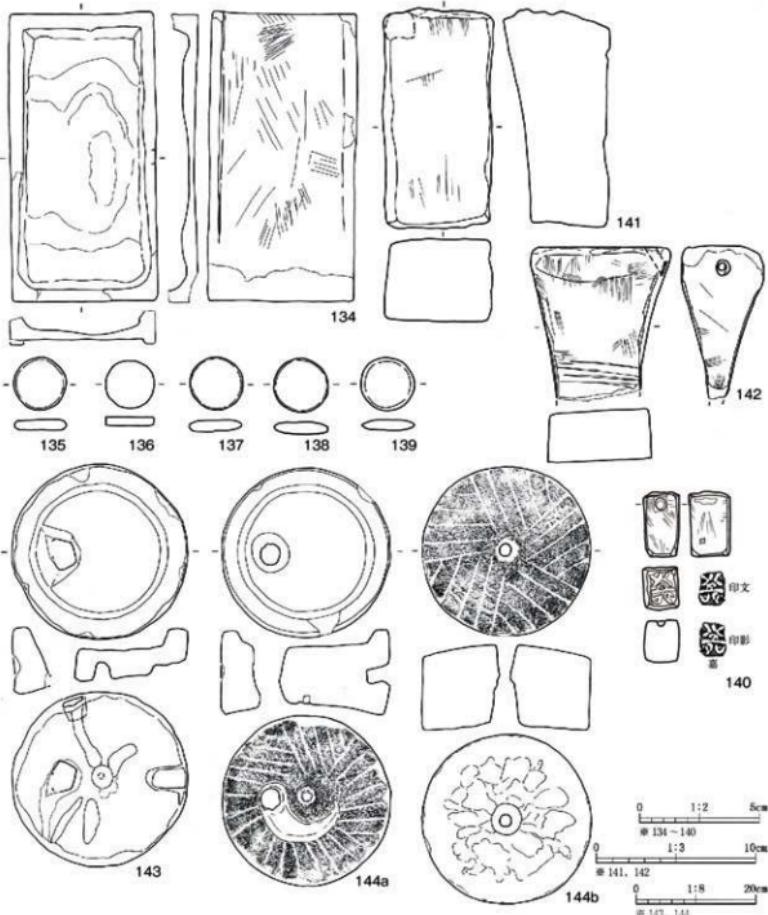


第25図 土・陶製品

孔が1箇所穿たれている。不動明王座像を模しており、正面に「成田山」、裏面に「日護座不動尊」「下總国新勝寺」銘が入れられている。下總國産かで、土産品の可能性がある。18~19世紀代か。

132は土製の羽口である。先端部のみ残存で、先端に溶着滓が付着し、炉壁に設置されていた部分は約3cm還元している。溶着滓が少なく、サイズも小振りであることから、鍛冶関連で用いられた可能性がある。遺構の年代からは、中世後半の可能性がある。

133は土製の平瓦である。凹面は布目痕、凸面は格子目叩きが認められる。桶巻きで製作されたとみられ、側面には切り込み痕、面取り整形痕が観察される。古代の可能性もある。



第26図 石製品、貝・角製品

3 石製品、貝・角製品

石製品9点、貝角製品2点を掲載した。いずれも、吉田家住宅に関連すると考えられる。個別の特徴については観察表に記載している。

134は硯である。頁岩製の長方硯で、側面は垂直、裏面は左右に脚を有する。上下に海部を有するが、全体に剥落が著しく、陸部は使用による影響か大きく窪んでいる。裏面にも擦痕が多く認められる。時期は中世～近世と広く捉える。硯は他に7点出土している。135～139は碁石である。いずれも円盤形で、135・136は白色、137～139は黒色である。白色の135は貝殻を円盤状に研磨、成形したもので、136は鹿角を厚さ約0.4cmに成形したものである。黒色は137が頁岩製、138・139がホルンフェルス製である。碁石は他に22点が出土している。140は印章である。文字は陰刻（白文）で彫り込まれており、印文はおそらく「嘉」1文字と読み取れる。文字の上方向の側面に、指付（さぐり）と見られる盲孔1箇所が施される。印面に朱の付着が認められるが、全体には墨が付着することから後世の痕跡の可能性がある。141・142は砥石である。141は砂岩製で、正裏面に使用痕があり、正面は大きく擦り減っている。上面に3本の深いキズがあり、また下面の一部が平らになっていることから、使用の際に固定した痕跡の可能性がある。142は流紋岩製で、上面から右側面にかけて斜めに貫通孔が穿たれており、紐通し孔とみられる。正裏、左右側面が使用されており、大きく擦り減っている。下面是折損の可能性もある。砥石は他に2点出土している。143・144は挽臼である。143は上白、144は144aが上白、144bが下白の揃いである。143は全体に風化が著しく、表面が大きく剥落している。下面是使用によるものか大きく擦り減っており、傾いている。このため、挽き目は不明瞭で溝らしき窪みは認められるものの、分割線などは読み取れない。上面は外縁が全周し、挿入孔が穿たれる。側面には、上面の孔から外れた位置に挽き手挿入孔が設けられているが、これとは別に上面の孔の対向する位置にも挿入孔が穿たれる。遺存状態では下部が失われているため、下面に孔が露出した形となっている。凝灰岩製。144aは、擦面は四形に湾曲しており、芯棒部分には後世かナットが埋め込まれている。ふくみは20cmを測り深く、側面には方形の挽き手挿入孔が穿たれる。4分割した主溝が刻み込まれているが不均等であり、副溝も5～7条と揃っていない。144bの下面是、成形時の彫り込みが残っている。芯棒挿入孔は、上下からそれぞれ穿たれている。主溝は5分割で、副溝は4条入れられている。花崗閃緑岩製。挽臼は他に、別個体の上白・下白各1点が出土している。

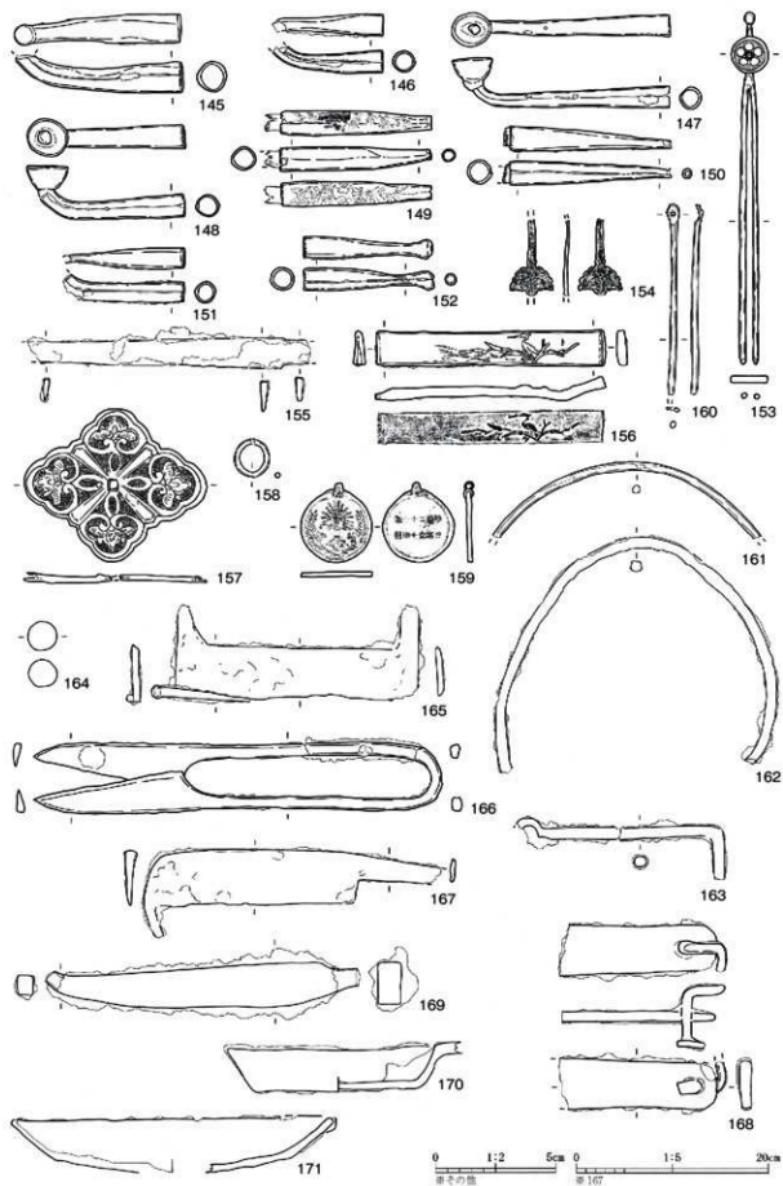
4 金 属 製 品

中世末期～近代の金属製品39点を掲載した。いずれも鍛冶関連の遺物以外は、吉田家住宅に関連すると考えられる。個別の特徴については観察表に記載している。

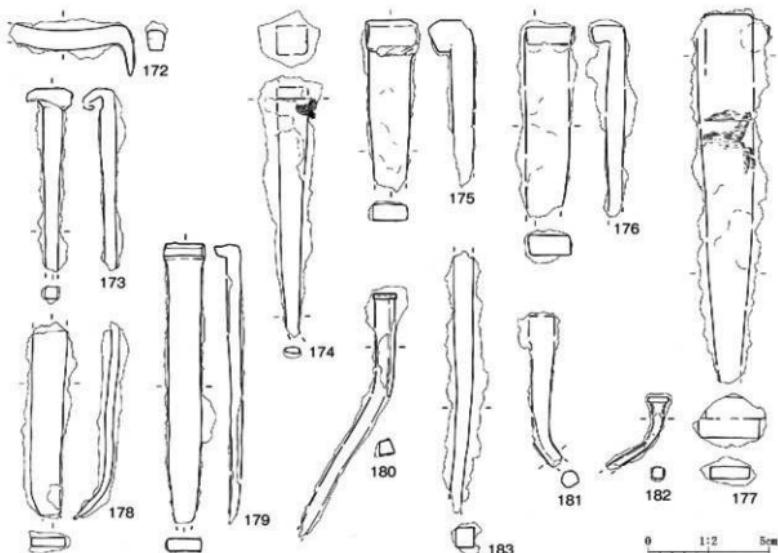
145～152は煙管である。このうち、145～148は雁首、149～152は吸口である。いずれの雁首も脂返しが湾曲しない形態で、火皿は椀形を呈する。吸口はすべて一枚造りであることから、古泉編年でいう4～5類、Ⅲ～V期を主体とする17世紀後半～18世紀中頃に位置付けられる。また、148雁首と149吸口は真鍮製で化粧が施される点で共通することから、同一個体と推測される。

153・154は簪である。153は銀製の平打簪で、飾りに耳かきと「丸に梅鉢」紋が入れられる。出土時は硫化して黒く変色していた。154は銅製の平打簪とみられ、桐文が装飾される。耳かきと2本足は欠損している。いずれも江戸時代後半か。

155は小柄の刃部、156は小柄の柄部である。155は残存値で11.7cmあり、先端部と中茎を欠損し



第27図 金属製品（1）



第28図 金属製品(2)

ている。身幅から、156の刀身であった可能性がある。鉄製。156は銅製で、一枚の板から作られた片手巻きの構造である。長方形の本体に小縁の付いた画題の枠を目一杯抜けた形で、波と宿り木の上に鷺文が高打出しによって高彫りされている。七子地は細かく整然と並んでいる。江戸時代後半か。

157は引出などの飾金具である。銅製の2枚重ねで、「四方剣花菱」紋を表す。158は環状青銅製品で、青銅製品の一部とみられる。159は日本赤十字社社員章である。裏に「明治21年(1888)・日本赤十字社」銘が入れられる。日赤の社員(会員)のうち、一定額以上を寄付した者に付与されるメダルで、社員章は綬の違いによって分かれるが、綬は出土していない。160は棒状青銅製品で、火箸の可能性もある。端部を平らにして、径1.5mmの孔が穿たれている。

161～163は把手(弦)である。161は銅製、162・163は鉄製である。161は中央に使用による凹みがある。162は鉄瓶や小型の鍋などに付属していたか。163は中央が半円状で、吊り下げる際の横ずれを防止していたとみられるが、別部品の可能性もある。

164は火縄銃の弾丸とみられる。径12mmで、鉛製である。165は火打金である。鉄製で、鎌型を呈する。長さ4.1cmの角釘が固定している。166は鍔である。鉄製で、長さ17.0cmである。腐食が著しい。167・168は鉈である。いずれも鉄製で、167は先端が嘴状に突出する石突き鉈である。168は鉈の中茎部分のみとみられ、刃部や木製の柄部分は欠損している。目釘に角釘を使用している。169は棒状不明鉄製品である。用途不明だが、断面の推定では長方形の断面形が想定され、中茎部分とみられる箇所があり、柄に装着すると考えられる。170・171は取瓶と推測される。鍛冶作業に用いられたと考えられる皿状の鉄製品で、鋳造の際に溶かした鉄などを掬い取る機能が想定される。柄が付いていた可能性もある。172は鎧である。鉄製で、木材と木材を繋ぎ合わせる建築部材である。

173～179は舟釘である。いずれも頭L字型の釘で、舟の築造に用いられたとみられる。水漏れ防

止に巻き付けて打ち込んだ縄や木質が付着したものもあり、使用されたものも認められる。

180～183は角釘である。頭方形の釘で、使用によって曲がっているものが大半である。

5 錢 貨

中世～現代の銭貨 211 点を掲載した。内訳は、中世渡来銭 30 点、平安通寶 1 点、古寛永 51 点、新寛永（文銭）20 点、新寛永（背元）1 点、新寛永 61 点、鉄一文銭か 8 点、真鍮四文銭 2 点、精鉄四文銭か 1 点、元文一分判金 1 点、仙台通寶か 9 点、文久永寶 1 点、雁首銭 5 点、不明模鋳銭 1 点、近代硬貨 7 点、外国硬貨 11 点、玩具メダル 1 点である。個別の特徴については観察表に記載している。また、附編に川根正教氏による詳細な分析を掲載したが、紙数の都合で図版を割愛して収録した。また、銭貨等の図版は原寸とすべきだが、同様の理由で縮小して掲載したことをお断りする。

184～213は中世渡来銭である。いずれも銅銭で、184は北宋銭の治平元寶（初鑄年 1064 年）、185は北宋銭の元祐通寶（初鑄年 1086 年）、186・187は明銭の洪武通寶（初鑄年 1368 年）、188～212は明銭の永樂通寶（初鑄年 1408 年）、213は永樂通寶と思われる模鋳銭である。このうち、187 洪武通寶と 189～212 永樂通寶は、小形で裏面平坦、凹凸が少ない等から、国内模鋳銭の可能性がある。

214は平安通寶である。銅銭の平安通寶は鋳造時期が特定されておらず不明で、東北地方で流通していた可能性が高い資料である。詳細は附編を参照されたい。

215～265は銅銭の古寛永で、初鑄年は寛永 13 年（1636）である。266～285は銅銭の新寛永（文銭）で、初鑄年は寛文 8 年（1668）である。286は銅銭の新寛永（背元）で、初鑄年は元禄 10 年（1697）である。287～347は銅銭の新寛永（背なし）で、初鑄年は元禄 10 年（1697）である。348～355は鎌で判読が難しいが鉄銭の寛永通寶（鉄一文銭）とみられる。初鑄年は元文 4 年（1739）である。356は真鍮製の寛永通寶（真鍮四文銭）で、裏面 11 波である。明和 5 年（1768）鋳造か。357は真鍮製の寛永通寶（真鍮四文銭）で、赤銅色を呈する。文政 4 年（1821）鋳造か。358は鎌で判読困難だが、裏面 11 波とみられることから、鉄銭の精鉄四文銭かと考えられる。万延元年（1860）鋳造か。359は金製の元文一分判金で、表面の上下に桐紋、裏面は文・光次・花押が陽刻される。小桙印あり。整理段階で、実資料が金庫にあり観察できない状態であったことから、図は金庫に入る前の資料を撮影した画像をトレースした。このため、実物とは異なる可能性があることを付記する。調査メモによれば、法量は 17.56mm × 10.30mm × 1.64mm、重量は不明である。360～368は鎌で判読困難な資料が大半だが、形状から鉄製の仙台通寶と考えられる。初鑄年は天明 4 年（1784）で、仙台領内に限って通用 3 筵年の期限で許され、石巻で鋳造された（兵庫埋蔵銭調査会 1996）。369は銅銭の文久永寶で、文久 3 年（1863）に鋳造された四文銭である。370～374は煙管の雁首を潰して加工した私鋳銭で、江戸時代前半に流通したとみられる。375は銅銭の不明模鋳銭である。

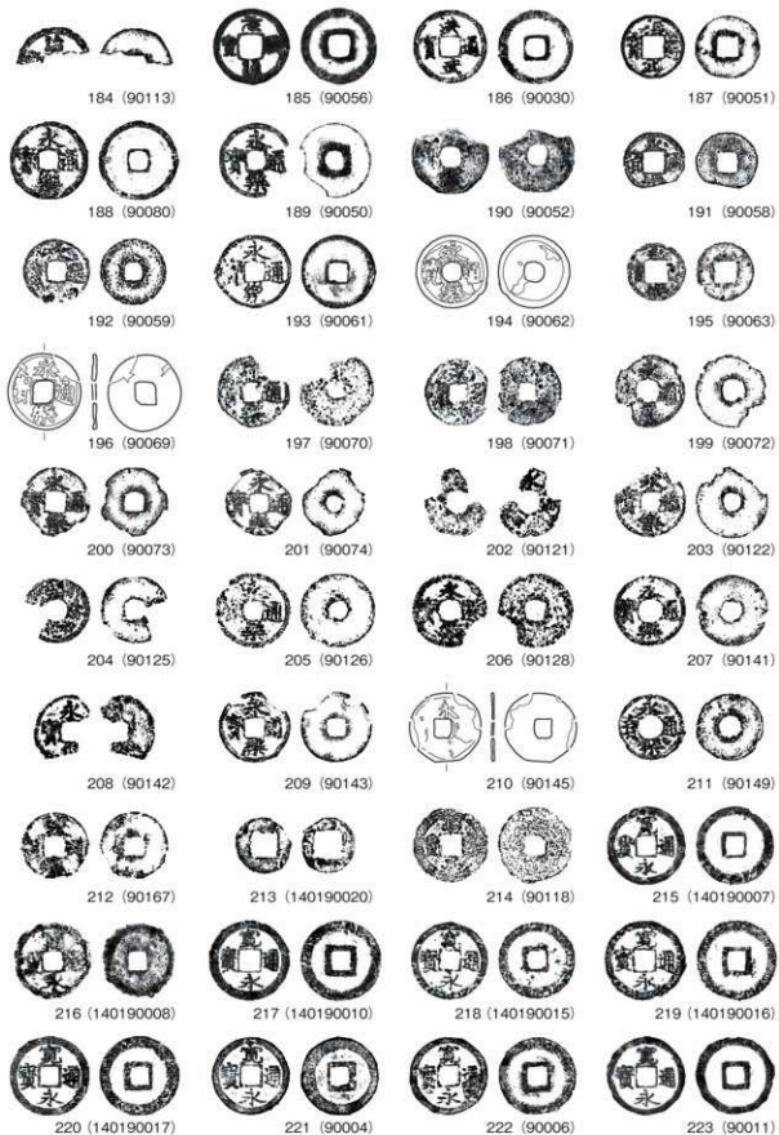
376～382は近代硬貨で、376・377は半錢銅貨、378～380は一錢銅貨、381は十錢アルミニウム貨、382は十錢錫貨である。

383～393は外国硬貨で、383～386 ドイツ、387・388 オーストリア、389・390 アメリカ、391・392 マレーシア、393 シリア各国の硬貨で、旅行での両替や土産物と推測される。

394は娯楽用メダル（スロットル）で、「ジャイアンツ」と記される現代物である。

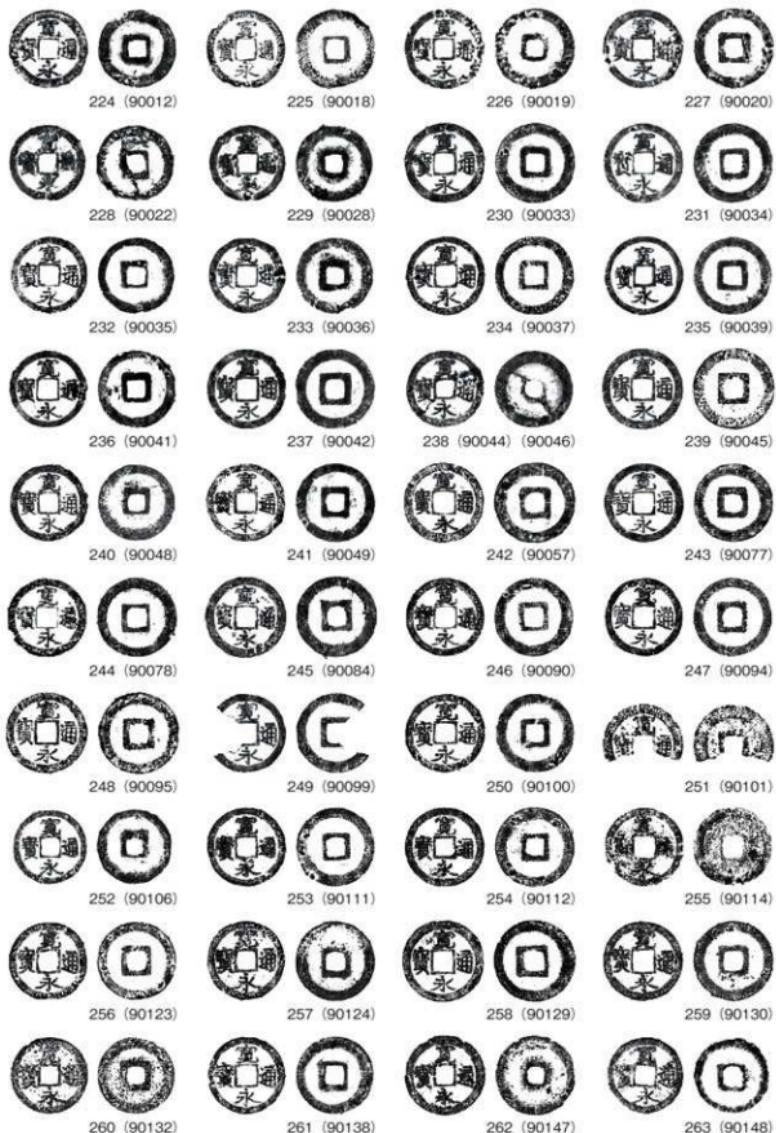
6 炉壁・鉄滓類

中世後半～末の吉田家住宅建築以前と考えられる、鍛冶遺構に関連する炉壁・鉄滓各 1 点と、炉 1



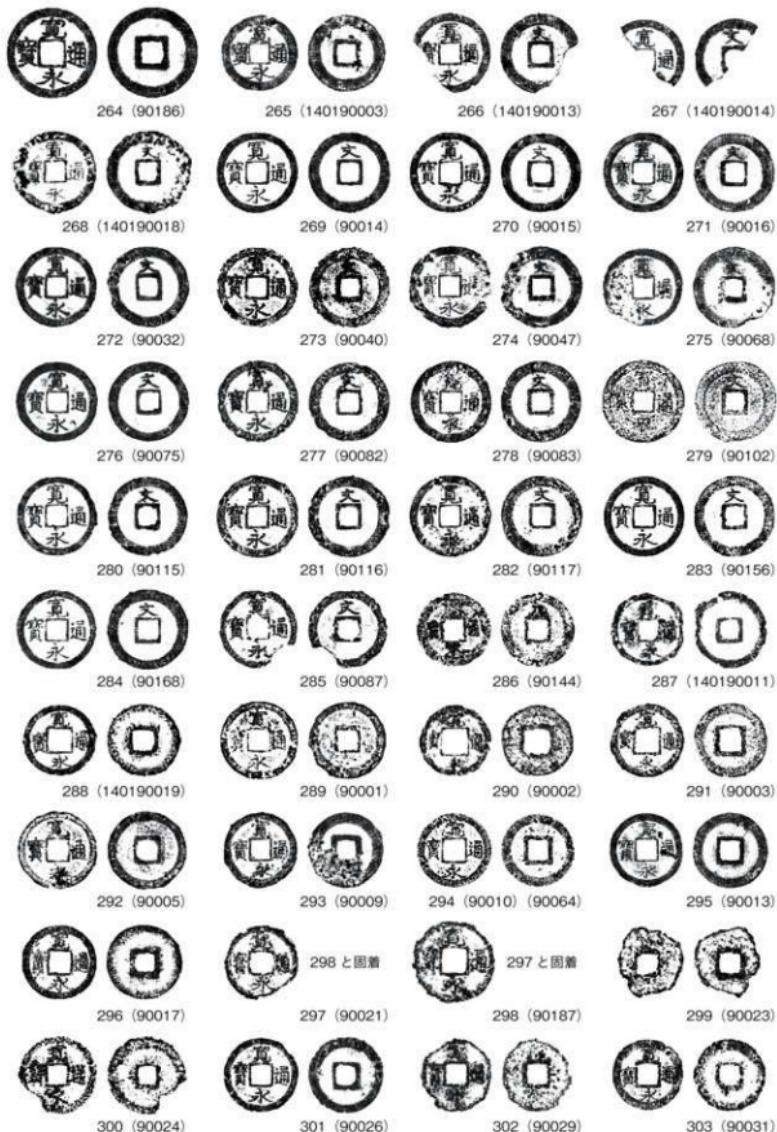
0 2.3 5cm

第29図 錢貨（1）



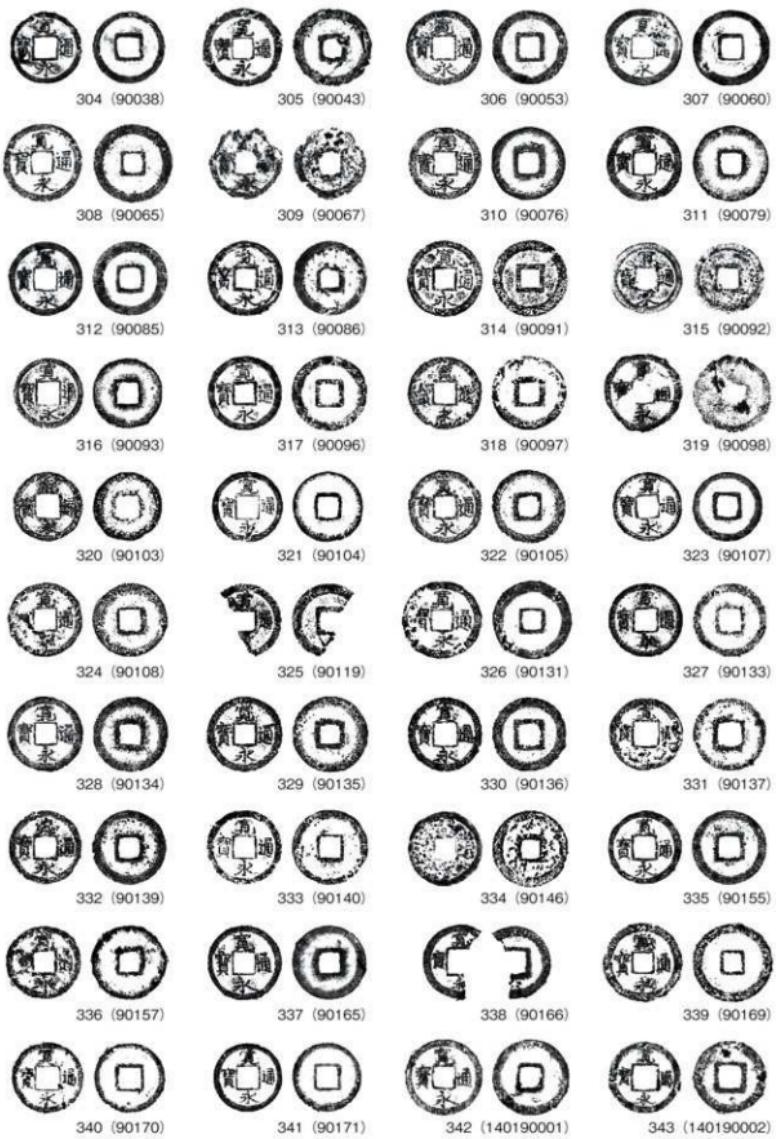
0 23 5cm

第30図 錢貨（2）



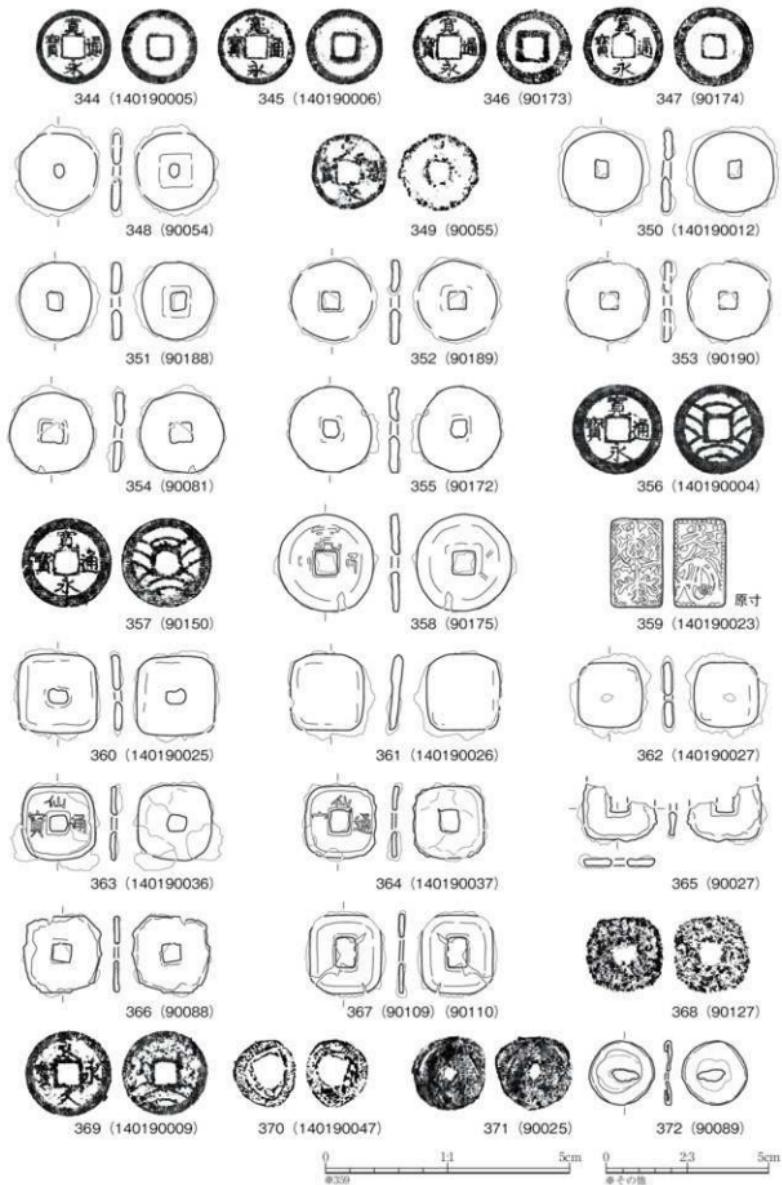
0 23 5cm

第31図 錢貨（3）

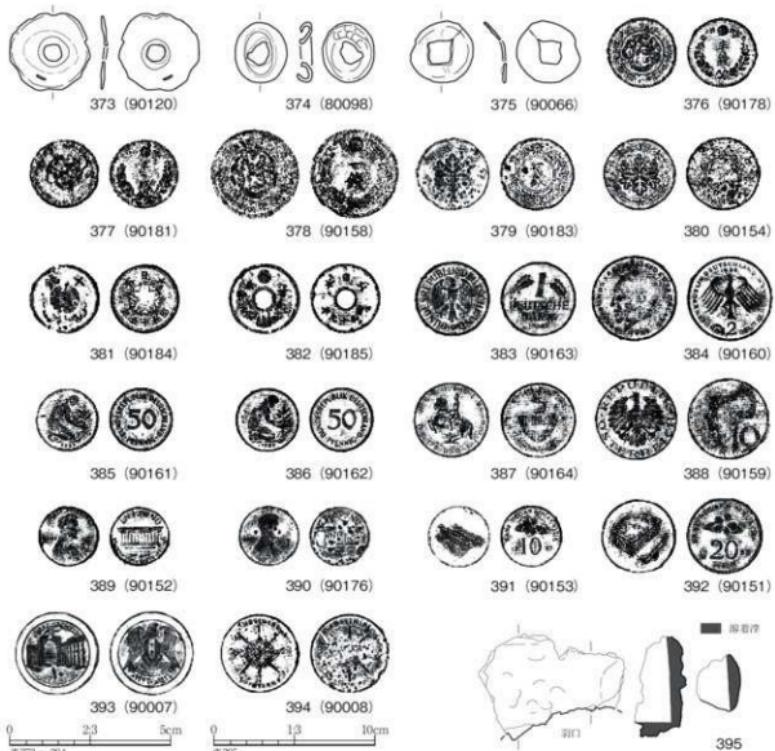


0 23 5cm

第32図 錢貨(4)



第33図 錢貨(5)



第34図 銭寶(6)、炉壁

から出土した粒状滓・鍛造剥片・砂鉄を写真のみ掲載した。

395は炉1埋土の炉壁である。炉下部の羽口が設置されていた部分直上の壁片で、下部分に羽口を設置した痕跡が認められる。内面の溶着滓は赤灰色で5~8mm大の炭の呑み込みがあり、色調から鍛冶作業が行われたと考えられる。396は旧土間最下層地層から出土した炉底塊である。炉底から炉底側面までの形状を残しており、裏面には還元土が付着している。暗赤灰色の色調と、炉底の厚さから鍛冶によって産出したとみられる。また、炉1から出土した397粒状滓、398鍛造剥片、399砂鉄を写真掲載した。これらの遺物から、鍛錬鍛冶(小鍛冶)が行われていたと考えられ、炉1以外についても、大半が鍛錬鍛冶炉である可能性が高い。

第10表に鉄滓計測表を示した。鉄滓類の合計は12616.9gで、内訳は鉄塊系遺物666.3g、炉内滓7142.7g、炉底塊1458.4g、流動滓2987.6g、粒状滓4.0g、鍛造剥片187.0g、砂鉄170.9gである。出土鉄滓は肉眼では鍛冶滓とみられ、年代測定では15世紀後半~16世紀代の年代値が得られていることから、中世後半~末にかけて鍛錬鍛冶が営まれていた可能性が高い。なお、鉄滓の成分分析は行っていない。

第3表 陶磁器觀察表(1~127)

番號	国	場所	断土点	断口	種類	性質	気泡空量	白鐵(白鐵素地)、黒鐵(黒鐵素地)	外表面・裏面形状	内面・裏面形状	目録番号	量	产地	年代	鉢土	備考	出典	
1	21	7	主上層建物1-2 安達層	陶器	陶器	陶器	口縁部-底部半 断面	口縁部-底部半 断面	(125) (50)	8.3 灰胎	灰胎	(細かな質入が入る) 灰胎	灰胎	灰胎	17世紀前半	灰白色	只器手	00222 00259
2	21	7	主上層建物1-2 安達層	陶器	陶器	陶器	口縁部-底部半 断面	-	6.0	灰胎	灰胎	-	灰胎	灰胎	17世紀前半	灰白色	只器手	00228 00258
3	21	7	主上層建物1-2 安達層	陶器	陶器	陶器	底部下-底部 断面	-	4.5	灰胎、薄胎	灰胎	-	灰胎	灰胎	17世紀前半	灰白色	只器手	00228 00258
4	21	7	主上層建物1-2 安達層	陶器	陶器	陶器	底部下-底部 断面	-	3.8	灰胎、薄胎	灰胎	-	灰胎	灰胎	18世紀後半	灰白色	只器手	00228 00258
5	21	7	主上層建物1-2 安達層	陶器	陶器	陶器	底部下-底部 断面	-	2.6	灰胎、薄胎	灰胎	-	灰胎	灰胎	18世紀後半	灰白色	只器手	00228 00258
6	21	7	主上層建物2 安達層	陶器	陶器	陶器	底部下-底部 断面	-	3.8	灰胎、薄胎	灰胎	底部を割け分ける 詩文	灰胎	灰胎	18世紀後半	灰白色	只器手	00228 00258
7	21	7	主上層建物2 安達層	陶器	陶器	陶器	小窓 断面	-	6.1	灰胎、薄胎	灰胎	-	灰胎	灰胎	19世紀前半	灰白色	只器手	00229 00259
8	21	7	主上層建物1-2 安達層	陶器	陶器	陶器	口縁部-底部半 断面	(160)	-	62.0 灰胎	灰胎	-	灰胎	灰胎	16世紀後半-末	灰黄色	只器手	00227 00257
9	21	7	主上層建物2	陶器	陶器	陶器	口縁部-底部 断面	(152)	65.5	39 灰胎	灰胎	-	灰胎	灰胎	16世紀後半-末	灰黄色	只器手	00228 00258
10	21	7	主上層建物2	陶器	陶器	陶器	底部 断面	-	6.1	灰胎、下端膨らむ	灰胎	-	灰胎	灰胎	16世紀後半- 17世紀初頭	灰白色	只器手	00227 00257
11	21	7	主上層建物2	陶器	陶器	陶器	口縁部-底部 断面	(126)	78	25 灰胎	灰胎	-	灰胎	灰胎	17世紀前半	灰白色	只器手	00228 00258
12	21	7	主上層建物2 安達層	陶器	陶器	陶器	底部 断面	-	6.2	灰胎、下端膨らむ	灰胎	-	灰胎	灰胎	16世紀後半- 17世紀初頭	灰白色	只器手	00229 00259
13	21	7	主上層建物2 安達層	陶器	陶器	陶器	底部下-底部 断面	-	6.0	67.0 灰胎	灰胎	-	灰胎	灰胎	18-19世紀	灰白色	只器手	00228 00258
14	21	7	主上層建物2	陶器	陶器	陶器	底部下半 断面	(194)	-	62.7 灰胎	灰胎	-	灰胎	灰胎	18世紀後半	灰白色	只器手	00228 00258
15	21	7	灰土	陶器	陶器	陶器	底部 断面	(117)	-	6.6 灰胎	灰胎	-	灰胎	灰胎	19世紀前半	灰白色	只器手	00228 00258
16	21	7	灰土	陶器	陶器	陶器	底部 断面	-	6.1	灰胎	灰胎	-	灰胎	灰胎	19世紀前半	灰白色	只器手	00228 00258
17	21	7	灰土	陶器	陶器	陶器	底部 断面	(90)	77	16 灰胎	灰胎	底部を割け分けて ある	底部	底部	19世紀前半	灰白色	只器手	00228 00258
18	21	7	主上層建物2	陶器	陶器	陶器	底部 断面	-	6.2	灰胎、薄胎	灰胎	-	灰胎	灰胎	17世紀後半	灰白色	只器手	00228 00258
19	21	7	主上層建物1-2 安達層	陶器	陶器	陶器	底部 断面	108	5.7	72 灰胎	灰胎	-	灰胎	灰胎	17世紀後半- 18世紀初頭	灰白色	只器手	00228 00258
20	21	7	灰土	陶器	陶器	陶器	底部 断面	(1.5)	-	6.0 灰胎	灰胎	-	灰胎	灰胎	17世紀後半- 18世紀初頭	灰白色	只器手	00228 00258
21	21	7	主上層建物2	陶器	陶器	陶器	底部 断面	(1.3)	4.7	6.7 1/2寸-底 部	底部と側面に開いた 窓形の穴がある 底部	底部と側面に開いた 窓形の穴がある 底部	底部	底部	18世紀	灰白色	只器手	00228 00258
22	21	7	主上層建物1-2 安達層	陶器	陶器	陶器	口縁部 断面	-	6.5	灰胎 (灰黄色)	灰胎	-	灰胎	灰胎	17世紀	灰白色	只器手	00228 00258
23	21	7	灰土	陶器	陶器	陶器	口縁部 断面	(137)	-	62.0 灰胎	灰胎	底部(灰黄色)	灰胎	灰胎	18世紀後半	灰白色	只器手	00228 00258
24	21	7	灰土	陶器	陶器	陶器	底部 断面	-	6.8	5.5 灰胎	灰胎	底部(灰黄色)	灰胎	灰胎	18世紀後半	灰白色	只器手	00228 00258
25	21	7	灰土	陶器	陶器	陶器	底部 断面	-	6.7	同上	同上	-	同上	同上	18世紀後半	灰白色	只器手	00228 00258
26	21	7	主上層建物2	陶器	陶器	陶器	底部上-底部 断面	-	6.0	灰胎、灰土 (灰黄色)	灰胎	底部(灰黄色) 灰胎	灰胎	灰胎	18世紀後半	灰白色	只器手	00228 00258
27	21	7	主上層建物1-2 安達層	陶器	陶器	陶器	口縁部 断面	(296)	-	9.7 灰胎	灰胎	口縁部(灰黄色)	灰胎	灰胎	18世紀後半	灰白色	只器手	00228 00258
28	21	8	主上層建物2	陶器	陶器	陶器	底部 断面	(380)	172.0	38.0 灰胎	灰胎	口縁部(灰黄色) 底部(灰黄色)	灰胎	灰胎	18世紀後半	灰白色	只器手	00228 00258
29	21	8	主上層建物2	陶器	陶器	陶器	底部 断面	-	6.0	灰胎	底部(灰黄色)	底部(灰黄色)	底部	底部	18世紀後半	灰白色	只器手	00228 00258
30	21	8	主上層建物2	陶器	陶器	陶器	底部 断面	-	6.0	灰胎	底部	底部(灰黄色)	底部	底部	18世紀後半	灰白色	只器手	00228 00258

編號 No.	固 態	固 態	固 態	固 態	外觀形態·鐵素體+珠光體		內部·珠光體	硬度	物質	參考 文獻
					白 色	黑 色				
62	9	卡上等鑄件2	鑄塊	球	30	(62)	本生火+珠光體	なし	19HRC(15~19%)	高碳鋼 00165
63	22	9	卡上等鑄件2	鑄塊	35	(37)	珠光體+灰鐵	なし	19HRC(15~19%)	高碳鋼 00066
64	22	9	卡上等鑄件2	鑄塊	30	(67)	珠光體+灰鐵	なし	17HRC(15~19%)	高碳鋼 00182
65	22	9	卡上等鑄件2	鑄塊	58	(69)	珠光體+珠鐵+珠鐵	なし	18HRC(15~19%)	高碳鋼 00063
66	22	9	卡上等鑄件1~2	鑄塊	55	(73)	珠光體+珠鐵+珠鐵	なし	18HRC(15~19%)	高碳鋼 00064
67	22	9	卡上等鑄件	球	65	(49)	珠光體+珠鐵+珠鐵	なし	17HRC(15~19%)	高碳鋼 00031
68	22	9	卡上等鑄件	球	62	(44)	珠光體+珠鐵+珠鐵	なし	17HRC(15~19%)	高碳鋼 00032
69	22	9	卡上等鑄件	球	60	(170)	珠光體+珠鐵+珠鐵	なし	16HRC(15~19%)	高碳鋼 00033
70	22	9	卡上等鑄件	球	60	(25)	珠光體+珠鐵+珠鐵	なし	16HRC(15~19%)	高碳鋼 00034
71	22	9	卡上等鑄件2	球	60	(60)	珠光體+珠鐵+珠鐵	なし	16HRC(15~19%)	高碳鋼 00035
72	22	9	卡上等鑄件2	球	60	(68)	珠光體+珠鐵+珠鐵	なし	16HRC(15~19%)	高碳鋼 00036
73	22	9	卡上等鑄件1~2	鑄塊	60	(76)	珠光體+珠鐵+珠鐵	なし	16HRC(15~19%)	高碳鋼 00037
74	22	9	卡上等鑄件1~2	鑄塊	60	(149)	珠光體+珠鐵+珠鐵	なし	16HRC(15~19%)	高碳鋼 00038
75	23	9	卡上等鑄件2	球	60	(165)	珠光體+珠鐵+珠鐵	なし	16HRC(15~19%)	高碳鋼 00039
76	23	9	卡上等鑄件2	球	60	(64)	珠光體+珠鐵+珠鐵	なし	16HRC(15~19%)	高碳鋼 00040
77	23	9	卡上等鑄件2	球	62	(51)	珠光體+珠鐵+珠鐵	なし	16HRC(15~19%)	高碳鋼 00041
78	23	9	卡上等鑄件	球	62	(121)	珠光體+珠鐵+珠鐵	なし	16HRC(15~19%)	高碳鋼 00042
79	23	10	卡上等鑄件2	球	62	(93)	珠光體+珠鐵+珠鐵	なし	16HRC(15~19%)	高碳鋼 00043
80	23	10	卡上等鑄件2	球	62	(130)	珠光體+珠鐵+珠鐵	なし	16HRC(15~19%)	高碳鋼 00044
81	23	10	卡上等鑄件1~2	球	62	(80)	珠光體+珠鐵+珠鐵	なし	16HRC(15~19%)	高碳鋼 00045
82	23	10	卡上等鑄件2	球	62	(61)	珠光體+珠鐵+珠鐵	なし	16HRC(15~19%)	高碳鋼 00046
83	23	10	卡上等鑄件2	球	62	(144)	珠光體+珠鐵+珠鐵	なし	16HRC(15~19%)	高碳鋼 00047
84	23	10	卡上等鑄件1~2	球	62	(140)	珠光體+珠鐵+珠鐵	なし	16HRC(15~19%)	高碳鋼 00048
85	23	10	卡上等鑄件	球	62	(27)	珠光體+珠鐵+珠鐵	なし	16HRC(15~19%)	高碳鋼 00049
86	23	10	卡上等鑄件2	球	62	(63)	珠光體+珠鐵+珠鐵	なし	16HRC(15~19%)	高碳鋼 00050
87	23	10	卡上等鑄件1~2	球	62	(145)	珠光體+珠鐵+珠鐵	なし	16HRC(15~19%)	高碳鋼 00051
88	23	10	卡上等鑄件2	球	62	(120)	珠光體+珠鐵+珠鐵	なし	16HRC(15~19%)	高碳鋼 00052
89	23	10	卡上等鑄件2	球	62	(66)	珠光體+珠鐵+珠鐵	なし	16HRC(15~19%)	高碳鋼 00053
90	23	10	卡上等鑄件1~2	球	62	(144)	珠光體+珠鐵+珠鐵	なし	16HRC(15~19%)	高碳鋼 00054
91	23	10	卡上等鑄件	球	62	(106)	珠光體+珠鐵+珠鐵	なし	16HRC(15~19%)	高碳鋼 00055

測量 No.	部類 No.	出土地点	層位	層相	層面	層位	外觀文様・範例		内觀・拠点文様		性質	地質	参考 No.		
							上部	下部	上部	下部					
92	21	10 土壌	砂地盤	砂質	砂質	砂質	口繪底~底部	(15.5)	86	46	圓周・直葉文	泥付	18世紀半	白色	
93	23	10 土壌上層地物 2	砂地盤	砂質	砂質	砂質	口繪底~底部	(19.5)	207	28	宮室・文・圓周	泥付	18世紀半	白色	
94	25	10 土壌上層地物 2	砂地盤	砂質	砂質	砂質	口繪底~底部	(12.2)	45	38	灰地・圓周	泥付	18世紀半	白色	
95	23	11 土壌上層地物 1・2	砂地盤	砂質	砂質	砂質	口繪底~底部	14.0	83	49	透地・直葉・圓周・筋有り	青面付・見込・斜面等	18世紀半	白色	
96	23	11 土壌上層地物 2	砂地盤	砂質	砂質	砂質	口繪底~底部	—	80.0	47	透地・直葉・圓周・筋有り	青面付・見込・斜面等	18世紀半	白色	
97	23	11 土壌上層地物 1・2	砂地盤	砂質	砂質	砂質	口繪底~底部	(10.6)	56	25	透地・直葉	泥付	18世紀半	白色	
98	23	11 土壌上層地物 2	砂地盤	砂質	砂質	砂質	口繪底~底部	—	60.0	21	透地・直葉	泥付	18世紀半	白色	
99	21	11 土壤	土壌	砂質	砂質	砂質	口繪底~底部	—	72	14.8	透地・直葉・圓周	泥付	18世紀半	白色	
100	23	11 土壌上層地物 2	砂地盤	砂質	砂質	砂質	口繪底~底部	—	89.0	629	透地・圓周	泥付	18世紀半~19世紀	白色	
101	23	11 土壌上層地物 2	砂地盤	砂質	砂質	砂質	口繪底~底部	(10.8)	625	23	なし	泥付	18世紀半~19世紀	白色	
102	23	11 土壌上層地物 2	砂地盤	砂質	砂質	砂質	口繪底~底部	—	60	620	透地・文	泥付	18世紀半	白色	
103	23	11 土壌上層地物 2	砂地盤	砂質	砂質	砂質	口繪底~底部	—	88.0	629	透地・口繪高台	泥付	18世紀半~19世紀	白色	
104	21	11 土壤上層地物 2	建物基礎内	砂地盤	人頭	砂地盤	口繪底~底部	—	—	—	透地・口繪高台	泥付	18世紀半~19世紀	白色	
105	23	11 土壤	土壌	砂質	砂質	砂質	口繪底~底部	(20.5)	—	447	透地・文	泥付	18世紀半~19世紀	白色	
106	23	11 土壤上層地物 2	砂地盤	大頭	大頭	大頭	口繪底~底部	(21.0)	—	627	透地・文	泥付	18世紀半~19世紀	白色	
107	23	11 土壤上層地物 2	砂地盤	大頭	大頭	大頭	口繪底~底部	(16.5)	620	透地	泥付	18世紀半~19世紀	白色		
108	23	11 土壤	土壌	砂質	砂質	砂質	口繪底~底部	(20.1)	—	660	透地	泥付	18世紀半~19世紀	白色	
109	23	11 土壤上層地物 1・2	砂地盤	砂質	砂質	砂質	口繪底~底部	1.2	60	—	14	透地・直葉	泥付	18世紀半	白色
110	24	11 土壤上層地物 1・2	砂地盤	砂質	砂質	砂質	口繪底~底部	—	—	(56)	透地・文	泥付	18世紀半	白色	
111	24	11 土壤	土壌	砂質	砂質	砂質	口繪底~底部	5.5	—	623	透地・文	泥付	18世紀半	白色	
112	24	12 土壤	土壌	砂質	砂質	砂質	口繪底~底部	5.0	15	14	口繪底・口繪高台	泥付	120~180年代	白色	
113	24	12 不明	表衣	砂質	砂質	砂質	口繪底~底部	5.8	56	(11.6)	透地・口繪底・口繪高台・口繪底・口繪高台	泥付	18世紀半~19世紀	白色	
114	24	12 表衣	砂地盤	砂質	砂質	砂質	口繪底~底部	—	—	611	透地	泥付	18世紀半~19世紀	白色	
115	24	12 土壤上層地物 2	砂地盤	砂質	砂質	砂質	口繪底~底部	(25.5)	—	673	山本・文・口繪底	泥付	18世紀半~19世紀	白色	
116	24	12 土壤上層地物 1・2	砂地盤	砂質	砂質	砂質	口繪底~底部	2.3	6	内絵	山本・文	泥付	18世紀半	白色	
117	24	12 土壤上層地物 1・2	砂地盤	砂質	砂質	砂質	口繪底~底部	—	—	内絵	山本・文	泥付	18世紀半	白色	
118	24	12 不明	表衣	砂質	砂質	砂質	口繪底~底部	—	—	内絵	山本・文	泥付	18世紀半	白色	
119	24	12 表衣	表衣	砂質	砂質	砂質	口繪底~底部	11.8	40	52	透地・文	泥付	18世紀半~19世紀	白色	
120	24	12 土壤上層地物 1・2	砂地盤	砂質	砂質	砂質	口繪底~底部	12.8	74	37	透地・文	泥付	18世紀半~19世紀	白色	
121	24	12 土壤上層地物 1・2	砂地盤	砂質	砂質	砂質	口繪底~底部	11.6	69	16	なし	泥付	18世紀半~19世紀	白色	

測量 No.	回 数	回 数	回 数	回 数	回 数	回 数	外因文様・既製品表示欄		内面・既製品表示欄		形状・ 大きさ	容積	年代	地土	備考	経緯
							内面	既製品	内面	既製品						
122	24	12	主上層建物1・2	砂質	直	砂質	直	67	21	直文・圓文・既製品表示字	既製品	直文	67	21	白色	地土S100 (00)50
123	24	12	主上層建物2	既製品	直	砂質	直	61	19	直文	既製品	直文	61	19	白色	(00)57
124	24	12	主上層建物2	既製品	直	砂質	直	38	47	人物文・圓文・既製品表示字	既製品	直文	38	47	白色	(00)75
125	24	12	主上層建物2	既製品	直	砂質	直	68	22	なし	既製品	直文	68	22	白色	(00)90
126	24	12	主上層建物2	直	直	砂質	直	75	27	なし	既製品	直文	75	27	白色	(00)92
127	24	12	主上層建物2	直	直	砂質	直	75	25	なし	既製品	直文	75	25	白色	(00)94

第4表 土・陶製品調査表 (128～133)

測量 No.	回 数	回 数	回 数	回 数	回 数	回 数	外因文様・既製品表示欄		内面・既製品表示欄		形状・ 大きさ	容積	年代	地土	備考	経緯
							内面	既製品	内面	既製品						
128	25	13	主上層建物1・2	既製品	直	土人形	直	53	23	高さ53 幅23 既製品付属(所持する)	既製品	直	53	23	白色	地土S100 (00)50
129	25	13	主上層建物1・2	既製品	直	土人形	直	53	23	高さ53 幅23 既製品付属(所持する)	既製品	直	53	23	白色	(00)51
130	25	13	主上層建物1・2	既製品	直	土人形	直	53	23	高さ53 幅23 既製品付属(所持する)	既製品	直	53	23	白色	(00)51
131	25	13	主上層建物1・2	既製品	直	土人形	直	53	23	高さ53 幅23 既製品付属(所持する)	既製品	直	53	23	白色	(00)51
132	25	13	主上層建物2	既製品	直	土人形	直	53	23	高さ53 幅23 既製品付属(所持する)	既製品	直	53	23	白色	(00)51
133	25	13	主上層建物2	既製品	直	土人形	直	53	23	高さ53 幅23 既製品付属(所持する)	既製品	直	53	23	白色	(00)51

第5表 石製品・貝・角製品調査表 (134～144)

測量 No.	回 数	回 数	回 数	回 数	回 数	回 数	内面		既製品		形状・ 大きさ	容積	年代	地土	備考	経緯
							内面	既製品	内面	既製品						
134	36	13	主上層建物1・2	板状	直	板状	直	61	13	内面	既製品	直	61	13	白色	地土S100 (00)50
135	36	13	主上層建物1・2	板状	直	板状	直	22	04	内面	既製品	直	22	04	白色	(00)51
136	36	13	主上層建物1・2	板状	直	板状	直	21	20	内面	既製品	直	21	20	白色	(00)51
137	36	13	主上層建物1・2	板状	直	板状	直	22	05	内面	既製品	直	22	05	白色	(00)51
138	36	13	主上層建物1・2	板状	直	板状	直	23	05	内面	既製品	直	23	05	白色	(00)51
139	36	13	主上層建物2	板状	直	板状	直	22	05	内面	既製品	直	22	05	白色	(00)51
140	36	13	出土地点不明	板状不明	直	板状	直	16	17	内面	既製品	直	16	17	白色	地土S100 (00)50
141	36	13	主上層建物1・2	板状	直	板状	直	69	66	内面	既製品	直	69	66	白色	地土S100 (00)50
142	36	13	主上層建物2	板状	直	板状	直	53	45	内面	既製品	直	53	45	白色	(00)51
143	36	13	主上層建物1・2	石椎	直	石椎	直	29.5	29.3	内面	既製品	直	29.5	29.3	白色	(00)51
144	36	13	主上層建物2	石椎	直	石椎	直	28.3	28.4	内面	既製品	直	28.3	28.4	白色	(00)51
145	36	13	主上層建物2	石椎	直	石椎	直	28.2	28.3	内面	既製品	直	28.2	28.3	白色	(00)51

() : 既存

() : 既存

第6表 金属製品観察表（145～183）

()：残存値、()：推定値

測量No.	図	写真	出土地点	層位	種類	残存位置	目測測定値 高さ(目)	測定値 高さ(cm)	測定値 幅(cm)	材質	年代	備考	登録No.	
145	27	14	不明	遺構検出	椎管(雁首)	火皿欠	(6.9) 0.3	0.1	11.4	銅	JPF時代		90048	
146	27	14	不明	遺構検出	椎管(雁首)	火皿欠	(4.6) 0.9	0.1	3.8	銅	JPF時代		80032	
147	27	14	玉屋上層建物1・2	遺構検出	椎管(雁首)	火形	9.1	1.4	0.1	9.1	銅	JPF時代		80197
148	27	14	不明	遺構検出	椎管(雁首)	火形	6.6	1.6	0.1	10.1	銅鑄	JPF時代	化粧有	80002
149	27	14	不明	遺構検出	椎管(吸口)	雁字残存	6.3	1.0	0.1	7.8	銅鑄	JPF時代	化粧有	80001
150	27	14	玉屋上層建物1・2	壁地盤	椎管(吸口)	雁字残存	7.0	1.0	0.1	6.4	銅	JPF時代		80025
151	27	14	玉屋上層建物2	壁地盤	椎管(吸口)	火皿欠	(5.1) 0.9	0.1	3.8	銅	JPF時代		80300	
152	27	14	玉屋上層建物2	壁地盤	椎管(吸口)	火形	5.4	0.9	0.1	4.5	銅	JPF時代		80303
153	27	14	不明	遺構検出	脛	火皿欠	14.8	1.5	0.3	13.0	銅	JPF時代	耳書き形 丸に海鉢紋 出土時は黒く変色	80003-1
154	27	14	不明	遺構検出	脣	耳書き形 2本足足火	(3.3) 1.8	0.2	2.0	銅	JPF時代	平行脣で、耳書き形。画面に擦紋が施される	80309	
155	27	14	玉屋上層建物1・2	壁地盤(廻 物穴吹き)	小柄(万部)	基部・漏部	(11.7) 1.4	0.4	14.9	鉄	JPF時代	156小柄の両部分の可能性がある		80124
156	27	14	玉屋上層建物2	壁地盤	小柄	柄部分	9.5	1.6	0.5	28.5	銅	JPF時代	一段の板から作られた片手巻きの構造	80141
157	27	14	不明	遺構検出	胸金具	火形	6.4	7.6	0.1	24.5	銅	JPF時代～明治	四方側面彎曲 銅2枚重ね	80004
158	27	14	玉屋上層建物1・2	壁地盤	雄夷青銅製品	定丸	16	1.5	0.2	1.1	銅	JPF時代か	青銅製品の一端と考えられる	80198
159	27	14	表採	日本第一十社 社主御用	火形	33	2.9	0.2	10.0	銅	明治21年 (1888)	日本第一社員(会員)のものと一定以上を兼ね たものと想定される	80204	
160	27	14	玉屋上層建物1・2	壁地盤 (大荷台)	雄夷青銅製品	雄夷	(8.0) 0.5	0.3	3.4	銅	JPF時代か	雄夷の片手にて、片手巻きの丸が帶たれて いる青銅製品の一端と考えられる	80196	
161	27	14	納屋器	壁地盤	把手(直)	1/2欠	(11.2) 0.4	0.3	8.7	銅	JPF時代か	中央に使用による彫み有り	80174	
162	27	14	玉屋上層建物2	壁地盤	把手(直)	略定形	(9.9) 11.8	0.4	21.9	銅	JPF時代か	直抜や小型の縦に付属していたと考えられる	80073	
163	27	14	玉屋上層建物1・2	壁地盤	把手(直)か	1/2欠	(8.6) 0.7	0.5	12.2	鉄	JPF時代か	中央が手取口で、吊り下げる際の横すき防止 としている	80097	
164	27	14	玉屋上層建物2	壁地盤	弾丸	火打金	12	1.2	1.1	8.5	銅	JPF時代か	大頭の弾丸と考えられる	80031
165	27	14	玉屋上層建物1・2	壁地盤	火打金	火打金	10.1	4.1	0.3	34.5	鉄	JPF時代か	複型火打金 真き43mmの角舟が圓筒して いる	80095
166	27	14	玉屋上層建物1・2	壁地盤	旗	火形	17.0	3.0	0.5	47.4	銅	JPF時代～明治	直食著しい	80006
167	27	14	玉屋上層建物2	壁地盤	鉈	基部・漏部	(31.2)	9.5	1.4	60.6	鉄	JPF時代～明治	直食著しい 先端部が喇叭状に発達する石突型 の鉈	80005
168	27	14	玉屋上層建物2	壁地盤	鉈	基部・漏部	(7.0)	2.6	2.8	31.3	鉄	JPF時代か	此の部分の可能性あり。直鉈に直鉈を使 している。	80156
169	27	14	玉屋上層建物1・2	壁地盤	梯状不明 鉄製品	基部・漏部	(13.1)	1.9	1.0	77.0	鉄	JPF時代か	右端に鉈と見られる施所があり、柄の後部が 想定される	80107
170	27	14	玉屋上層建物1・2	壁地盤	取瓶	火打金	(高さ (2.1))	0.9	0.5	126.0	鉄	中食～近食	前田作業に用いられたと考えられる直鉈の鉄 製品	80190
171	27	15	玉屋上層建物2	壁地盤	取瓶	火打金	(高さ (2.2))	0.3	20.5	45.1	鉄	中食～近食	前田作業に用いられたと考えられる直鉈の鉄 製品	80024
172	28	14	玉屋上層建物1・2	壁地盤	鉈	1/2欠	(5.5)	2.1	0.8	13.4	鉄	中食～近食	連続部材の1つで、木材と木材を繋ぎ合わせる	80096
173	28	14	玉屋上層建物1・2	石21	舟釘	頭輪	(7.0)	2.0	1.5	22.3	鉄	中食～近食	頭蓋部欠損	90058
174	28	14	玉屋上層建物1・2	壁地盤	舟釘	頭輪	(10.8)	0.7	1.2	32.0	鉄	中食～近食	頭蓋(シユロカ)、本質が残存・水漏れ防止に 巻きかけて打ち込んだか、頭上空型	80028
175	28	15	玉屋上層建物2	壁地盤	舟釘	頭輪	(7.0)	2.3	2.0	38.5	鉄	中食～近食	頭蓋字型	80044
176	28	15	玉屋上層建物2	壁地盤	舟釘	頭輪	(8.0)	2.5	2.1	51.3	鉄	中食～近食	頭蓋字型	80045
177	28	15	玉屋上層建物1・2	壁地盤	舟釘	先端部欠	(15.3)	0.0	1.8	106.8	鉄	中食～近食	先端部約1/2が残存 頭部形状はL字型の使 用による巻きがり有 本質付着 施場 SK40	80169
178	28	15	玉屋上層建物2	壁地盤	舟釘	頭輪	(8.3)	2.3	0.9	33.2	鉄	中食～近食	頭蓋字型	80166
179	28	15	頭輪底包張	張表	舟釘	先端部欠	(11.7)	1.7	1.2	43.5	鉄	中食～近食	頭蓋字型	80116
180	28	15	玉屋上層建物1・2	壁地盤	舟釘	先端部欠	(10.0)	1.8	0.7	23.0	鉄	JPF時代	頭方型か 先端部欠損 施場 SK40	80104
181	28	15	玉屋上層建物2	壁地盤	舟釘	頭輪	(6.0)	1.0	0.7	12.3	鉄	JPF時代	頭方型か 先端部欠損	80164
182	28	15	納屋	壁地盤	舟釘	頭輪	(3.1)	1.1	0.5	4.2	鉄	JPF時代	頭方型か	80179
183	28	15	納屋	壁地盤	舟釘	基部・漏部	(10.9)	1.8	0.8	35.2	鉄	JPF時代	頭方型か	80187

第7表 錢貨観察表（184～394）

()：残存値、()：推定値

測量No.	図	写真	出土地点	層位	種類	相跨年	材質	目測測定値 直径(mm)	測定値 直径(mm)	目測測定値 厚さ(mm)	測定値 厚さ(mm)	備考	登録No.
184	29	15	玉屋上層建物2	壁地盤	治平元寶	106年	銅	22.6	12	(5.0)	11	1/2欠、北宋銭	90113
185	29	15	玉屋上層建物1・2	壁地盤	元祐通寶	1086年	銅	25.5	0.9	8.0	23	北宋銭	90056
186	29	15	玉屋上層建物1・2	壁地盤	洪武通寶	1368年	銅	23	1.1	5.0	25	明銭	90030
187	29	15	玉屋上層建物1・2	壁地盤	洪武通寶	1368年	銅	19.9	0.7	7.6	0.9	明銭 小形、画面平削で凹凸なし→頭輪孔 の可逆性あり	90051

測量 No.	回 数	測定地点	層位	種類	測定年	材質	測量値			登録番 号		
							各所(m)	平均(m)	標準偏差(m)			
188	29	15	上屋上層建物 1・2	壁地盤	永栄通寶	1408 年	鋼	246	12	47	36 明鏡	90080
189	29	15	上屋上層建物 1・2	壁地盤	永栄通寶	1408 年	鋼	252	08	56	12 明鏡、表面平頭で凹凸少ない→国内複数箇所の可能性あり	90050
190	29	15	上屋上層建物 1・2	壁地盤	永栄通寶	1408 年	鋼	254	08	62	14 明鏡、表面平頭で凹凸少ない→国内複数箇所の可能性あり	90051
191	29	15	上屋上層建物 1・2	壁地盤	永栄通寶	1408 年	鋼	185	05	62	07 明鏡、表面平頭で凹凸少ない→国内複数箇所の可能性あり	90058
192	29	15	上屋上層建物 1・2	壁地盤	永栄通寶	1408 年	鋼	206	08	49	13 明鏡、表面平頭で凹凸少ない→国内複数箇所の可能性あり	90059
193	29	15	上屋上層建物 1・2	壁地盤	永栄通寶	1408 年	鋼	226	14	60	17 明鏡、小判、表面平頭で凹凸少ない→国内複数箇所の可能性あり	90061
194	29	15	上屋上層建物 1・2	壁地盤	永栄通寶	1408 年	鋼	225	08	61	08 14.5 時、明鏡、小判、表面平頭で凹凸少ない→国内複数箇所の可能性あり	90062
195	29	15	上屋上層建物 1・2	壁地盤	永栄通寶	1408 年	鋼	180	06	82	03 明鏡、小判、表面平頭で凹凸少ない→国内複数箇所の可能性あり	90063
196	29	15	上屋上層建物 1・2	壁地盤(建 物灰土上)	永栄通寶	1408 年	鋼	230	10	70	12 明鏡、表面平頭の可能性あり→国内複数箇所の可能性あり	90069
197	29	15	上屋上層建物 1・2	壁地盤(建 物灰土上)	永栄通寶	1408 年	鋼	228	12	49	13 明鏡、表面平頭の可能性あり	90070
198	29	15	上屋上層建物 1・2	壁地盤(建 物灰土上)	永栄通寶	1408 年	鋼	214	16	45	18 14.5 時、明鏡、小判、表面平頭で凹凸少ない→国内複数箇所の可能性あり	90071
199	29	15	上屋上層建物 1・2	壁地盤(建 物灰土上)	永栄通寶	1408 年	鋼	225	07	65	08 14.5 時、明鏡、小判、表面平頭で凹凸少ない→国内複数箇所の可能性あり	90072
200	29	15	上屋上層建物 1・2	壁地盤(建 物灰土上)	永栄通寶	1408 年	鋼	211	07	40	13 14.5 時、明鏡、小判、表面平頭で凹凸少ない→国内複数箇所の可能性あり	90073
201	29	15	上屋上層建物 1・2	壁地盤(建 物灰土上)	永栄通寶	1408 年	鋼	211	09	50	11 14.5 時、明鏡、小判、表面平頭で凹凸少ない→国内複数箇所の可能性あり	90074
202	29	15	上屋上層建物 2	壁地盤	永栄通寶	1408 年	鋼	220	05	61	06 14.5 時、明鏡、小判、表面平頭で凹凸少ない→国内複数箇所の可能性あり	90121
203	29	15	上屋上層建物 2	壁地盤	永栄通寶	1408 年	鋼	222	07	52	12 14.5 時、明鏡、小判、表面平頭で凹凸少ない→国内複数箇所の可能性あり	90122
204	29	15	上屋上層建物 2	壁地盤	永栄通寶	1408 年	鋼	207	07	65	03 14.5 時、明鏡、小判、表面平頭で凹凸少ない→国内複数箇所の可能性あり	90125
205	29	15	上屋上層建物 2	壁地盤	永栄通寶	1408 年	鋼	228	07	56	14 14.5 時、明鏡、表面平頭で凹凸少ない→国内複数箇所の可能性あり	90126
206	29	15	上屋上層建物 2	壁地盤	永栄通寶	1408 年	鋼	231	08	65	15 14.5 時、明鏡、表面平頭で凹凸少ない→国内複数箇所の可能性あり	90128
207	29	15	穴掘建物 1		永栄通寶	1408 年	鋼	218	05	60	14 14.5 時、明鏡、表面平頭で凹凸少ない→国内複数箇所の可能性あり	90141
208	29	15	穴掘建物 1		永栄通寶	1408 年	鋼	210	06	58	08 14.5 時、明鏡、表面平頭で凹凸少ない→国内複数箇所の可能性あり	90142
209	29	15	穴掘建物 1		永栄通寶	1408 年	鋼	221	08	55	13 14.5 時、明鏡、表面平頭で凹凸少ない→国内複数箇所の可能性あり	90143
210	29	15	穴掘建物 1		永栄通寶	1408 年	鋼	203	13	49	09 14.5 時、明鏡、真も凹凸なく辨識づらい→国内複数箇所の可能性あり	90145
211	29	15	洞屋		永栄通寶	1408 年	鋼	211	10	64	11 14.5 時、明鏡、孔が円形、表面平頭で凹凸少ない→国内複数箇所の可能性あり	90149
212	29	15	表探		永栄通寶	1408 年	鋼	202	06	59	09 14.5 時、明鏡の可能性あり	90167
213	29	15	上屋上層建物 1・2	灰褐色混じ り粘質土	模様鉢	1408 年	陶	178	06	80	07 14.5 時、明鏡の可能性あり	14019030
214	29	15	上屋上層建物 2	壁地盤	平安通寶	不明	鋼	231	11	69	23 年代は特定されていない	90118
215	29	15	不明		津波形粗筋 瓦	寛永 13 年 (1636)	陶	245	12	57	26 古窯水	14019007
216	29	16	不明		粗査中	寛永通寶	寛永 13 年 (1636)	陶	243	14	55 28 古窯水	14019008
217	29	16	不明		粗査中	寛永通寶	寛永 13 年 (1636)	陶	253	14	58 35 古窯水	14019010
218	29	16	上屋上層建物 1・2	灰褐色混じ り粘質土	寛永通寶	寛永 13 年 (1636)	陶	241	16	49	30 古窯水	14019015
219	29	16	上屋上層建物 1・2	灰褐色混じ り粘質土	寛永通寶	寛永 13 年 (1636)	陶	251	16	54	35 古窯水	14019016
220	29	16	上屋上層建物 1・2	粗査中	寛永通寶	寛永 13 年 (1636)	陶	250	12	55	29 古窯水	14019017
221	29	16	上屋上層建物 1・2	鉢状土除去	寛永通寶	寛永 13 年 (1636)	陶	242	12	55	41 古窯水	90004
222	29	16	上屋上層建物 1・2	被削土除去	寛永通寶	寛永 13 年 (1636)	陶	240	09	59	25 古窯水	90006
223	29	16	上屋上層建物 1・2	上開削地盤	寛永通寶	寛永 13 年 (1636)	陶	25	11	57	30 古窯水	90011
224	30	16	上屋上層建物 1・2	上開削地盤	寛永通寶	寛永 13 年 (1636)	陶	25	12	55	31 古窯水	90012
225	30	16	上屋上層建物 1・2	壁地盤	寛永通寶	寛永 13 年 (1636)	陶	246	12	55	26 古窯水	90018
226	30	16	上屋上層建物 1・2	壁地盤	寛永通寶	寛永 13 年 (1636)	陶	248	15	27	32 古窯水	90019
227	30	16	上屋上層建物 1・2	壁地盤	寛永通寶	寛永 13 年 (1636)	陶	244	16	30	34 古窯水	90020
228	30	16	上屋上層建物 1・2	壁地盤	寛永通寶	寛永 13 年 (1636)	陶	236	14	27	16 古窯水	90022
229	30	16	上屋上層建物 1・2	壁地盤	寛永通寶	寛永 13 年 (1636)	陶	239	17	56	36 古窯水	90028
230	30	16	上屋上層建物 1・2	壁地盤	寛永通寶	寛永 13 年 (1636)	陶	251	12	59	40 古窯水	90033
231	30	16	上屋上層建物 1・2	壁地盤	寛永通寶	寛永 13 年 (1636)	陶	247	13	62	29 古窯水	90034
232	30	16	上屋上層建物 1・2	壁地盤	寛永通寶	寛永 13 年 (1636)	陶	240	13	59	19 古窯水	90035
233	30	16	上屋上層建物 1・2	壁地盤	寛永通寶	寛永 13 年 (1636)	陶	239	14	57	32 古窯水	90036
234	30	16	上屋上層建物 1・2	壁地盤	寛永通寶	寛永 13 年 (1636)	陶	243	14	65	32 古窯水	90037

測量 No.	回	厚測	出土地点	層位	種類	想跡年	材質	剖面圖			備考	登記號
								各項尺寸 mm	厚度 mm	半徑 mm		
235	30	16	主屋上層建物 1・2	發地層	寛水通寶	寛水 13 年 (1630)	銅	244	13	5.5	26 古寛永	90039
236	30	16	主屋上層建物 1・2	發地層	寛水通寶	寛水 13 年 (1630)	銅	242	17	5.6	38 古寛永	90041
237	30	16	主屋上層建物 1・2	發地層	寛水通寶	寛水 13 年 (1630)	銅	25	13	7.1	32 古寛永	90042
238	30	16	主屋上層建物 1・2	發地層	寛水通寶	寛水 13 年 (1630)	銅	241	12	5.4	26 90044-90046 同一個體 古寛永	90044- 90046
239	30	16	主屋上層建物 1・2	發地層	寛水通寶	寛水 13 年 (1630)	銅	252	13	5.2	31 古寛永	90045
240	30	16	主屋上層建物 1・2	發地層	寛水通寶	寛水 13 年 (1630)	銅	238	14	6.6	24 古寛永	90046
241	30	16	主屋上層建物 1・2	發地層	寛水通寶	寛水 13 年 (1630)	銅	246	11	5.6	29 古寛永	90049
242	30	16	主屋上層建物 1・2	發地層	寛水通寶	寛水 13 年 (1630)	銅	251	10	6.7	32 古寛永	90057
243	30	16	主屋上層建物 2	發地層	寛水通寶	寛水 13 年 (1630)	銅	246	12	5.6	23 古寛永	90077
244	30	16	主屋上層建物 2	發地層	寛水通寶	寛水 13 年 (1630)	銅	248	12	5.4	40 古寛永	90078
245	30	16	主屋上層建物 2	發地層	寛水通寶	寛水 13 年 (1630)	銅	252	13	5.4	36 古寛永	90084
246	30	16	主屋上層建物 2	發地層	寛水通寶	寛水 13 年 (1630)	銅	242	11	5.6	31 古寛永	90090
247	30	16	主屋上層建物 2	發地層	寛水通寶	寛水 13 年 (1630)	銅	243	14	6.0	39 古寛永	90094
248	30	16	主屋上層建物 2	發地層	寛水通寶	寛水 13 年 (1630)	銅	254	14	5.7	40 古寛永	90095
249	30	16	主屋上層建物 2	發地層	寛水通寶	寛水 13 年 (1630)	銅	245	12	6.0	19 1/4 次 古寛永	90099
250	30	16	主屋上層建物 2	發地層	寛水通寶	寛水 13 年 (1630)	銅	244	12	5.4	36 古寛永	90100
251	30	16	主屋上層建物 2	發地層	寛水通寶	寛水 13 年 (1630)	銅	255	12	6.6	13 1/4 次 古寛永	90101
252	30	16	主屋上層建物 2	發地層	寛水通寶	寛水 13 年 (1630)	銅	254	12	4.8	34 古寛永	90106
253	30	16	主屋上層建物 2	發地層	寛水通寶	寛水 13 年 (1630)	銅	242	10	5.0	31 古寛永	90111
254	30	16	主屋上層建物 2	發地層	寛水通寶	寛水 13 年 (1630)	銅	245	13	5.3	34 古寛永	90112
255	30	16	主屋上層建物 2	發地層	寛水通寶	寛水 13 年 (1630)	銅	248	16	7.2	33 古寛永	90114
256	30	17	主屋上層建物 2	發地層	寛水通寶	寛水 13 年 (1630)	銅	245	11	6.2	28 古寛永	90123
257	30	17	主屋上層建物 2	發地層	寛水通寶	寛水 13 年 (1630)	銅	246	11	5.7	32 古寛永	90124
258	30	17	主屋上層建物 2	發地層	寛水通寶	寛水 13 年 (1630)	銅	254	11	5.9	27 古寛永	90129
259	30	17	主屋上層建物 2	發地層	寛水通寶	寛水 13 年 (1630)	銅	247	15	5.9	37 古寛永	90130
260	30	17	壁穴建物跡 1		寛水通寶	寛水 13 年 (1630)	銅	259	14	5.5	29 古寛永	90132
261	30	17	壁穴建物跡 1		寛水通寶	寛水 13 年 (1630)	銅	241	10	5.6	26 古寛永	90138
262	30	17	壁穴建物跡 1		寛水通寶	寛水 13 年 (1630)	銅	251	12	5.3	30 古寛永	90147
263	30	17	壁穴建物跡 1		寛水通寶	寛水 13 年 (1630)	銅	234	11	6.2	27 古寛永	90148
264	31	17	主屋上層建物 2	發地層	寛水通寶	寛水 13 年 (1630)	銅	243	13	5.8	13 古寛永	90186
265	31	17	表鉢		寛水通寶	寛水 13 年 (1630)	銅	237	14	5.5	25 古寛永	140190003
266	31	17	主屋上層建物 1・2	灰色裡襯 1	寛水通寶	寛水 8 年 (1658)	銅	251	13	5.8	19 1/4 次 新寛永 (文銘)	140190013
267	31	17	主屋上層建物 1・2	灰色裡襯 1	寛水通寶	寛水 8 年 (1658)	銅	236	12	5.0	15 1/2 次 新寛永 (文銘)	140190014
268	31	17	主屋上層建物 1・2	灰色裡襯 1	寛水通寶	寛水 8 年 (1658)	銅	256	14	5.4	39 新寛永 (文銘)	140190018
269	31	17	主屋上層建物 1・2	發地層	寛水通寶	寛水 8 年 (1658)	銅	25	13	47	25 新寛永 (文銘)	90014
270	31	17	主屋上層建物 1・2	發地層	寛水通寶	寛水 8 年 (1658)	銅	250	12	6.9	26 新寛永 (文銘)	90015
271	31	17	主屋上層建物 1・2	發地層	寛水通寶	寛水 8 年 (1658)	銅	251	12	7.0	32 新寛永 (文銘)	90016
272	31	17	主屋上層建物 1・2	發地層	寛水通寶	寛水 8 年 (1658)	銅	254	13	7.0	29 新寛永 (文銘)	90032
273	31	17	主屋上層建物 1・2	發地層	寛水通寶	寛水 8 年 (1658)	銅	252	13	6.1	23 新寛永 (文銘)	90040
274	31	17	主屋上層建物 1・2	發地層	寛水通寶	寛水 8 年 (1658)	銅	256	15	5.9	40 新寛永 (文銘)	90047
275	31	17	主屋上層建物 1・2	發地層	寛水通寶	寛水 8 年 (1658)	銅	251	13	5.7	34 新寛永 (文銘)	90068
276	31	17	主屋上層建物 2	發地層	寛水通寶	寛水 8 年 (1658)	銅	250	13	5.4	34 新寛永 (文銘)	90075
277	31	17	主屋上層建物 2	發地層	寛水通寶	寛水 8 年 (1658)	銅	252	13	7.1	28 新寛永 (文銘)	90082
278	31	17	主屋上層建物 2	發地層	寛水通寶	寛水 8 年 (1658)	銅	254	14	5.7	37 新寛永 (文銘)	90083
279	31	17	主屋上層建物 2	發地層	寛水通寶	寛水 8 年 (1658)	銅	256	13	5.8	32 新寛永 (文銘)	90102
280	31	17	主屋上層建物 2	發地層	寛水通寶	寛水 8 年 (1658)	銅	251	12	5.9	34 新寛永 (文銘)	90115
281	31	17	主屋上層建物 2	發地層	寛水通寶	寛水 8 年 (1658)	銅	256	15	5.9	33 新寛永 (文銘)	90116

編號 No.	圖 號	所佔地點	層位	時期	想時代	材質	剖面圖			備考	登錄號	
							長(公尺) Length(m)	寬(公尺) Width(m)	高(公尺) Height(m)			
282	31	17	三層上層建築物 2	廢地層	寬水通寶	宋文 8 年 (1069)	鋼	251	12	69	26 新甕水 (文純)	90117
283	31	17	土壁	廢地層	寬水通寶	宋文 8 年 (1069)	鋼	250	11	60	29 新甕水 (文純)	90156
284	31	17	黃洋	廢地層	寬水通寶	宋文 8 年 (1069)	鋼	250	13	56	35 新甕水 (文純)	90168
285	31	17	三層上層建築物 2	廢地層	寬水通寶	宋文 8 年 (1069)	鋼	240	14	56	20 新甕水 (文純)	90087
286	31	17	窓穴建物跡 1		寬水通寶	元祐 10 年 (1097)	鋼	227	14	62	27 新甕水 (背光)	90144
287	31	17	三層上層建築物 1・2	糖杏中	寬水通寶	元祐 10 年 (1097)	鋼	237	13	57	19 新甕水	140190011
288	31	17	三層上層建築物 1・2	灰色磚混土 磚黏土上	寬水通寶	元祐 10 年 (1097)	鋼	223	12	69	23 新甕水	140190019
289	31	17	三層上層建築物 1・2	鐵灰土跡去	寬水通寶	元祐 10 年 (1097)	鋼	241	12	58	31 新甕水	90003
290	31	17	三層上層建築物 1・2	鐵灰土跡去	寬水通寶	元祐 10 年 (1097)	鋼	219	11	73	21 新甕水	90002
291	31	17	三層上層建築物 1・2	鐵灰土跡去	寬水通寶	元祐 10 年 (1097)	鋼	228	11	66	25 新甕水	90003
292	31	17	三層上層建築物 1・2	鐵灰土跡去	寬水通寶	元祐 10 年 (1097)	鋼	244	09	62	26 新甕水	90005
293	31	17	三層上層建築物 1・2	遺構移出	寬水通寶	元祐 10 年 (1097)	鋼	229	12	55	30 新甕水	90009
294	31	17	三層上層建築物 1・2	廢地層	寬水通寶	元祐 10 年 (1097)	鋼	227	10	64	21 二個體形懷合 90030 + 90064 新甕水	90011
295	31	17	三層上層建築物 1・2	土間參土地	寬水通寶	元祐 10 年 (1097)	鋼	231	11	71	19 新甕水	90013
296	31	18	三層上層建築物 1・2	廢地層	寬水通寶	元祐 10 年 (1097)	鋼	252	13	64	39 新甕水	90017
297	31	18	三層上層建築物 1・2	廢地層	寬水通寶	元祐 10 年 (1097)	鋼	234	21	60	38 90021 + 90187 圖卷 新甕水	90021
298	31	18	三層上層建築物 1・2	廢地層	寬水通寶	元祐 10 年 (1097)	鋼	232	21	63	39 90021 + 90187 圖卷 新甕水	90182
299	31	18	三層上層建築物 1・2	廢地層	寬水通寶	元祐 10 年 (1097)	鋼	229	14	51	10 新甕水	90023
300	31	18	三層上層建築物 1・2	廢地層	寬水通寶	元祐 10 年 (1097)	鋼	249	16	58	19 新甕水	90024
301	31	18	三層上層建築物 1・2	廢地層	寬水通寶	元祐 10 年 (1097)	鋼	233	12	54	23 新甕水	90026
302	31	18	三層上層建築物 1・2	廢地層	寬水通寶	元祐 10 年 (1097)	鋼	226	14	34	12 新甕水	90029
303	31	18	三層上層建築物 1・2	廢地層	寬水通寶	元祐 10 年 (1097)	鋼	220	12	74	16 新甕水	90031
304	32	18	三層上層建築物 1・2	廢地層	寬水通寶	元祐 10 年 (1097)	鋼	226	09	78	18 新甕水	90038
305	32	18	三層上層建築物 1・2	廢地層	寬水通寶	元祐 10 年 (1097)	鋼	246	12	64	26 新甕水	90043
306	32	18	三層上層建築物 1・2	廢地層	寬水通寶	元祐 10 年 (1097)	鋼	233	12	73	27 新甕水	90053
307	32	18	三層上層建築物 1・2	西漢木漆器組	寬水通寶	元祐 10 年 (1097)	鋼	238	09	72	24 新甕水、現場 SX100	90060
308	32	18	三層上層建築物 1・2	廢地層	寬水通寶	元祐 10 年 (1097)	鋼	245	16	57	30 新甕水	90065
309	32	18	三層上層建築物 1・2	廢地層	寬水通寶	元祐 10 年 (1097)	鋼	228	12	36	17 新甕水	90067
310	32	18	三層上層建築物 2	廢地層	寬水通寶	元祐 10 年 (1097)	鋼	226	08	73	24 新甕水	90076
311	32	18	三層上層建築物 2	廢地層	寬水通寶	元祐 10 年 (1097)	鋼	233	11	60	29 新甕水	90079
312	32	18	三層上層建築物 2	廢地層	寬水通寶	元祐 10 年 (1097)	鋼	230	10	70	21 新甕水	90085
313	32	18	三層上層建築物 2	廢地層	寬水通寶	元祐 10 年 (1097)	鋼	231	12	64	25 新甕水	90086
314	32	18	三層上層建築物 2	廢地層	寬水通寶	元祐 10 年 (1097)	鋼	234	11	51	25 新甕水	90091
315	32	18	三層上層建築物 2	廢地層	寬水通寶	元祐 10 年 (1097)	鋼	221	09	65	21 新甕水	90092
316	32	18	三層上層建築物 2	廢地層	寬水通寶	元祐 10 年 (1097)	鋼	216	09	81	14 新甕水	90093
317	32	18	三層上層建築物 2	廢地層	寬水通寶	元祐 10 年 (1097)	鋼	236	11	56	27 新甕水	90096
318	32	18	三層上層建築物 2	廢地層	寬水通寶	元祐 10 年 (1097)	鋼	229	13	48	25 新甕水	90097
319	32	18	三層上層建築物 2	廢地層	寬水通寶	元祐 10 年 (1097)	鋼	243	08	87	16 新甕水	90098
320	32	18	三層上層建築物 2	廢地層	寬水通寶	元祐 10 年 (1097)	鋼	211	08	80	14 新甕水	90103
321	32	18	三層上層建築物 2	廢地層	寬水通寶	元祐 10 年 (1097)	鋼	217	09	72	18 新甕水	90104
322	32	18	三層上層建築物 2	廢地層	寬水通寶	元祐 10 年 (1097)	鋼	231	12	59	25 新甕水	90105
323	32	18	三層上層建築物 2	廢地層	寬水通寶	元祐 10 年 (1097)	鋼	232	12	76	25 新甕水	90107
324	32	18	三層上層建築物 2	廢地層	寬水通寶	元祐 10 年 (1097)	鋼	216	11	75	18 新甕水	90108
325	32	18	三層上層建築物 2	廢地層	寬水通寶	元祐 10 年 (1097)	鋼	230	10	60	13 / 2 次 新甕水	90119
326	32	18	三層上層建築物 2	廢地層	寬水通寶	元祐 10 年 (1097)	鋼	244	11	63	31 新甕水	90131
327	32	18	窓穴建物跡 1		寬水通寶	元祐 10 年 (1097)	鋼	231	11	64	28 新甕水	90133
328	32	18	窓穴建物跡 1		寬水通寶	元祐 10 年 (1097)	鋼	232	08	60	16 新甕水	90134

測量 No.	回	厚測	出土地点	層位	種類	想跡年	材質	断面測量			登録No.
								高さ(cm)	幅さ(cm)	厚さ(cm)	
329	32	18	堅穴建物跡 1		寛永通寶	元禄 10 年 (1697)	銅	234	11	5.8	25 新寛永
330	32	18	堅穴建物跡 1		寛永通寶	元禄 10 年 (1697)	銅	231	10	6.4	21 新寛永
331	32	18	堅穴建物跡 1		寛永通寶	元禄 10 年 (1697)	銅	226	0.8	7.2	21 新寛永
332	32	18	堅穴建物跡 1		寛永通寶	元禄 10 年 (1697)	銅	229	1.0	6.6	19 新寛永
333	32	18	堅穴建物跡 1		寛永通寶	元禄 10 年 (1697)	銅	232	1.0	6.4	19 新寛永
334	32	18	堅穴建物跡 1		寛永通寶	元禄 10 年 (1697)	銅	236	1.1	5.8	22 異形としないが、文字の細さから新寛永と考 えられる
335	32	18	上磯	堅地帯	寛永通寶	元禄 10 年 (1697)	銅	231	0.8	7.0	17 新寛永
336	32	19	上磯	被災土	寛永通寶	元禄 10 年 (1697)	銅	229	1.0	6.4	27 新寛永
337	32	19	崎峰藏飯糰部	表土	寛永通寶	元禄 10 年 (1697)	銅	230	1.0	6.3	23 新寛永
338	32	19	表探		寛永通寶	元禄 10 年 (1697)	銅	227	1.0	6.8	15/2欠 新寛永
339	32	19	表探		寛永通寶	元禄 10 年 (1697)	銅	248	1.3	5.8	24 新寛永
340	32	19	表探		寛永通寶	元禄 10 年 (1697)	銅	217	1.8	6.6	13 新寛永
341	32	19	表探		寛永通寶	元禄 10 年 (1697)	銅	213	0.9	6.7	15 新寛永
342	32	19	表探		寛永通寶	元禄 10 年 (1697)	銅	238	0.9	7.4	140190001
343	32	19	表探		寛永通寶	元禄 10 年 (1697)	銅	226	1.3	7.0	140190002
344	33	19	表探		寛永通寶	元禄 10 年 (1697)	銅	235	1.0	6.7	140190005
345	33	19	表探		寛永通寶	元禄 10 年 (1697)	銅	240	1.3	6.2	31 新寛永
346	33	19	不明	表土	寛永通寶	元禄 10 年 (1697)	銅	227	0.8	6.4	20 新寛永
347	33	19	不明	表土	寛永通寶	元禄 10 年 (1697)	銅	248	1.1	6.3	35 新寛永
348	33	19	主屋上層建物 1・2	堅地帯	寛永通寶	元文 4 年 (1730)	銅	260	4.0	0.58	51 様で判読困難、既一文既か
349	33	19	主屋上層建物 1・2	堅地帯	寛永通寶	元文 4 年 (1730)	銅	258	2.0	6.0	31 一文一既
350	33	19	主屋上層建物 1・2	赤色稚朱	寛永通寶	元文 4 年 (1730)	銅	282	3.7	5.1	44 様で判読困難、既一文既か
351	33	19	主屋上層建物 1・2	堅地帯	寛永通寶	元文 4 年 (1730)	銅	261	3.0	5.7	44 様で判読困難、既一文既か
352	33	19	鶴屋	堅地帯	寛永通寶	元文 4 年 (1730)	銅	275	2.9	4.9	37 様で判読困難、既一文既か
353	33	19	鶴屋	堅地帯	寛永通寶	元文 4 年 (1730)	銅	257	3.2	4.7	47 様で判読困難、既一文既か
354	33	19	主屋上層建物 2	堅地帯	寛永通寶	元文 4 年 (1730)	銅	277	3.2	6.8	44 様で判読困難、既一文既か
355	33	19	表探		寛永通寶	元文 4 年 (1730)	銅	274	5.1	4.4	44 様で判読困難、既一文既か
356	33	19	表探		寛永通寶	明和 5 年 (1768)	銅	279	1.0	6.4	40 真鍮四文既 既一文既か
357	33	19	鶴屋	堅地帯	寛永通寶	天保 4 年 (1832)	真鍮	278	1.1	6.9	50 真鍮一 真鍮一文既 既一文既か
358	33	19	不明	表土	寛永通寶	元延光元年 (1860)	銅	292	2.7	4.2	64 50 真鍮一 真鍮一文既 既一文既か
359	33	19	主屋上層建物 1・2	灰オリーブ色 透明白基土上	元文二年 (1730)	銅	176	1.6	幅 10.3	-	140190032
360	33	19	不明		仙台通寶	天明 4 年 (1784)	銅	238	1.8	6.0	40 様で判読困難だが形状から判別
361	33	19	不明		仙台通寶	天明 4 年 (1784)	銅	232	2.0	-	40 様で判読困難だが形状から判別
362	33	19	主屋上層建物 1・2	灰オリーブ色 透明白基土上	天明 4 年 (1784)	銅	260	2.0	-	32 様で判読困難だが形状から判別	
363	33	19	主屋上層建物 1・2	灰オリーブ色 透明白基土上	天明 4 年 (1784)	銅	230	1.2	4.8	40 様で判読困難だが形状から判別	
364	33	19	主屋上層建物 1・2	灰オリーブ色 透明白基土上	天明 4 年 (1784)	銅	220	1.2	6.5	27 様で判読困難だが形状から判別	
365	33	19	主屋上層建物 1・2	堅地帯	仙台通寶	天明 4 年 (1784)	銅	229	3.6	3.2	27 の 1 次、既で判読困難だが形状から判別
366	33	19	主屋上層建物 2	堅地帯	仙台通寶	天明 4 年 (1784)	銅	260	3.3	4.5	42 様で判読困難だが形状から判別
367	33	19	主屋上層建物 2	堅地帯	仙台通寶	天明 4 年 (1784)	銅	265	2.45	3.0	32 既一文から判別
368	33	19	主屋上層建物 2	堅地帯	仙台通寶	天明 4 年 (1784)	銅	247	2.5	6.5	23 様で判読困難だが形状から判別
369	33	19	精査中		文久水寶	文久 3 年 (1863)	銅	264	1.2	6.3	29 四文既 既一文既 既一文既
370	33	19	主屋上層建物 1・2	灰オリーブ色 透明白基土上	雁首既	江戸時代 明治	銅	225	1.5	10.3	23 既一文から判別
371	33	19	主屋上層建物 1・2	堅地帯	雁首既	江戸時代 明治	銅	226	1.0	3.9	19 既一文から判別
372	33	19	主屋上層建物 2	堅地帯	雁首既	江戸時代 明治	銅	195	1.7	8.5	19 既一文から判別
373	34	19	主屋上層建物 2	堅地帯	雁首既	江戸時代 明治	銅	239	0.9	5.6	13 既一文から判別
374	34	19	主屋上層建物 1・2	堅地帯	雁首既	江戸時代 明治	銅	184	3.3	6.8	28 既一文から判別
375	34	20	主屋上層建物 1・2	堅地帯	横銘既	不明	銅	190	1.4	7.8	16 既一文から判別していく。判読困難。既一文既から判別する可能性あり。

測量 No.	回	写真	出土地点	層位	種類	想定年	材質	断面測量			登録 No.	
								高さ(cm)	幅さ(cm)	厚さ(cm)		
376	34	20	不明	被災土	手掘削貯	昭和10年 (1935)	鋼	22.0	11	-	25 二枚板一箇	90178
377	34	20	表探		手掘削貯	不明	鋼	21.9	0.9	-	25 表面摩滅著しく剥落困難	90181
378	34	20	上部	被災土	一鉢貯	昭和17年 (1942)	鋼	28.1	17	-	67 表面大日本明治十七年 錠状 表面一箇	90158
379	34	20	不明	被災土	一鉢貯	大正10年 (1921)	鋼	22.9	13	-	36 表面大日本大正十一年 錠状 表面一箇	90183
380	34	20	硝屋		一鉢貯	大正11年 (1922)	鋼	23.0	12	-	35 表面大日本大正一年 錠状 表面一箇	90154
381	34	20	不明	表土	十錢銅貨 二コマ貨	昭和15年 (1940)	銅	21.8	17	-	17 表面大日本昭和十五年 銀花紋 銀面十銭・銅板一枚	90184
382	34	20	表探		十錢銅貨	昭和19年 (1944)	銅	19.2	16	4.5	21 表面大日本昭和十九年 銀面十銭・銅板一枚	90185
383	34	20	上部	被災土中	ドイツコイン	1982年	不明	23.3	16	-	53 1 DEUTSCHE MARK 硬貨	90153
384	34	20	上部	被災土中	ドイツコイン	1969年	不明	26.6	16	-	70 1 DEUTSCHE MARK 硬貨	90159
385	34	20	上部	被災土中	ドイツコイン	1960年	不明	19.9	14	-	35 50 PFENNIG 硬貨	90161
386	34	20	上部	被災土中	ドイツコイン	1964年	不明	19.9	14	-	33 50 PFENNIG 硬貨	90162
387	34	20	上部	被災土中	オーストリア コイン	1974年	不明	23.2	13	-	46 1 SCHILLING 硬貨	90164
388	34	20	上部	被災土中	オーストリア コイン	1974年	不明	25.8	13	-	59 10 SCHILLING 硬貨	90159
389	34	20	硝屋	廢地層	アメリカ コイン	1981年	不明	18.9	15	-	34 ONE CENT 硬貨	90152
390	34	20	不明	被災土	アメリカ コイン	1982年	不明	19.0	14	-	21 ONE CENT 硬貨	90176
391	34	20	硝屋	廢地層	マレーシア コイン	1992年	不明	19.2	12	-	24 10 SEN 硬貨	90153
392	34	20	硝屋	廢地層	マレーシア コイン	1993年	不明	23.5	16	-	55 10 SEN 硬貨	90151
393	34	20	玉屋	被災土除去	シリアクイーン	1997年	-	26.4	17	-	69 10 シリアポンド	90007
394	34	20	玉屋	被災土除去	玩具メダル	-	-	25.1	14	-	52 玩具用メダル〔スロットル〕ジャイアンツ	90008

第8表 炉壁観察表(395)

() 残存値

測量 No.	回	写真	出土地点	層位	種類	残存位置	目測高さ (cm)	目測幅 (cm)	目測厚 (cm)	重量 (g)	年代	備考	登録 No.
								基部	最高部	幅			
385	34	20	011	表土	砂鉄	通風孔直上	6.60	0.91	0.32	131.4	中後末～江戸初期	内面に漆着漆	80416

第9表 鉄滓類観察表(396～399)

() 残存値

測量 No.	回	写真	出土地点	層位	種類	残存位置	目測高さ (cm)	目測幅 (cm)	目測厚 (cm)	重量 (g)	備考	登録 No.	
								基部	最高部	幅			
396	-	20	上層上層建物2	廢地層	砂鉄塊	砂鉄塊	12.0	0.50	0.50	226.8	無	無	中後末～江戸初期
397	-	20	011	表土	砂鉄塊	砂鉄塊	-	-	-	4.0	有	-	中後末～江戸初期
398	-	20	011	埋土	鐵造片	砂鉄塊	-	-	-	187.0	-	-	鐵造末～江戸初期
399	-	20	011	表土	砂鉄	砂鉄塊	-	-	-	170.9	有	-	中後末～江戸初期

第10表 鉄滓計測表

登録 No.	回	写真	出土地点	層位	鉄滓	鉄滓位置	内側			外側	内側	外側	鉄滓	合計(g)
							高さ(cm)	幅さ(cm)	厚さ(cm)					
80083	-	玉屋上層建物1・2	廢地層	砂鉄塊	砂鉄塊	砂鉄塊	0.0	0.0	0.0	0.0	131.2	0.0	0.0	131.2
80126・80140	-	玉屋上層建物1・2	廢地層(底)	砂鉄塊	砂鉄塊	砂鉄塊	51.3	293.5	0.0	451.9	0.0	0.0	624.0	226.9
80162・80163	-	玉屋上層建物1・2	廢地層	砂鉄塊	砂鉄塊	砂鉄塊	0.0	132.6	0.0	317.0	0.0	0.0	0.0	0.0
80016・80017・ 80018・80019・ 80020・80021・ 80053	-	玉屋上層建物2	廢地層	砂鉄塊	砂鉄塊	砂鉄塊	374.6	941.0	0.0	3202.8	0.0	935.3	236.8	0.0
80158	-	玉屋上層建物2	廢地層	砂鉄塊	砂鉄塊	砂鉄塊	0.0	0.0	0.0	0.0	165.1	0.0	0.0	165.1
80022・80023	011	-	表土	砂鉄	砂鉄	砂鉄	69.0	862.2	0.0	875.5	0.0	0.0	0.0	592.4
29・30	011	-	埋土	砂鉄	砂鉄	砂鉄	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
80112	-	土蔵基礎北西隅	石槽内	砂鉄塊	砂鉄塊	砂鉄塊	0.0	0.0	0.0	82.5	0.0	0.0	0.0	82.5
80190	-	硝屋	廢地層	砂鉄塊	砂鉄塊	砂鉄塊	171.4	0.0	0.0	269.0	0.0	0.0	0.0	296.0
合計(g)							666.3	2229.3	0.0	4913.4	0.0	1231.6	226.8	624.0
											0.0	2925.2	40	1870
														12616.9

VI 自然科学的分析

1 放射性炭素年代 (AMS 測定)

(株) 加速器分析研究所

(1) 測定対象試料

岩手県吉田家住宅跡は、岩手県陸前高田市気仙町字町裏 12 に所在する。測定対象試料は、炉跡から出土した炭片と炉壁石に付着した煤（炭化物）10 点、炭片 5 点の合計 15 点である（表 1）。試料 5 は炉壁石の表面に薄く付着した炭化物を採取して試料とした。

(2) 化学処理工程

- 〈1〉メス・ビンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- 〈2〉酸-アルカリ-酸(AAA : Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常 1 mol/l (1 M) の塩酸(HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH) 水溶液を用い、0.001M から 1 M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1 M に達した時には「AAA」、1 M 未満の場合は「AaA」と表 1 に記載する。
- 〈3〉試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO₂)を発生させる。
- 〈4〉真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- 〈5〉精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- 〈6〉グラファイトを内径 1 mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

(3) 測 定 方 法

加速器をベースとした ¹⁴C-AMS 専用装置(NEC 社製)を使用し、¹⁴C の計数、¹³C 濃度 (¹³C/¹²C)、¹⁴C 濃度 (¹⁴C/¹²C) の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST) から提供されたシュウ酸(HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

(4) 算 出 方 法

- 〈1〉 $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からの差を千分偏差(%)で表した値である(表 1)。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- 〈2〉¹⁴C 年代(Libby Age : yrBP) は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年(0yrBP)として測る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期(5568 年)を使用する(Stuiver and Polach 1977。¹⁴C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。¹⁴C 年代と誤差は、下 1 術を丸めて 10 年単位で表示される。また、¹⁴C 年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の¹⁴C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2% であることを意味する。
- 〈3〉pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。pMC が小さい(¹⁴C が少ない)ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上(¹⁴C の量が標準現代炭素と同

等以上)の場合 Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。

(4)暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma = 68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma = 95.4\%$)で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv4.3較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

(5) 測定結果

測定結果を表1、2に示す。

試料名1～10の ^{14}C 年代は、 $370 \pm 20\text{yrBP}$ （試料1）から $30 \pm 30\text{yrBP}$ （試料10）の間にある。暦年較正年代（ 1σ ）は、最も古い1が1455～1617cal ADの間に2つの範囲で示される。次に古い4の較正年代は、 1σ では1528～1660cal ADの間に2つの範囲で示されるが、 2σ では確率は低いものの18世紀の範囲が加わる。3番目に古い5は、 1σ では1645～1793cal ADの間に2つの範囲で示されるが、 2σ ではやはり確率は低いものの16世紀と20世紀の範囲が加わる。これら以外の7点の較正年代は、いずれも17世紀後半または18世紀初頭から20世紀前半頃の間の年代値となっている。なお、試料2～10、13、14の較正年代については、記載された値よりも新しい可能性がある点に注意を要する（表2下の警告参照）。

試料名11～15の ^{14}C 年代は、 $340 \pm 20\text{yrBP}$ （試料12）から $100 \pm 20\text{yrBP}$ （試料14）の間にある。暦年較正年代（ 1σ ）を見ると、5点の中では古い3点（試料11、12、15）は15世紀後葉もしくは16世紀前葉から17世紀前半頃までの間に複数の範囲で示され、おおむね近い年代値となっている。これらより新しい試料13は1670～1943cal AD、試料14は1695～1917cal ADの間に各々4つの範囲で示される。

試料5を除く14点の炭素含有率はすべて50%を超える。化学処理、測定上の問題は認められない。5は、炉壁石表面に薄く付着した炭化物を採取したが、その際炉壁石自体の細粉もしくは土が混入した可能性があり、炭素含有率は8%という低い値となった。このため、5の年代値の扱いには注意を要する。

文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360
- Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55(4), 1869-1887
- Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19(3), 355-363

表1. 放射性炭素年代測定結果($\delta^{13}\text{C}$ 補正値)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C} (\text{‰})$ (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正値	
						Libby Age (yrBP)	pMC(‰)
IAAA-151861	1	I-1 (SL01) 半褐色地土面上	面片	AAA	-27.41 ± 0.53	270 ± 30	95.44 ± 0.26
IAAA-151862	2	採取地点不明(SL02) 半褐色地土面上	面片	AAA	-24.64 ± 0.41	170 ± 30	97.92 ± 0.30
IAAA-151863	3	採取地点不明(SL03) 半褐色地土面上	面片	AAA	-21.86 ± 0.68	170 ± 30	97.85 ± 0.30
IAAA-151864	4	I-5 (SL04) 半褐色地土面上	面片	AAA	-23.32 ± 0.67	270 ± 30	96.67 ± 0.28
IAAA-151865	5	カツラ状根瘤(SL05) 石積壁体	複合骨甲殻石	AaA	-25.55 ± 0.46	240 ± 30	97.00 ± 0.26
IAAA-151866	6	採取地点不明(SL11) 石積壁体内	面片	AAA	-24.32 ± 0.59	180 ± 30	97.76 ± 0.31
IAAA-151867	7	採取地点不明(SL12) 黑口	面片	AaA	-23.34 ± 0.61	220 ± 30	97.33 ± 0.28
IAAA-151868	8	採取地点不明(SL13) 石積壁体内	面片	AaA	-24.30 ± 0.46	90 ± 30	98.88 ± 0.30
IAAA-151869	9	I-7 (SL17) 半褐色地土面上	面片	AAA	-24.59 ± 0.54	50 ± 30	99.37 ± 0.31
IAAA-151870	10	黒穴地物I-9(SL20)	面片	AAA	-26.14 ± 0.53	30 ± 30	99.62 ± 0.31
IAAA-152743	11	I-2 (SL02)	面片	AAA	-26.72 ± 0.61	320 ± 30	96.04 ± 0.29
IAAA-152744	12	I-3 (SL03)	面片	AaA	-23.17 ± 0.53	340 ± 30	98.82 ± 0.27
IAAA-152745	13	採取地点不明(SL21)	面片	AAA	-27.62 ± 0.53	170 ± 30	97.94 ± 0.29
IAAA-152746	14	採取地点不明(SL22)	面片	AAA	-22.96 ± 0.54	100 ± 30	98.71 ± 0.30
IAAA-152747	15	採取地点不明(SL23)	面片	AAA	-36.79 ± 0.25	320 ± 30	96.69 ± 0.30

[注] 登録番号 : #7660,#7783

表2. 放射性炭素年代測定結果($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		1σ暦年較正用 (yrBP)	1σ暦年年代範囲	2σ暦年年代範囲	
	Age(yrBP)	pMC(‰)			1σ	2σ
IAAA-151861	410 ± 20	94.97 ± 0.26	374 ± 23	1455calAD - 1515calAD (52.7‰) 1601calAD - 1617calAD (15.9‰)	1446calAD - 1523calAD (53.8‰) 1572calAD - 1603calAD (31.6‰)	
IAAA-151862	160 ± 20	96.03 ± 0.29	169 ± 24	1670calAD - 1682calAD (11.9‰)* 1735calAD - 1790calAD (89.9‰)* 1799calAD - 1806calAD (5.9‰)* 1930calAD - 1940calAD (41.9‰)*	1663calAD - 1699calAD (17.2‰)* 1726calAD - 1811calAD (54.5‰)* 1801calAD - 1810calAD (8.9‰)* 1852calAD - 1890calAD (2.1‰)* 1917calAD - .. (30.9‰)*	
IAAA-151863	120 ± 20	96.48 ± 0.27	174 ± 24	1669calAD - 1682calAD (12.9‰)* 1726calAD - 1740calAD (87.7‰)* 1796calAD - 1805calAD (5.8‰)* 1935calAD - 1948calAD (10.9‰)*	1662calAD - 1689calAD (8.1‰)* 1726calAD - 1813calAD (26.2‰)* 1918calAD - .. (21.6‰)*	
IAAA-151864	240 ± 20	97.00 ± 0.26	272 ± 23	1538calAD - 1551calAD (21.2‰)* 1631calAD - 1660calAD (2.9‰)*	1511calAD - 1525calAD (7.7‰)* 1585calAD - 1598calAD (6.9‰)* 1632calAD - 1660calAD (54.5‰)* 1784calAD - 1796calAD (1.2‰)*	
IAAA-151865	250 ± 20	96.93 ± 0.27	244 ± 23	1645calAD - 1665calAD (54.2‰)* 1786calAD - 1795calAD (14.0‰)*	1530calAD - 1550calAD (1.4‰)* 1633calAD - 1670calAD (65.8‰)* 1779calAD - 1800calAD (25.6‰)* 1945calAD - .. (12.7‰)*	
IAAA-151866	170 ± 20	97.90 ± 0.29	181 ± 25	1667calAD - 1688calAD (14.8‰)* 1724calAD - 1745calAD (63.8‰)* 1795calAD - 1805calAD (5.8‰)* 1930calAD - .. (11.6‰)*	1660calAD - 1692calAD (14.0‰)* 1728calAD - 1812calAD (65.5‰)* 1930calAD - .. (21.6‰)*	
IAAA-151867	190 ± 20	97.68 ± 0.26	217 ± 23	1652calAD - 1674calAD (25.7‰)* 1786calAD - 1799calAD (61.6‰)* 1944calAD - .. (19.9‰)*	1645calAD - 1662calAD (6.9‰)* 1738calAD - 1790calAD (1.2‰)* 1782calAD - 1803calAD (2.9‰)* 1935calAD - .. (13.8‰)*	
IAAA-151868	80 ± 20	99.02 ± 0.29	90 ± 24	1697calAD - 1725calAD (61.7‰)* 1813calAD - 1828calAD (11.5‰)* 1877calAD - 1917calAD (61.0‰)*	1691calAD - 1728calAD (25.7‰)* 1830calAD - 1852calAD (69.7‰)*	
IAAA-151869	50 ± 20	99.43 ± 0.29	50 ± 24	1702calAD - 1719calAD (61.9‰)* 1826calAD - 1851calAD (5.9‰)* 1885calAD - 1914calAD (61.3‰)*	1696calAD - 1726calAD (63.9‰)* 1833calAD - 1857calAD (6.2‰)* 1844calAD - 1853calAD (1.7‰)* 1896calAD - 1919calAD (61.4‰)*	
IAAA-151870	50 ± 20	99.39 ± 0.29	30 ± 25	1717calAD - 1726calAD (6.2‰)* 1826calAD - 1832calAD (2.6‰)* 1890calAD - 1910calAD (6.5‰)*	1697calAD - 1725calAD (3.3‰)* 1721calAD - 1835calAD (6.2‰)* 1841calAD - 1853calAD (9.5‰)* 1877calAD - 1919calAD (62.0‰)*	
IAAA-152743	350 ± 20	95.70 ± 0.27	321 ± 24	1517calAD - 1599calAD (54.9‰)* 1618calAD - 1606calAD (13.3‰)*	1487calAD - 1644calAD (65.4‰)*	
IAAA-152744	310 ± 20	96.18 ± 0.25	343 ± 22	1490calAD - 1523calAD (25.5‰)* 1530calAD - 1550calAD (2.7‰)* 1531calAD - 1603calAD (24.9‰)* 1610calAD - 1631calAD (15.3‰)*	1470calAD - 1534calAD (6.2‰)* 1538calAD - 1603calAD (6.2‰)*	
IAAA-152745	210 ± 20	97.41 ± 0.27	167 ± 23	1679calAD - 1692calAD (19.9‰)* 1725calAD - 1779calAD (10.9‰)* 1798calAD - 1805calAD (5.8‰)* 1930calAD - 1943calAD (19.9‰)*	1664calAD - 1692calAD (17.0‰)* 1726calAD - 1811calAD (54.9‰)* 1837calAD - 1841calAD (6.9‰)* 1852calAD - 1856calAD (1.7‰)* 1875calAD - 1893calAD (6.3‰)* 1917calAD - .. (20.1‰)*	
IAAA-152746	70 ± 20	99.18 ± 0.28	104 ± 24	1699calAD - 1726calAD (22.9‰)* 1811calAD - 1853calAD (2.1‰)* 1866calAD - 1862calAD (16.9‰)* 1908calAD - 1912calAD (6.4‰)*	1685calAD - 1723calAD (27.0‰)* 1807calAD - 1828calAD (68.4‰)*	
IAAA-152747	350 ± 20	95.73 ± 0.26	339 ± 24	1521calAD - 1602calAD (55.2‰)* 1624calAD - 1642calAD (12.8‰)*	1498calAD - 1664calAD (51.6‰)* 1610calAD - 1641calAD (20.8‰)*	

[参考範囲]

* Warning Date may extend out of range

* Warning Date may extend out of range

* Warning Date probably out of range

* Warning Date probably out of range

(これらの警告は軽正プログラム OxCalが発するもので、試料の14C年代に対応する軽正年代が、当該軽正年代より可能範囲を超える新しい年代となる可能性があることを表す。*, **, ---の間にその可能性が高くなる。)

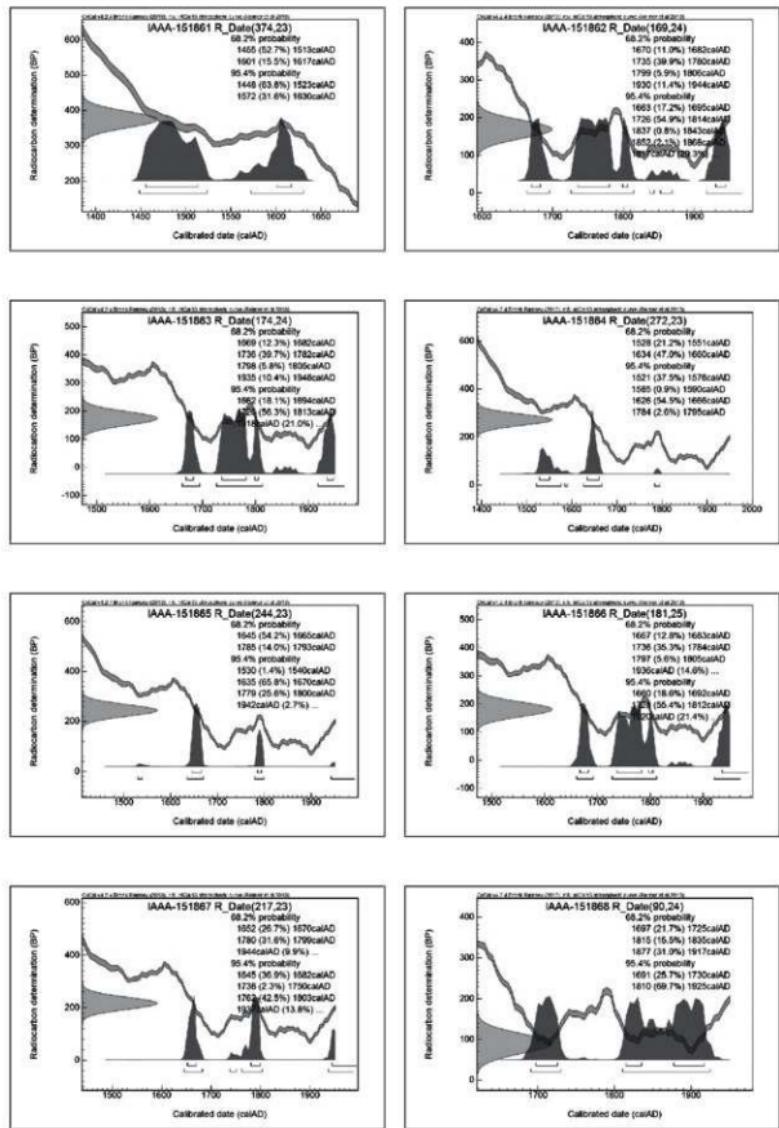


図1. 历年較正年代グラフ(参考)

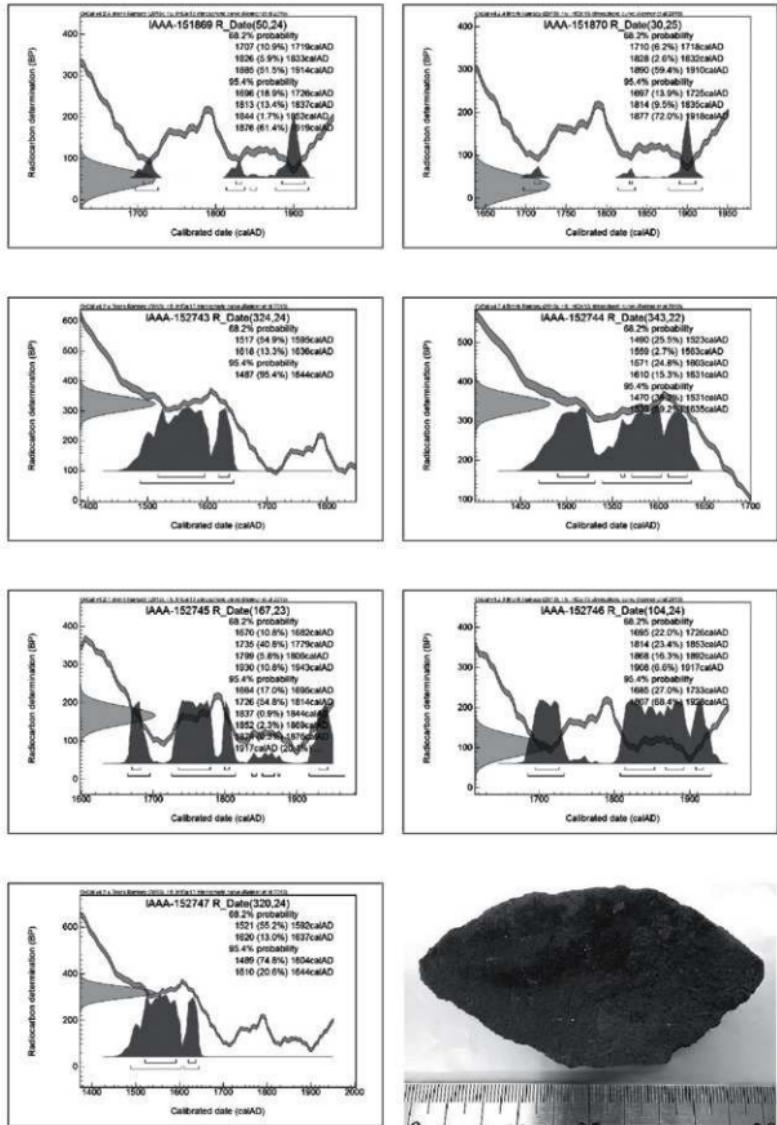


図2. 試料5写真

VII 調査のまとめ

平成26・27年の2箇年の調査から、吉田家住宅建設以前の遺構として中世の堅穴建物跡1棟・カマド状遺構6基・鍛冶炉21基、吉田家住宅に関わる近世～現代の礎石建物跡7棟、門跡2基、建物に関わるピット141個、礎石237個を確認した。

吉田家住宅建設以前の遺構群は、いずれも中世後半～末（15世紀後半～16世紀代）と考えられる鍛冶関連遺構で重複も認められることから、ある程度の期間操業が行われていたと推測される。出土した取瓶や鍛造剥片などの遺物から、铸造・鍛造鍛治が行われていたと考えられる。

吉田家住宅に関わる遺構は、主屋上層建物跡1・2・、主屋下層建物跡1・、土蔵跡・納屋（長屋）跡・味噌蔵跡・小屋跡・門跡1・2が認められた。主屋は、明治初年に減築後の建物である岩手県指定有形文化財の上層建物跡1・、減築以前の享和2年（1802）に大工棟梁七五郎によって建築された上層建物跡2（南側は1と同じ）、これを廻る下層建物跡1に分けられ、上層建物跡2棟については藩政期に描かれた3枚の屋敷絵図に符合する箇所が多く確認され、絵図史料の正確性が実証された。間取りや下屋の改修を経ながら現代に至ったことも分かった。また、納屋（長屋）跡と味噌蔵跡・小屋跡も礎石の状況から同時期に建築されたと見られ、改修の痕跡も認められた。棟札から明治14年（1881）に大工棟梁吉田忠吉によって建築されたことが分かる土蔵跡は、絵図から既存の建物を解体し、基壇・版築を施した後に切石を用いて再建築されたことも分かった。門跡も土蔵跡と同時に改修されたと見られる。小屋跡は嘉永5年絵図には描かれているものの、その後解体されたと考えられる。

遺物は、陶磁器・土・陶製品・石製品・貝・角製品・金属製品・錢貨・炉壁・鉄滓類がコンテナで25箱分出土した。時期は中世後半～近現代と考えられ、中世の遺物は吉田家住宅建設以前の鍛冶関連遺構に伴うもの、近世～近現代は吉田家住宅に関連する遺物に分けられる。陶磁器を鑑定した大橋康二によれば、1620～40年代の中国産磁器、1630～40年代の肥前産磁器の比較的上質の個体が複数出土しており、吉田家の本格的な近世の生活開始は寛永頃の可能性を推測している。また、高級磁器を焼いた肥前・有田長吉窑の磁器も出土しており、特筆される。18世紀は肥前磁器が増加し、1820年代以降は上質磁器が見られなくなり、日用雑器が占める傾向があり暮らししづらの変化が指摘されており、また、火事に遭っていないことから上質なものが伝世した可能性を挙げている。

三陸沿岸はこれまで度々津波の被害を受けてきたが、慶長16年（1611）の津波は、仙台藩領内の死者1783人、牛馬の溺死85頭を出した大津波であった記録がある。この津波に遭ったイスパニア使節ビスカイノの日記によれば、「吉浜から引き返して今泉（気仙町）に立寄ったが、津波のためほとんどの家が流され、宿舎を求めるのに難儀した」と記載される（陸前高田市 1995）。吉田宇右衛門（筑後）が気仙郡上有住村から移住し、大肝入に任命されたのが元和6年（1620）であることから考えると、吉田家は津波後の気仙郡今泉集落の復興に深く関わっていたと推測される。今泉村の町場を南北に走り直角に4回折れ曲がる道路と、それを取り巻く町割りは計画的に行われたと考えられる。

この吉田家住宅は、東日本大震災による津波からの復興のシンボルとして400年前の人々の思いを現在に伝える大切な文化財であり、語り継ぐべき財産であると考える。

参考文献

大橋康二 2009『年代別斎美猪口大事典』講談社

古泉弘 1983『江戸を掘る－近世都市考古学への招待－』柏書房

小林謙一 1991「江戸における近世瓦質・土質質櫛炉について」『江戸在地系土器の研究Ⅰ』江戸在地系土器研究会

兵庫埋蔵銭調査会 1996『日本出土銭総覧』1996年版

陸前高田市 1995『陸前高田市史 第三卷 沿革編（上）』

附編 「吉田家住宅」跡から出土した錢貨等について

川根正教（東京工芸大学）

1 錢貨等の分類種別

吉田家住宅跡の発掘調査によって出土した第1次調査分20点、第2次調査分189点、合計209点の錢貨等について分類を行った。

分類は、渡来銭、無文銭、寛永通宝、文久永宝、雁首銭、鉄銭、近代硬貨、外国硬貨、玩具、不明の10種類とした。表1及び図1に示したとおり、最も多いのが寛永通宝の135点で、次いで渡来銭26点、鉄銭15点、外国硬貨13点となる。特殊なものとして、錢文をもたない無文銭が1点、平安通宝が1点、本来は錢貨ではないが錢縫に混入して錢貨として使用された雁首銭が3点認められた。

2 寛永通宝の分類について

分類した錢貨のうち最も多く出土した寛永通宝は、江戸時代を通じて数次にわたって鋳造された近世の代表的な錢貨である。文献資料から鋳造年代がある程度判明していること、各時期に鋳造された寛永通宝にはそれぞれ形態的特徴が認められることから考古学的手法によって分類・編年を行うことにより、遺構や遺物の年代を推定する資料として有効な活用を図ることができる（註1・2）。

寛永通宝の鋳造時期は諸文献資料によってⅠ期からⅩ期に整理することができるが、吉田家住宅跡からはⅠ期からⅥ期までの寛永通宝が出土している。ここでは、同一時期に鋳造された寛永通宝に様式という概念を、彫母銭を同一とすると考えられる寛永通宝に型という概念を与え、文字形態などによってⅠa様式・Ⅰb様式・Ⅱ様式・Ⅲa様式・Ⅲb様式・Ⅳ様式・Ⅴ様式・Ⅵ様式の8様式に大分類し、同時に判明する資料については型分類を合わせて行い、表2-1（第1次調査）・表2-2（第2次調査）に示した。

諸文献資料による各鋳造時期の年代は、Ⅰa期 1636～1640年、Ⅰb期 1656～1659年、Ⅱ期 1668～1683年、Ⅲa期 1697～1707年、Ⅲb期 1708～1712年、Ⅳ期 1714～1732年、Ⅴ期 1736～1745年、Ⅵ期 1765～1788年である。

また表2において、渡来銭と無文銭には寛永通宝に先行する時期として0期を設定し、寛永通宝四文銭及び仙台通宝・文久永宝については該当する時期を与えてある。15点出土している鉄銭はおそらく寛永通宝鉄銭と考えられるが腐食が著しく、1点を除いて錢文が読み取れないこと、Ⅵ期以降X期まで数次にわたって鋳造されていることから、鋳造時期を特定することはできない。

3 出土錢貨からみた検出遺構の年代について

吉田家住宅跡第2次調査では、主屋をはじめとして旧土間、納屋・土蔵・味噌蔵の礎石が遺構として検出された。錢貨を含む遺物は表2のとおり、大地区と呼称する遺構毎の土層別に取り上げられている。各遺構の土層別出土錢貨等を整理したのが表3である。

建物の中心となる主屋については享和2（1802）年の建築とされ、さらに先行する建物が寛永年間には建築されたと考えられている。そして明治初期に改築が行われ、それ以後にも2回以上の大規模

な改築のあったことが指摘されている（註3）。主屋の各土層がいずれの時期に対応するものか検討してみると、最も古い様相を示しているのが下層建物最下層整地層（建物灰土）で渡来銭のみの出土、下層整地層からは渡来銭とI a期とした寛永期の寛永通宝が出土しており、寛永年間の建物に伴う整地層としての可能性は残されている。銭貨が多く出土しているのは下層建物整地層で、渡来銭、I a期とした寛永期、III a期とした元禄期の寛永通宝が主体となるが、明和期以降に鋳造された銭貨も出土している。

旧土間では、整地層、下層建物整地層から多くの銭貨が出土している。寛永期から元禄期の寛永通宝が主体となるが、V期とした元文期の寛永通宝や鉄錢も含まれる。下層建物整地層から出土した117の平安通宝は出土例が極めて少ない銭貨で、10例中岩手県4例、宮城県3例、山形県1例、神奈川・三重県各1例と東北地方に集中しており（註4）、管見では本例が11例目、岩手県では5例目となる。下層建物最下層整地層からは渡来銭とIV期とした正徳・享保期までの寛永通宝、マス状遺構SB-01からは渡来銭と元文期までの寛永通宝が出土している。

納屋からは、寛永通宝とともに近代硬貨と外国硬貨が出土している。近代硬貨は、大正11（1922）年の桐一銭銅貨、外国硬貨は1981年のアメリカ1CENT硬貨、1992年のマレーシア10SEN硬貨、1993年のマレーシア20SEN硬貨である。外国硬貨は土蔵からも多く出土しており、最新銭は1984年のドイツ50ペニ硬貨である。味噌蔵からはIII a期とした元禄期の寛永通宝が出土している。

吉田家住宅は先に述べたとおり享和2年に建築され、文化元（1804）年から天保元（1830）年頃とされる絵図、天保10（1838）年の絵図、嘉永5（1852）年の絵図が残されている（註5）。しかし、この時期に鋳造された寛永通宝は鉄錢であるため、出土銭貨から吉田家住宅の建物の変遷を明らかにすることはできなかった。

4 陸前高田における寛永通宝の出土状況

徳川幕府は寛永13（1636）年に初めて寛永通宝を発行し、さらに寛文10（1670）年には渡来銭の通用を禁止して、ここに新しい時代の経済活動に相応しい寛永通宝を中心とした銭貨制度を確立した。寛永通宝の発行当初は円滑な流通を図るために政策が幕府によってとられたとされ（註6）、このことはI様式・II様式の寛永通宝が全国的に分布するという考古学的視点からも首肯される。

III期以降の寛永通宝は、貨幣経済の浸透による銭貨不足に対応するために鋳造発行される。元禄期には江戸と京都で銭貨不足から銭相場が高騰し、江戸亀戸銭座と京都七条銭座で寛永通宝が増鋳された。かつて江戸・堺・博多におけるIII a様式の出土状況を検討したが、江戸では亀戸銭座で鋳造されたと考えられる広永型・勁永型が主体となる。これに対して、堺では七条銭座で鋳造されたと考えられる不旧手が主体となって、広永型・勁永型は僅少であった。博多では不旧手が上回るもの広永型・勁永型も次いで主体となり、江戸や堺とは異なる様相が認められた（註7）。

吉田家住宅跡の発掘調査では、元禄期III a様式の寛永通宝が第1次調査・第2次調査を合わせて37点出土している。型別にみると四ツ宝銭と呼称される広永型・勁永型等が22点、不旧手が10点、その他が5点であり、広永・勁永型が量的に上回るもの不旧手もまた多く出土している。分析した資料点数は少ないものの、こうした分布状況は、江戸や京都とは距離的に遠い博多における様相に近いものと考えられる。近世陸前高田地域における物資の流通経路などを理解する上で、有効な指標となる可能性はある。今後の資料の増加を期待したい。

- 註1 川根正教 2001「寛永通宝銅銭の様式分類」『出土銭貨研究』出土銭貨研究会
- 2 川根正教 2005「寛永通宝銅銭の形態的特徴と金属成分分析」『日本考古学』第20号 日本考古学協会
- 3 藤本正志 2016「岩手県指定有形文化財『吉田家住宅』跡（氣仙町）の調査」陸前高田市教育委員会
- 4 高桑 登 2001「国内出土の平安通寶集成」『出土銭貨』第15号 出土銭貨研究会
- 5 註3と同じ
- 6 鈴木公雄 1988「出土六道銭の組合せからみた江戸時代前期の銭銭流通」『社会経済史学』第53巻第6号
- 7 川根正教 2009「元禄期寛永通寶の流通動態」『芸術世界』東京工芸大学芸術学部紀要Vol.15

表1 種類別点数

	第1次調査	第2次調査	計
波来銭		26	26
無文銭	1		1
平安通宝		1	1
寛永通宝	17	118	135
文久永宝	1		1
雁首銭		3	3
鉄銭	1	14	15
近代硬貨		7	7
外国硬貨		13	13
玩具		2	2
不明		5	5
計	20	189	209

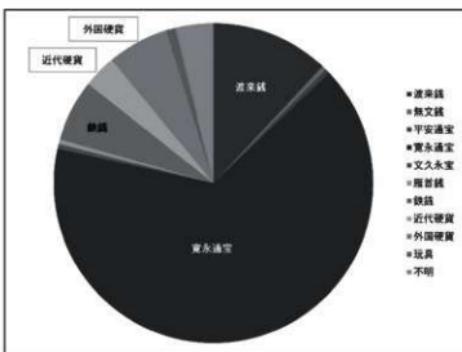


表2-1 出土銭貨等一覧（第1次調査）

番号	銘文	背文	様式	型（様式）	遺物No.	外径（mm）	銘厚（mm）	重量（g）	郭（mm）	出土地点	
										大地区	土層
1	寛永通宝		II a	高背型（不印手）	140190001	23.8	0.9	2.6	7.4	表探	
2	寛永通宝	V		無印型	140190002	22.6	1.3	2.4	7	表探	
3	寛永通宝	I a		清字型	140190003	23.7	1.4	2.5	5.5	表探	
4	寛永通宝	十一波	VI	明和小字型	140190004	27.9	1	4	6.4	表探	
5	寛永通宝	IV		背書長通型	140190005	23.5	1	2.6	6.7	表探	
6	寛永通宝	II a		退永型（不印手）	140190006	24	1.3	3.1	6.2	表探	
7	寛永通宝	I a		斜宝型	140190007	24.5	1.2	2.6	5.7	津波用船艤	
8	寛永通宝	III a		難永型（四ツ宝）	140190008	24.3	1.4	2.8	5.5	難査中	
9	文久永宝	X		（真文）	140190009	26.4	1.2	2.9	6.3	難査中	
10	寛永通宝	I a		小字型（称達仁寺式）	140190010	25.3	1.4	3.5	5.8	難査中	
11	寛永通宝	III a		広目顕型（不印手）	140190011	23.7	1.3	1.9	5.7	難査中	
12	鉄銭	-		圓なし	140190012	28.2	3.7	5.8	3.1	灰色輝度じり粘質土	
13	寛永通宝	文	II	正字背文型	140190013	25.1	1.3	1.9	5.8	灰色輝度じり粘質土	
14	寛永通宝	文	II	袖字背文型	140190014	23.6	1.2	1.5		灰色輝度じり粘質土	
15	寛永通宝	I a		正永型（粉仙台式）	140190015	24.1	1.6	3	4.9	灰色輝度じり粘質土	
16	寛永通宝	I b		低背型	140190016	25.1	1.6	3.5	5.4	灰色輝度じり粘質土	
17	寛永通宝	I a		勇文型	140190017	25	1.2	2.9	5.5	中央部西側	精査中
18	寛永通宝	文	II	中字背文型	140190018	25.6	1.4	3.9	5.4	灰色輝度じり粘質土	
19	寛永通宝	III a		袖頭虎型（四ツ宝）	140190019	22.3	1.2	2.3	6.9	灰色輝度じり粘質土	
20	無文銭	0	-		140190020	17.8	0.6	0.7	8	灰色輝度じり粘質土	

表2-2 出土銭貨一覧（第2次調査）

番号	錢文	背文	様式	型（整式）	造物№	外径 (mm)	thickness (mm)	重量 (g)	器 (mm)	出土地点	
										大地区	主層
1	寛永通宝		II a	追永型（不汨手）	90001	24.1	1.2	3.1	5.8	主層	被災土除去
2	寛永通宝	V		縮字型	90002	21.9	1.1	2.1	7.3	主層	被災土除去
3	寛永通宝	V		縮字型	90003	22.8	1.1	2.5	6.6	主層	被災土除去
4	寛永通宝	I a		縮書型	90004	24.2	1.2	4.1	5.5	主層	被災土除去
5	寛永通宝	III a		追永型（不汨手）	90005	24.4	0.9	2.6	6.2	主層	被災土除去
6	寛永通宝	I a		太幅仰頭型	90006	24	0.9	2.5	5.9	主層	被災土除去
7	10貯貢	1997年	シリアル		90007	26.4	1.7	6.9	-	主層	被災土除去
8	玩具（メダル）	現代		-	90008	25.1	1.4	5.2	-	主層	被災土除去
9	寛永通宝	III a		跳永型（四ツ宝）	90009	22.9	1.2	3	5.5	主層	遺構検出
10	寛永通宝	V		無印型	90010		0.9	0.9		主層	
11	寛永通宝	I a		縮字型	90011	25	1.1	3	5.7	主層	土間整地土
12	寛永通宝	I a		縮書型	90012	25	1.2	3.1	5.5	主層	土間整地土
13	寛永通宝	III a		小字型（称鴟江式）	90013	23.1	1.1	1.9	7.1	主層	土間整地土
14	寛永通宝	文	II	正字背文型	90014	25	1.3	2.5	4.7	主層	整地層
15	寛永通宝	文	II	正字背文型	90015	25	1.2	2.6	6.9	主層	整地層
16	寛永通宝	文	II	中字背文型	90016	25.1	1.2	3.2	7	主層	上層建物 西面延張部整地層
17	寛永通宝	III a		跡永型（四ツ宝）	90017	23.2	1.3	3.9	6.4	主層	下層建物 草地帯
18	寛永通宝	I a		太幅型	90018	24.6	1.2	2.6	5.5	主層	下層建物 草地帯
19	寛永通宝	I a		跡文型	90019	24.8	1.5	3.2	2.7	主層	下層建物 草地帯
20	寛永通宝	I a		正永型（称坂本式）	90020	24.4	1.6	3.4	5	主層	下層建物 草地帯
21	寛永通宝	III a		跡永型（四ツ宝）	90021	23.4	2.1	3.8	6	主層	下層建物 草地帯 (90147と重複)
22	寛永通宝	I a		-	90022	23.6	1.4	1.6	2.7	主層	下層建物 草地帯
23	銀錢	-			90023		1.4	1	5.1	主層	下層建物 草地帯
24	寛永通宝	I a		-	90024	24.9	1.6	1.9	5.8	主層	下層建物 整地層
25	履百貫	-			90025	22.6	1	1.9	3.9	主層	下層建物 草地帯
26	寛永通宝	III a		広永型（四ツ宝）	90026	23.3	1.2	2.3	5.4	主層	下層建物 草地帯
27	銀錢	-		匂なし	90027		3.6	2.5		主層	下層建物 草地帯
28	寛永通宝	I a		-	90028	23.9	1.7	3.6	5.6	主層	下層建物 草地帯
29	寛永通宝	III a		跡永型（四ツ宝）	90029	22.4	1.4	1.2	3.4	主層	下層建物 草地帯
30	洪武通宝	0			90030	23	1.1	2.5	5	主層	下層建物 草地帯
31	寛永通宝	III a		座笠型（四ツ宝）	90031	22	1.2	1.6	7.4	主層	下層建物 草地帯
32	寛永通宝	文	II	正字背文型	90032	25.4	1.3	2.9	7	主層	下層建物 整地層
33	寛永通宝	I a		縮書型	90033	25.1	1.2	4	5.9	主層	下層建物 整地層
34	寛永通宝	I a		寛字型	90034	24.7	1.1	2.9	6.2	主層	下層建物 草地帯
35	寛永通宝	I a		跡永型	90035	24	1.3	1.9	5.9	主層	下層建物 草地帯
36	寛永通宝	I a		正永型（称台式）	90036	23.9	1.4	3.2	5.7	主層	下層建物 草地帯
37	寛永通宝	I b		低寛型	90037	24.3	1.4	3.2	6.5	主層	下層建物 草地帯
38	寛永通宝	III a		跡永型（四ツ宝）	90038	22.6	0.9	1.8	7.8	主層	下層建物 草地帯
39	寛永通宝	I a		調字手型（周輪）	90039	24.4	1.3	2.6	5.5	主層	下層建物 草地帯
40	寛永通宝	文	II	正字背文型	90040	25.2	1.3	2.3	6.1	主層	下層建物 整地層
41	寛永通宝	I a		寛字型	90041	24.2	1.7	3.8	5.6	主層	下層建物 整地層
42	寛永通宝	I a		大字型（称建仁寺式）	90042	24.9	1.3	3.2	7.1	主層	下層建物 草地帯
43	寛永通宝	I a		正永型（称仙台式）	90043	24.6	1.2	2.6	6.4	主層	下層建物 草地帯
44	寛永通宝		I a	縮書型	90044		1.2	1.1		主層	下層建物 草地帯
					90046	24.1	1.2	1.5		主層	下層建物 整地層

番号	錢文	背文	様式	面(型式)	造物№	外径 (mm)	thickness (mm)	重量 (g)	孔 (mm)	出土地点	
										大地区	土層
45	寛永通宝		I a	大字型(称建仁寺式)	90045	25.2	1.3	3.1	5.2	主屋	下層建物 豊地層
46	寛永通宝	文	II	中字背文型	90047	25.6	1.5	4	5.9	主屋	下層建物 豊地層
47	寛永通宝		I a	正永型(称坂本式)	90048	23.8	1.4	2.4	6.6	主屋	下層建物 豊地層
48	寛永通宝		I a	乾宝型	90049	24.6	1.1	2.9	5.6	主屋	下層建物 豊地層
49	永樂通宝	0			90050	23.2	0.8	1.2	5.6	主屋	下層建物 豊地層
50	洪武通宝	0			90051	19.9	0.7	0.9	7.6	主屋	下層建物 豊地層
51	永樂通宝	0			90052	23.4	0.8	1.4	6.2	主屋	下層建物 豊地層
52	寛永通宝	III a		勁永型(四つ宝)	90053	23.3	1.2	2.7	7.3	主屋	下層建物 豊地層
53	鉄銭	-	-	圓なし	90054	26	4	5.1		主屋	下層建物 豊地層
54	寛永通宝鉄銭	VII以降	-		90055	23.8	2	3.1	6	主屋	下層建物 豊地層
55	元祐通宝	0	(篆書)		90056	23.5	0.9	2.3	8	主屋	下層建物 豊地層
56	寛永通寶	I a	小字型(称建仁寺式)		90057	25.1	1	3.2	6.7	主屋	下層豎壁層
57	永樂通宝	0			90058	18.45	0.5	0.7	6.2	主屋	下層豎壁層
58	永樂通宝	0			90059	20.6	0.8	1.3	4.9	主屋	下層豎壁層
59	寛永通宝	III a	高寛型(不臼手)		90060	23.8	0.9	2.4	7.2	主屋	下層建物 西隅木製便座
60	永樂通宝	0			90061	22.6	1.4	1.7	2.8	主屋	最下層地層
61	永樂通宝	0			90062		0.8	0.8		主屋	最下層地層
62	永樂通宝	0			90063	18	0.6	0.3	8.2	主屋	最下層地層
63	寛永通宝	V	異永型		90064	22.7	1	1.2		主屋	最下層豎壁層
64	寛永通宝	IV	重揮通無背型		90065	24.5	1.6	3	5.7	主屋	下層建物 最下層豎壁層
65	-	-	圓なし		90066	20	1.4	1.6	7.8	主屋	下層建物 最下層豎壁層
66	寛永通宝	III a	広永型(四つ宝)		90067	22.8	1.2	1.7	3.6	主屋	下層建物 最下層豎壁層
67	寛永通宝	II	正字背文型		90068	25.1	1.3	3.4	5.7	主屋	下層建物 最下層豎壁層
68	永樂通宝	0	圓なし		90069		1	1.2		主屋	下層建物 (植物灰土)
69	永樂通宝	0			90070	22.8	1.2	1.3	4.9	主屋	下層建物 最下層豎壁層 (植物灰土)
70	永樂通宝	0			90071	21.4	1.6	1.8	4.5	主屋	下層建物 (植物灰土)
71	永樂通宝	0			90072	22.5	0.7	0.8	6.5	主屋	下層建物 最下層豎壁層 (植物灰土)
72	永樂通宝	0			90073	21.1	0.7	1.3	4	主屋	下層建物 最下層豎壁層 (植物灰土)
73	永樂通宝	0			90074	21.1	0.9	1.1	5	主屋	下層建物 最下層豎壁層 (植物灰土)
74	寛永通宝	文	II	縮字背文型	90075	25	1.3	3.4	5.4	旧土間	豎地層 (パラス入・黒灰色土)
75	寛永通宝	V	日光正字型		90076	22.6	0.8	2.4	7.3	旧土間	豎地層 (パラス入・黒灰色土)
76	寛永通宝	I b	正足宝型		90077	24.6	1.2	2.3	5.6	旧土間	豎地層 (パラス入・黒灰色土)
77	寛永通宝	I a	仰永型		90078	24.8	1.2	4	5.4	旧土間	豎地層 (パラス入・黒灰色土)
78	寛永通宝	V	中字型(称秋田式)		90079	23.3	1.1	2.9	6	旧土間	豎地層 (パラス入・黒灰色土)
79	永樂通宝	0			90080	24.6	1.2	3.6	4.7	旧土間	豎地層 (上層建物)
80	鉄銭	-	圓なし		90081	27.7	3.2	4.4		旧土間	豎地層 (上層建物)
81	寛永通宝	文	II	正字背文型	90082	25.2	1.3	2.8	7.1	旧土間	豎地層
82	寛永通宝	文	II	正字背文型	90083	25.4	1.4	3.7	5.7	旧土間	豎地層
83	寛永通宝	I a	小字型(称建仁寺式)		90084	25.2	1.3	3.6	5.4	旧土間	豎地層
84	寛永通宝	III a	小字型(称號江式)		90085	23	1	2.1	7	旧土間	豎地層
85	寛永通宝	III a	勁永型(四つ宝)		90086	23.1	1.2	2.5	6.4	旧土間	豎地層
86	寛永通宝	文	II	縮字背文型	90087	24	1.4	2	5.6	旧土間	豎地層
87	鉄銭	-	圓なし		90088	26	3.3	4.2	4.5	旧土間	豎地層
88	羅首銭	-	-		90089	19.5	1.7	1.9	8.5	旧土間	豎地層
89	寛永通宝	I a	広永型(称水戸式)		90090	24.2	1.1	3.1	5.6	旧土間	豎地層

番号	背文	背文	様式	型(墨式)	遺物No.	外径(mm)	鍔等(mm)	重量(g)	幕(mm)	出土地点	
										大地区	上層
90	寛永通宝		III a	広永型(四ツ宝)	90091	23.4	1.1	2.5	5.1	旧土間	整地層
91	寛永通宝		V	無印型	90092	22.1	0.9	2.1	6.5	旧土間	整地層
92	寛永通宝		V	小梅手型	90093	21.6	0.9	1.4	8.1	旧土間	整地層
93	寛永通宝		I b	高寛型	90094	24.3	1.4	3.9	6	旧土間	整地層
94	寛永通宝		I a	大字型(称建仁寺式)	90095	25.4	1.4	4	5.7	旧土間	整地層
95	寛永通宝		III a	広永型(四ツ宝)	90096	23.6	1.1	2.7	5.6	旧土間	整地層
96	寛永通宝		III a	跳永型(四ツ宝)	90097	22.9	1.3	2.5	4.8	旧土間	整地層
97	寛永通宝		V	全削去通永型	90098	24.3	0.8	1.6	8.7	旧土間	整地層
98	寛永通宝		I b	低寛型	90099	24.5	1.2	1.9	7.0	旧土間	整地層
99	寛永通宝		I a	秀文型	90100	24.4	1.2	3.6	5.4	旧土間	整地層
100	寛永通宝		I a	-	90101	-	1.2	1.3	7.0	旧土間	整地層
101	寛永通宝	文	II	縦字背文型	90102	25.6	1.3	3.2	5.8	旧土間	整地層
102	寛永通宝		III a	跳永型(四ツ宝)	90103	21.1	0.8	1.4	8	旧土間	整地層
103	寛永通宝		V	小梅手型	90104	21.7	0.9	1.8	7.7	旧土間	整地層
104	寛永通宝		III a	勁永型(四ツ宝)	90105	23.1	1.2	2.5	5.9	旧土間	整地層
105	寛永通宝		I a	正字型(称仙台式)	90106	23.4	1.2	3.4	4.8	旧土間	下層建物 整地層
106	寛永通宝		V	小梅手型	90107	23.2	1.2	2.5	7.6	旧土間	下層建物 整地層
107	寛永通宝		III a	正字型(称鶴江式)	90108	21.6	1.1	1.8	7.5	旧土間	下層建物 整地層
108	鉄錢	-	-	圓なし	90109	-	2.2	1.9	7.0	旧土間	下層建物 整地層
109	鉄錢	-	-	圓なし	90110	-	1.9	1.3	7.0	旧土間	下層建物 整地層
110	寛永通宝		I a	太幅型	90111	24.2	1	3.1	5	旧土間	下層建物 整地層
111	寛永通宝		I a	斜幅型	90112	24.5	1.3	3.4	5.3	旧土間	下層建物 整地層
112	治(三)宝	0	-	-	90113	22.6	1.2	1.1	7.0	旧土間	下層建物 整地層
113	寛永通宝		III a	通永型(不臼手)	90114	24.8	1.6	3.3	7.2	旧土間	下層建物 整地層
114	寛永通宝	文	II	正字背文型	90115	25.1	1.2	3.4	5.9	旧土間	下層建物 整地層
115	寛永通宝	文	II	正字背文型	90116	25.6	1.5	3.3	5.9	旧土間	下層建物 整地層
116	寛永通宝	文	II	縦字背文型	90117	25.1	1.2	2.6	6.9	旧土間	下層建物 整地層
117	平安通宝		不詳	-	90118	23.1	1.1	2.3	6.1	旧土間	下層建物 整地層
118	寛永通宝	V	-	縦字型	90119	23	1	1.3	7.0	旧土間	下層建物 整地層
119	雁首錢	-	-	-	90120	23.9	0.9	1.3	5.6	旧土間	下層建物 整地層
120	-	-	-	-	90121	-	0.5	0.6	7.0	旧土間	下層建物 整地層
121	永樂通宝	0	-	-	90122	22.2	0.7	1.2	5.2	旧土間	下層建物 整地層
122	寛永通宝		I b	低寛型	90123	24.5	1.1	2.8	6.2	旧土間	下層建物 整地層
123	寛永通宝		I b	大字型(称鳥越式)	90124	24.6	1.1	3.2	5.7	旧土間	下層建物 整地層
124	永樂通宝	0	-	-	90125	20.7	0.7	0.3	7.0	旧土間	下層建物 最下層整地層
125	永樂通宝	0	-	-	90126	22.8	0.7	1.4	5.6	旧土間	下層建物 最下層整地層
126	鉄錢	VI	-	仙台通寶(中様型)	90127	24.7	2.5	2.3	6.5	旧土間	下層建物 最下層整地層
127	-	-	-	-	90128	23.1	0.8	1.5	6.5	旧土間	下層建物 最下層整地層
128	寛永通宝	I a	大字型(称建仁寺式)	90129	25.4	1.1	2.7	5.9	旧土間	下層建物 最下層整地層	
129	寛永通宝	I b	大字型(称鳥越式)	90130	24.7	1.5	3.7	5.9	旧土間	下層建物 最下層整地層	
130	寛永通宝	IV	-	黄銅斜肩型	90131	24.4	1.1	3.1	6.3	旧土間	下層建物 最下層整地層
131	寛永通宝	I a	勁永型	90132	23.9	1.4	2.9	5.5	旧土間	マスク造形 SB-01	
132	寛永通宝	IV	-	黄銅低寛型	90133	23.1	1.1	2.8	6.4	旧土間	マスク造形 SB-01
133	寛永通宝	V	-	虎ノ尾寛型	90134	23.2	0.8	1.6	6	旧土間	マスク造形 SB-01
134	寛永通宝		III a	広永型(四ツ宝)	90135	23.4	1.1	2.5	5.8	旧土間	マスク造形 SB-01
135	寛永通宝		III a	草点永型	90136	23.1	1	2.1	6.4	旧土間	マスク造形 SB-01

番号	銘文	背文	様式	型(型式)	遺物名	外径(mm)	銘等(mm)	重量(g)	幕(mm)	出土地点	
										大地区	上層
136	寛永通宝		V	縮字型	90137	22.6	0.8	2.1	7.2	旧土間	マスク状造幣 SB-01
137	寛永通宝		I a	流永型	90138	24.1	1	2.6	5.6	旧土間	マスク状造幣 SB-01
138	寛永通宝		III a	鷹永型(四ツ宝)	90139	22.9	1	1.9	6.8	旧土間	マスク状造幣 SB-01
139	寛永通宝		V	小字型(称龜戸式)	90140	23.2	1	1.9	6.4	旧土間	マスク状造幣 SB-01
140	永樂通宝		0		90141	21.8	0.5	1.4	6	旧土間	マスク状造幣 SB-01
141	永樂通宝		0		90142	21	0.6	0.8	5.8	旧土間	マスク状造幣 SB-01
142	永樂通宝		0		90143	22.1	0.8	1.3	5.5	旧土間	マスク状造幣 SB-01
143	寛永通宝		III a	- (不印手)	90144	22.7	1.4	2.7	6.2	旧土間	マスク状造幣 SB-01
144	-	-	-	圓なし	90145	20.3	1.3	0.9	4.9	旧土間	マスク状造幣 SB-01
145	寛永通宝		I a	正永型(称坂本式)	90146	23.6	1.1	2.2	5.8	旧土間	マスク状造幣 SB-01
146	寛永通宝		I a	鷹永型	90147	25.1	1.2	3	5.3	旧土間	マスク状造幣 SB-01
147	寛永通宝		I a	正永型(称坂本式)	90148	23.4	1.1	2.7	6.2	旧土間	マスク状造幣 SB-01
148	永樂通宝		0		90149	21.1	1	1.1	6.4	納屋	整地層
149	寛永通宝	十一渡	VI	明細小字型	90150	27.8	1.1	5	6.9	納屋	整地層
150	20 SEN 貨	1993年	マレーシア		90151	23.5	1.6	5.5	-	納屋	整地層
151	ONE CENT 貨	1981年	アメリカ		90152	18.9	1.5	3.4	-	納屋	整地層
152	10 SEN 貨	1992年	マレーシア		90153	19.2	1.2	2.4	-	納屋	整地層
153	銅一錢銅貨	1922年			90154	23	1.2	3.5	-	納屋	
154	寛永通宝		III a	跳永型(四ツ宝)	90155	23.1	0.8	1.7	7	土蔵	整地層
155	寛永通宝	文	II	正字背文型	90156	25	1.1	2.9	6	土蔵	整地層
156	寛永通宝		III a	鷹永型(四ツ宝)	90157	22.9	1	2.7	6.4	土蔵	被災土
157	匁一錢銅貨	1884年			90158	28.1	1.7	6.7	-	土蔵	被災土
158	10 SCHILLING 貨	1974年	オーストリア		90159	25.8	1.3	5.9	-	土蔵	被災土中
159	2 マルク硬貨	1969年	ドイツコイン		90160	26.6	1.6	7	-	土蔵	被災土中
160	50 ペニヒ硬貨	1950年	ドイツコイン		90161	19.9	1.4	3.5	-	土蔵	被災土中
161	50 ペニヒ硬貨	1984年	ドイツコイン		90162	19.9	1.4	3.3	-	土蔵	被災土中
162	1 マルク硬貨	1982年	ドイツコイン		90163	23.3	1.6	5.3	-	土蔵	被災土中
163	5 SCHILLING 貨	1974年	オーストリア		90164	23.2	1.3	4.6	-	土蔵	被災土中
164	寛永通宝		III a	跳永型(不印手)	90165	23	1	2.3	6.3	味噌蔵	紙張部表土
165	寛永通宝		V	無印型	90166	22.7	1	1.5	6.8	表探	
166	永樂通宝		0		90167	20.2	0.6	0.9	5.9	表探	
167	寛永通宝	文	II	正字背文型	90168	25	1.3	3.5	5.6	表探	
168	寛永通宝		III a	抜目寛型(不印手)	90169	24.8	1.3	2.4	5.6	表探	
169	寛永通宝		V	小梅手彌永型	90170	21.5	1.8	1.3	6.6	表探	
170	寛永通宝		V	小梅手彌冠小永型	90171	21.3	0.9	1.5	6.7	表探	
171	鉄銭	-	-	圓なし	90172	27.4	5.1	4.4	4.8	表探	
172	寛永通宝		III a	正永型	90173	22.7	0.8	2	6.4	表土	
173	寛永通宝		IV'	耳白銭型	90174	24.8	1.1	3.5	6.3	表土	
174	鉄銭	-	-	圓なし	90175	29.2	2.7	6.4	4.2	表土	
175	ONE CENT 貨	-	アメリカ		90176	19	1.4	2.1	-	被災土	
176	玩具(メダル)	現代	圓なし		90177	24.9	1.6	5.1	-	被災土	
177	半銭銅貨	1877年			90178	22	1.1	2.5	-	被災土	
178	20 SEN 貨	1993年	マレーシア	圓なし	90179	23.4	1.5	5.5	-	被災土	
179	1 RINGGIT 貨	1996年	マレーシア	圓なし	90180	24.6	2.4	9.2	-	被災土	
180	半銭銅貨	-	-		90181	21.9	0.9	2.5	-	表探	
181	-	-	-	圓なし	90182	26	0.5	1.9	表探		

番号	銘文	背文	様式	型(型式)	遺物名	外径(mm)	鍔等(mm)	重量(g)	幕(mm)	出土地点	
										大地区	土層
182	桐一銭銅貨		1921年		90183	22.9	1.3	3.6	-	被災土	
183	荀十銭アルミ貨		1940年		90184	21.8	1.7	1.7	-	表土	
184	十銭銅貨		1944年		90185	19.2	1.6	2.1	4.5	表探	
185	寛永通宝	I b	低寛型		90186	24.3	1.3	1.3	5.8	旧土間	整地層(パラス入・黒灰色土)
186	寛永通宝	II a	路永型(四つ室)		90187	23.2	2.1	3.9	6.3	主屋	下層建物 整地層(900G1上塗着)
187	武銭	-	圓なし		90188	26.12	3.04	5.2	3.69	主屋	下層建物 整地層
188	武銭	-	圓なし		90189	27.46	2.9	3.7	4.9	納屋	整地層
189	武銭	-	圓なし		90190	25.72	3.23	4.73	3.69	納屋	整地層

第3表 各遺構の土層別出土銭貨等の点数
(第1次調査)

大地区	土層	直米銭	無文銭	平文銭	寛永通宝						文久水宝	無百銭	銭銭	近世銭貨	外回銭貨	延喜	不明	計
					I a	I b	II	III a	III b	IV								
					1		2			1								6
1	表探					1												1
2						1												8
3					1	1	3	1										1
4						1												1
5						1			2									4
	計	0	1	0	5	1	3	5	0	1	1	1	1	0	1	0	0	20

(第2次調査)

大地区	土層	直米銭	無文銭	平文銭	寛永通宝						文久水宝	無百銭	銭銭	近世銭貨	外回銭貨	延喜	不明	計		
					I a	I b	II	III a	III b	IV										
					2		2			2						1	1	8		
1	主屋																	1		
2	主屋								1									1		
3	主屋																	1		
4	主屋							2		1								3		
5	主屋							2										2		
6	主屋								1									1		
7	主屋							5	18	1	3	8			1	5		41		
8	主屋							2		1								3		
9	主屋										1							1		
10	主屋							3										4		
11	主屋								1	1	1							1		
12	主屋							6										6		
13	旧土間								1	2	1							6		
14	旧土間										2							2		
15	旧土間									5	2	4	7			1	1	24		
16	旧土間							2	1	3	2	3	2		1	2		19		
17	旧土間							2		1	1					1		7		
18	旧土間							3	5		4	1	3					17		
19	納屋													1		2	3	7		
20	納屋																	1		
21	土蔵									1	1							2		
22	土蔵										1							2		
23	土蔵																6	6		
24	昭和蔵										1							1		
25	表探							1		1					1	2		10		
26	被災土															2	3	1		
27	表土										1				1	1		4		
	計	26	0	1	38	8	17	32	0	4	18	1	0	3	14	7	13	2	5	189

写 真 図 版



吉田家住宅航空写真（昭和 51 年頃）

提供：佐々木孝氏



米軍撮影航空写真 1948年9月19日 (USA-R1782-49) 提供：国土地理院

▲▼三角の交点が
吉田家住宅の位置



調査区全景（東から）

写真図版1 米軍撮影航空写真・調査区全景



主屋南東隅（指定文化財調査報告書から）



主屋北東隅（指定文化財調査報告書から）



上層建物跡 1 全景（直上から・右が北）



上層建物跡 1 全景（東から）



上層建物跡 1 全景（東から）



上層建物跡 1 全景（西から）



上層建物跡 1 北面基礎検出（東から）



上層建物跡 1 石 1～9 断面（北東から）

写真図版 2 主屋（1）



上層建物跡 1 石 21 ~ 30 断面（北西から）



上層建物跡 1 東側全景（北から）



上層建物跡 1 圓炉裏跡全景（東から）



上層建物跡 2 全景（東から）



上層建物跡 2 北側全景（東から）



上層建物跡 2 北側全景（北から）



上層建物跡 2 全景（西から）



調査区全景（西から）

写真図版 3 主屋（2）



土蔵（指定文化財調査報告書から）



土蔵跡全景（南から）



土蔵跡全景（北から）



土蔵跡堆積土断面（東から）



納屋（長屋）（指定文化財調査報告書から）



納屋（長屋）全景（南から）



石 229 墨書「十三」（北から）



石 230 墨書「ホ丸」（東から）

写真図版4 土蔵・納屋（長屋）



味噌藏（指定文化財調査報告書から）



味噌藏跡全景（北から）



味噌藏跡全景（東から）



小屋跡全景（東から）



表門（指定文化財調査報告書から）



内門（指定文化財調査報告書から）



門跡1（表門跡）全景（北から）

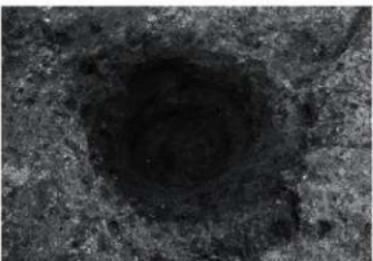


門跡2（内門跡）全景（北から）

写真図版5 味噌藏・小屋・門



竪穴建物跡 1 全景（東から）



竪穴建物跡 1 炉全景（東から）



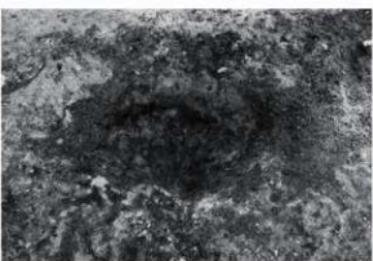
カマド状遺構 1 全景（北から）



カマド状遺構 2～5 全景（南から）



カマド状遺構 2 全景（東から）



炉 1 全景（西から）



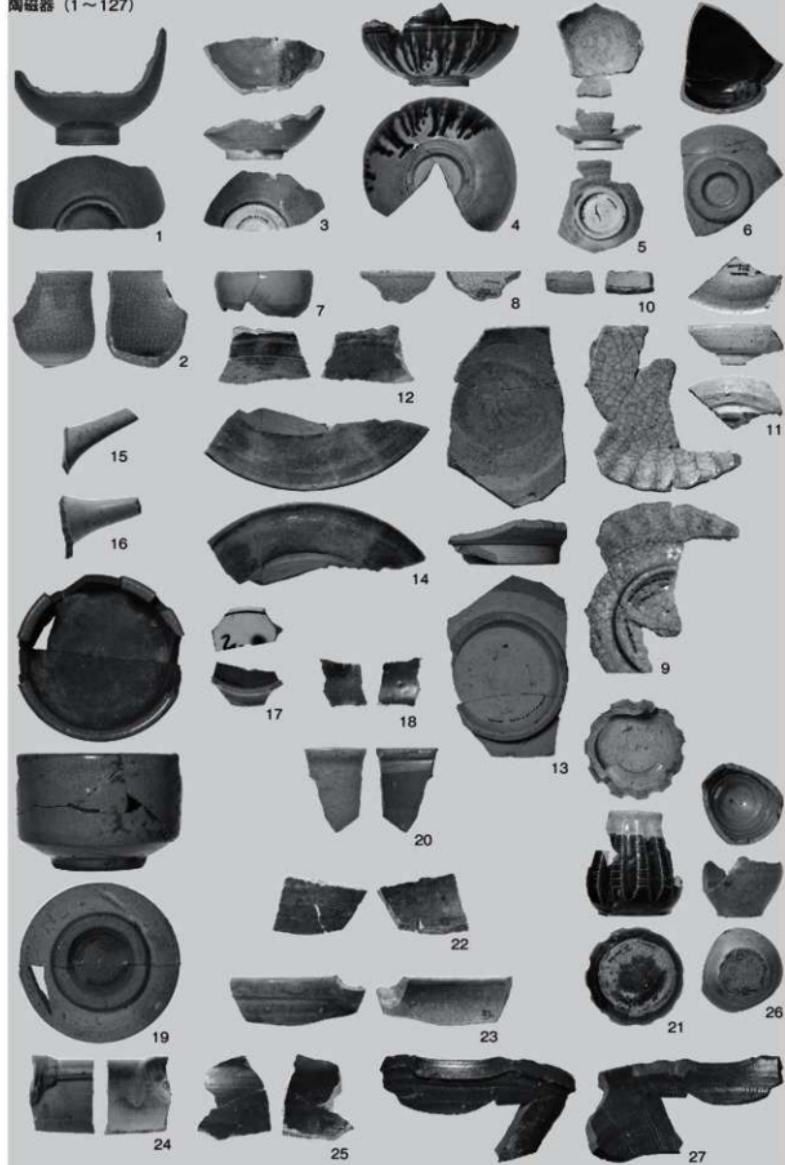
炉 5・6 全景（北から）



炉 14～20 全景（東から）

写真図版 6 吉田家住宅建設以前の遺構

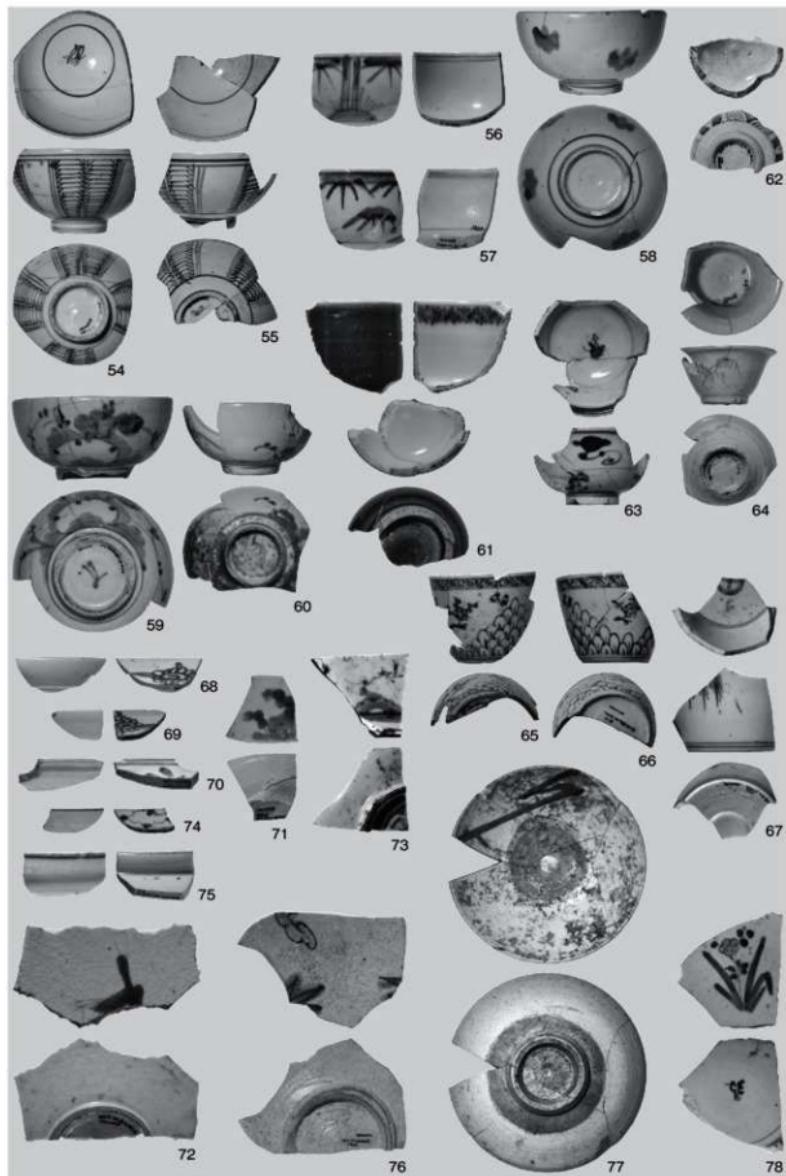
陶磁器（1～127）



写真図版7 陶磁器（1）



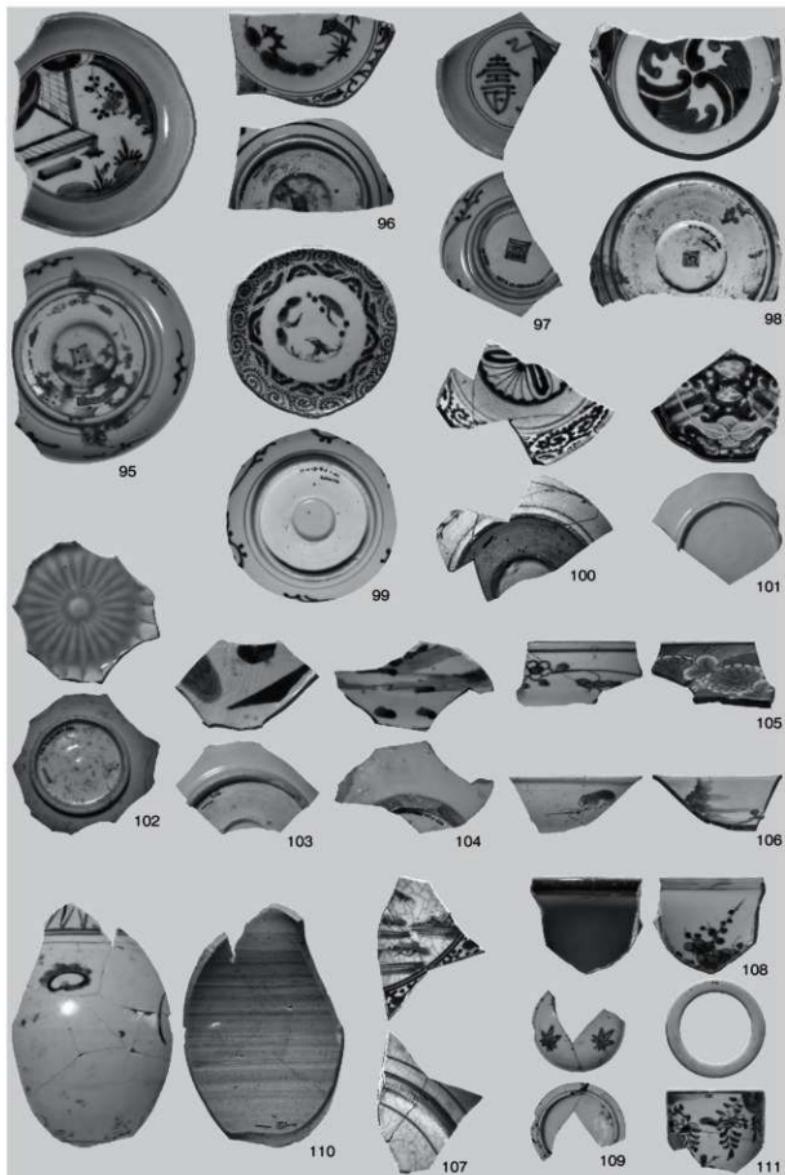
写真図版 8 陶磁器 (2)



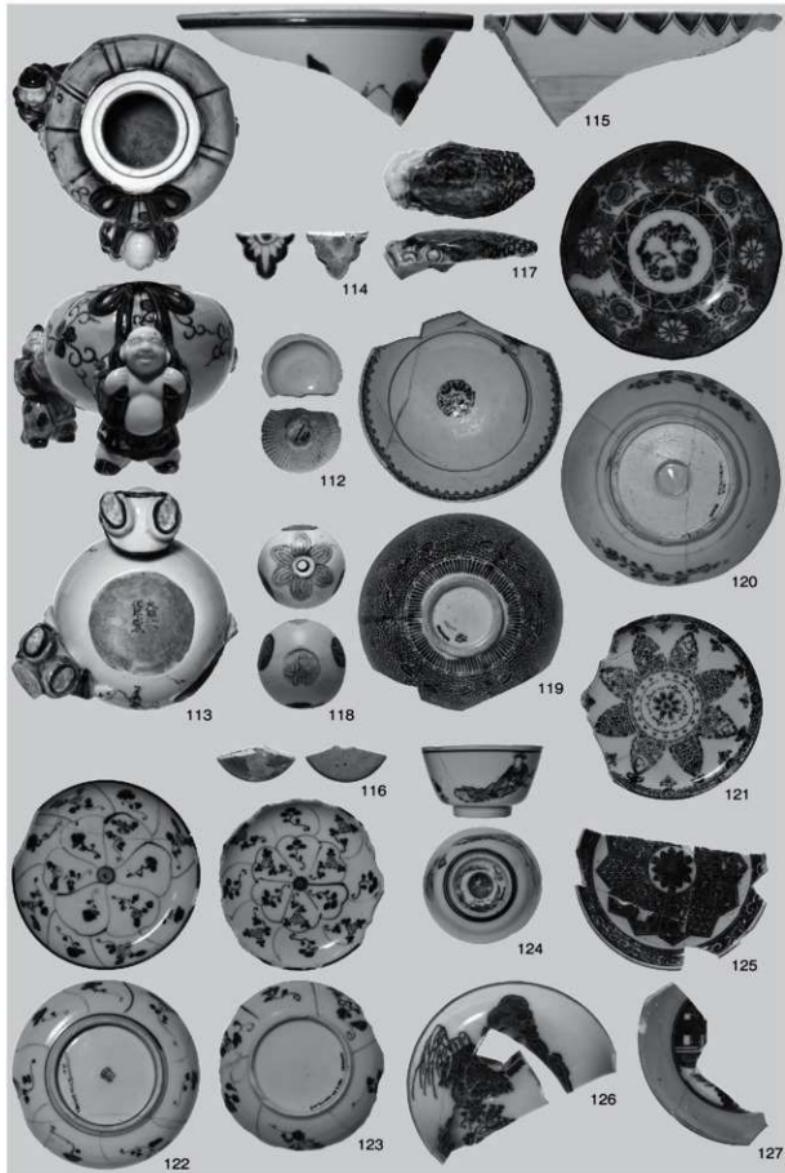
写真図版9 陶磁器（3）



写真図版 10 陶磁器 (4)

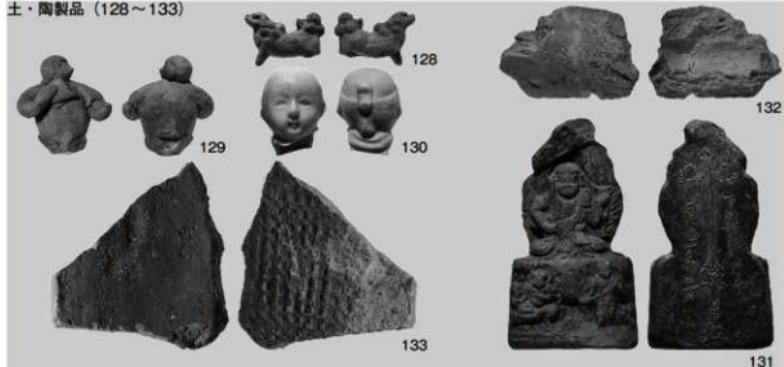


写真図版 11 陶磁器 (5)

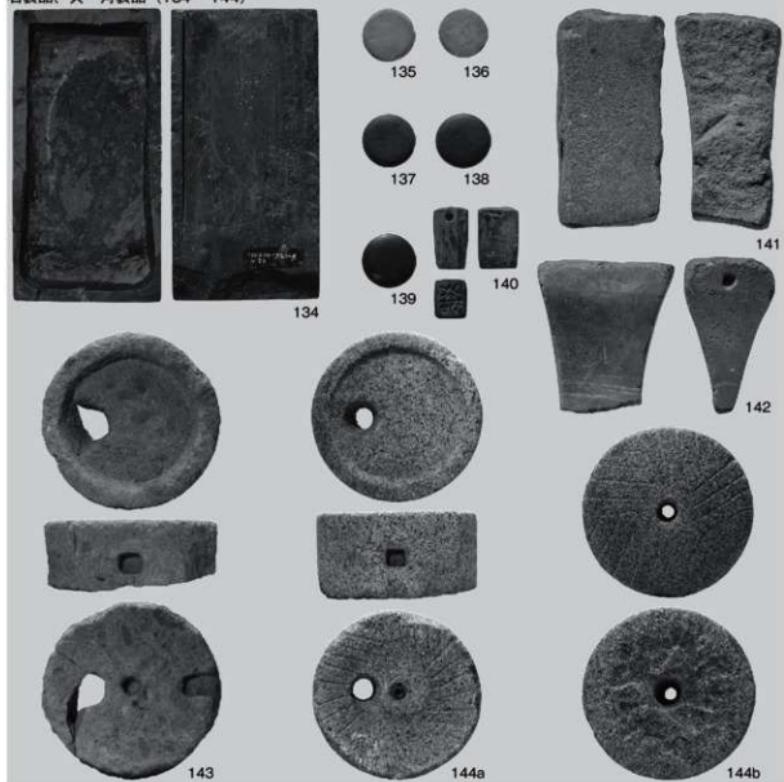


写真図版 12 陶磁器 (6)

土・陶製品 (128~133)

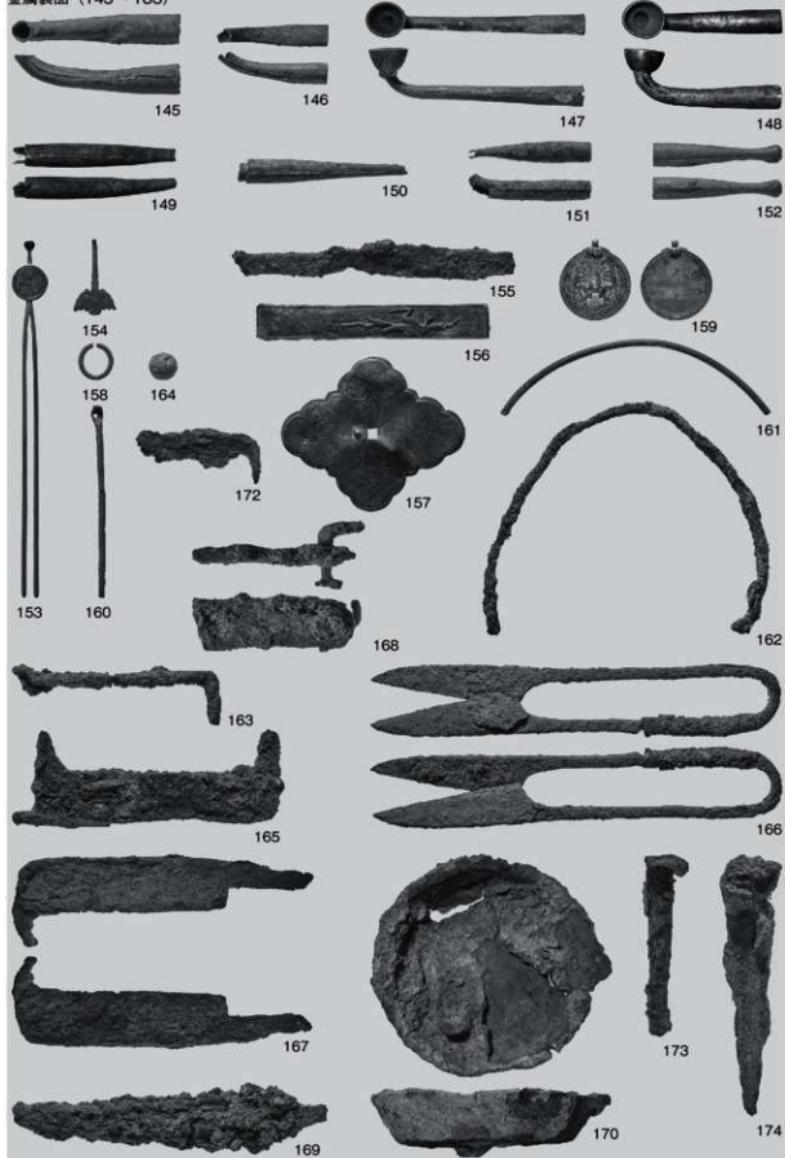


石製品、貝・角製品 (134~144)

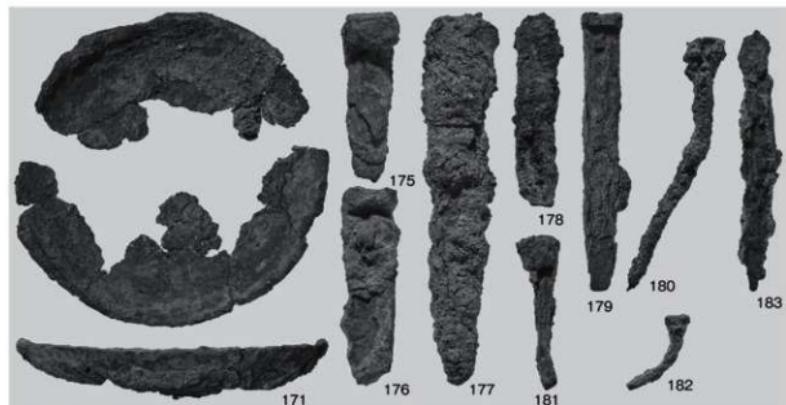


写真図版 13 土・陶製品、石製品、貝・角製品

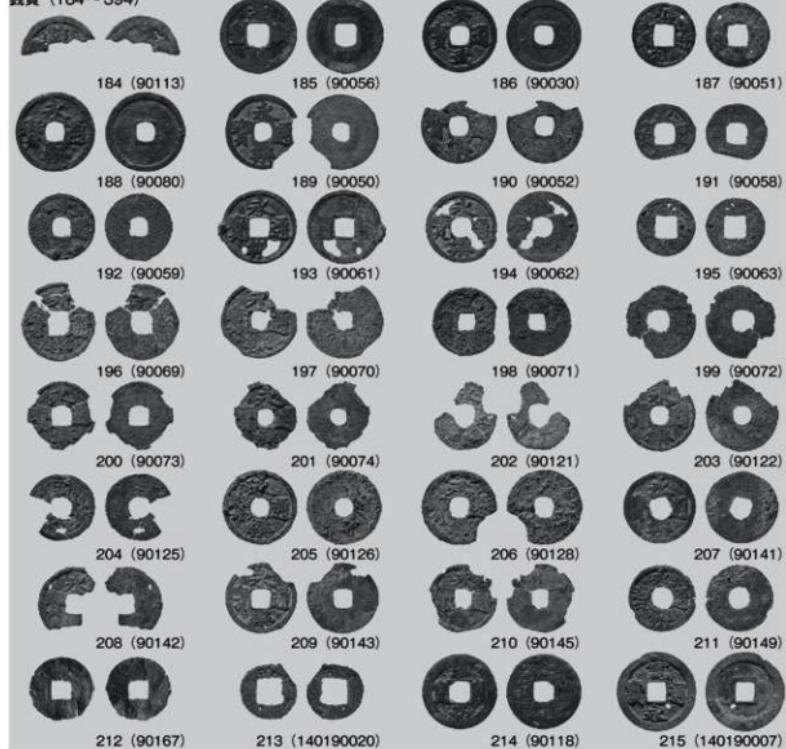
金属製品（145～183）



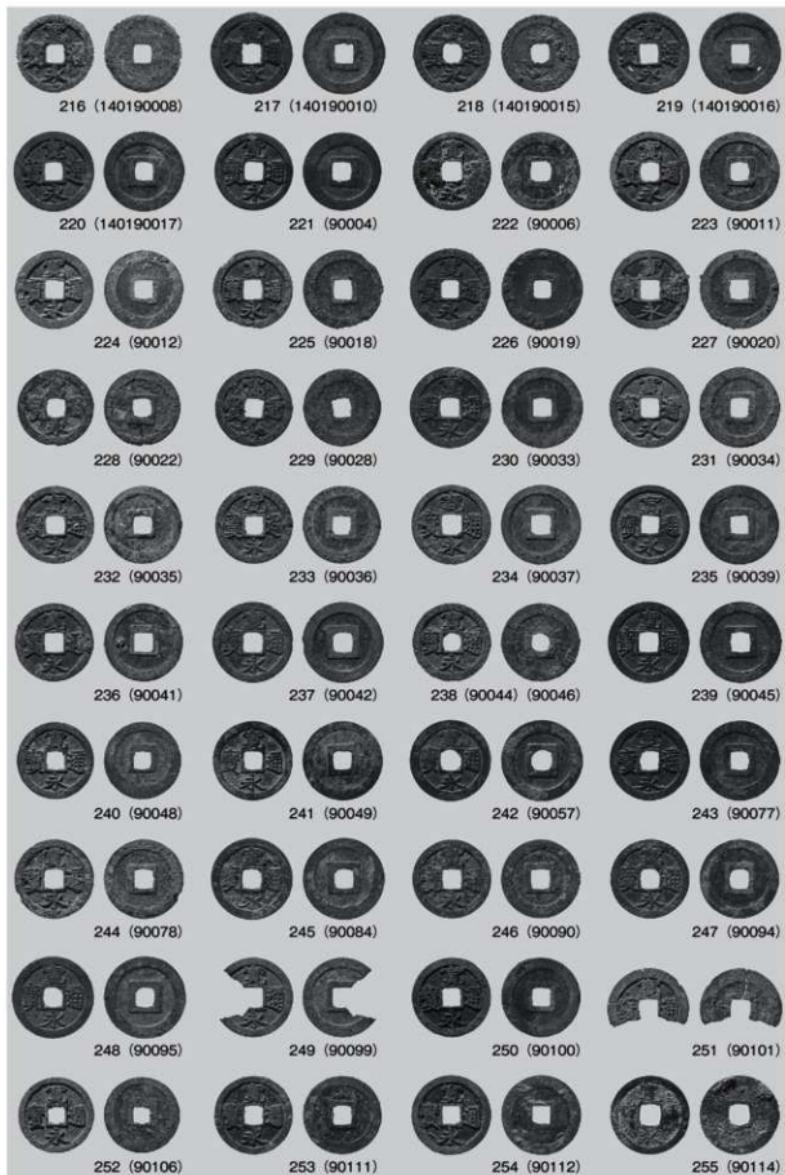
写真図版 14 金属製品（1）



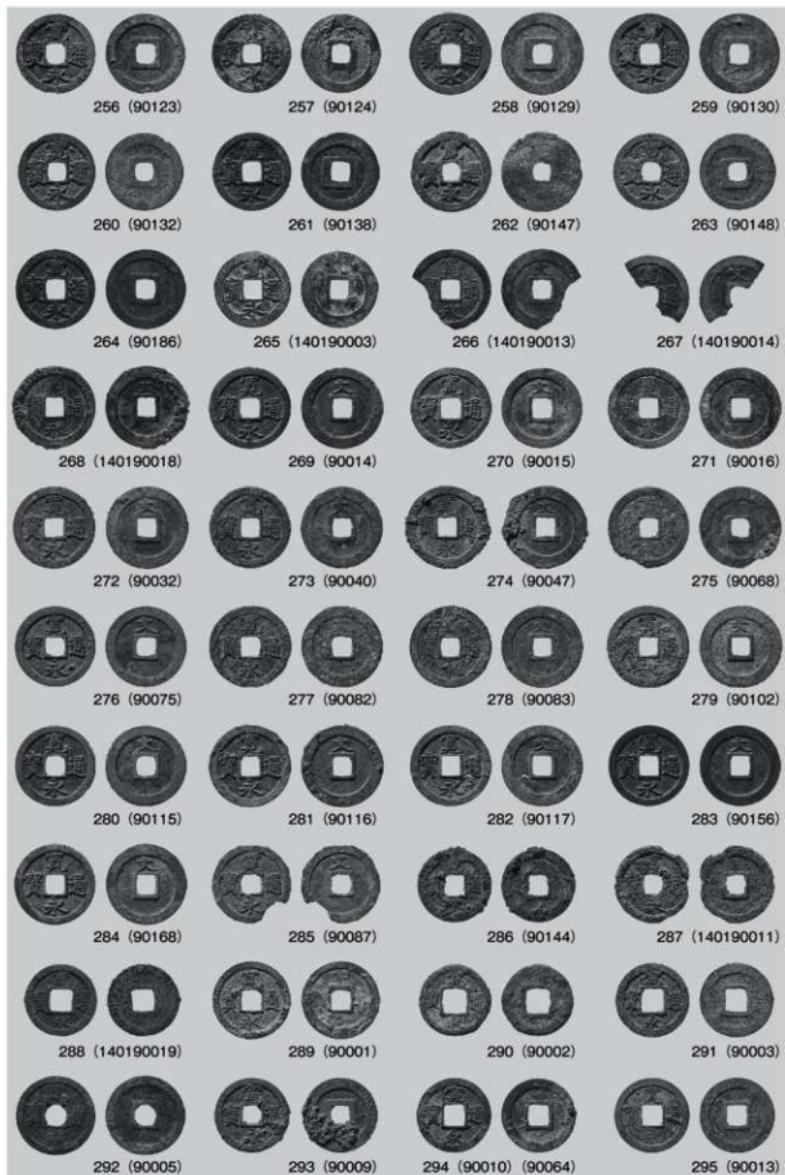
錢貨 (184~394)



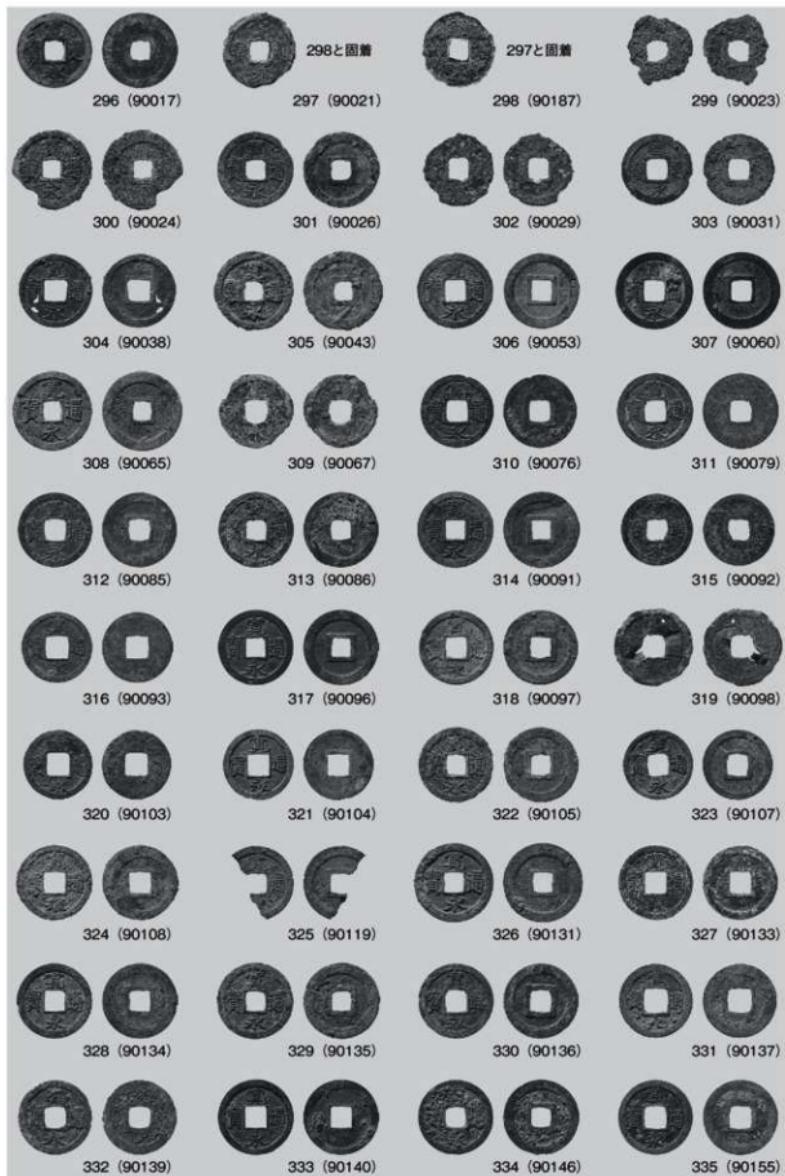
写真図版 15 金属製品 (2)、錢貨 (1)



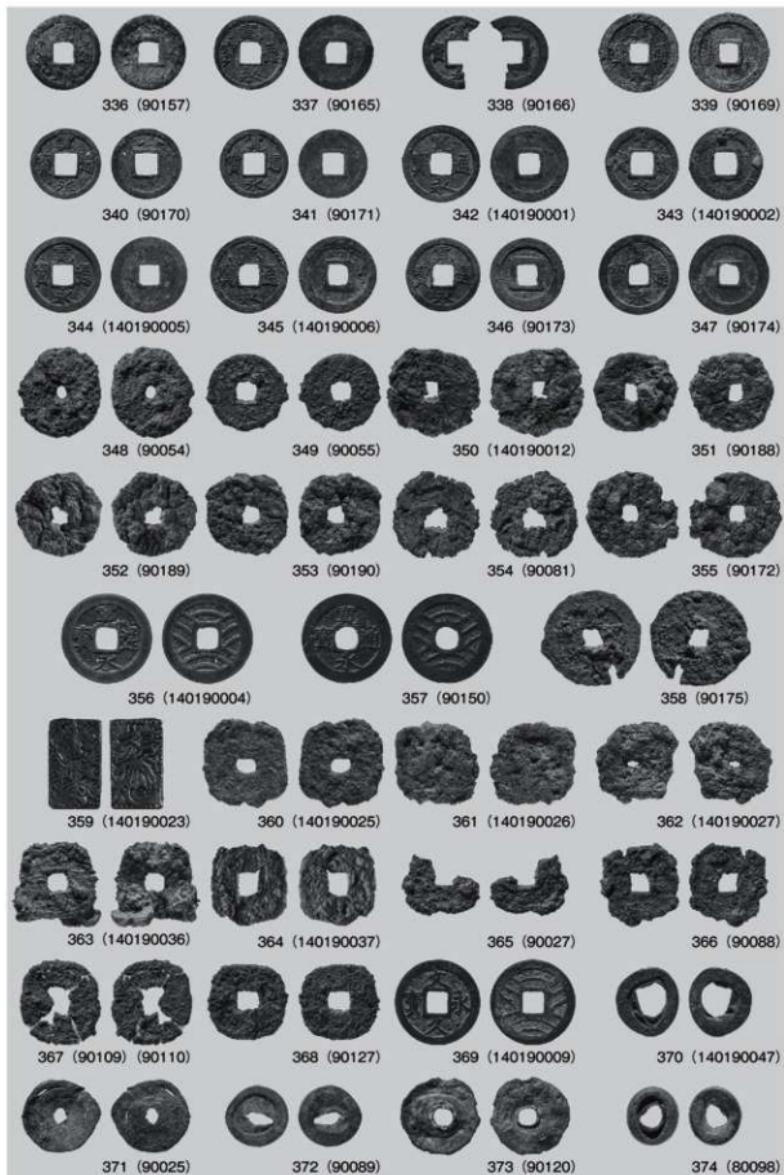
写真図版 16 錢貨（2）



写真図版 17 錢貨（3）



写真図版 18 錢貨（4）



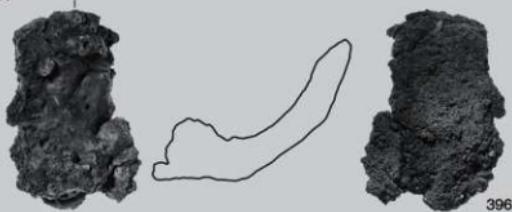
写真図版 19 錢貨（5）



炉壁 (395)



鉄滓類 (396 ~ 399)



写真図版 20 錢貨 (6)、炉壁、鉄滓類

報告書抄録

ふりがな	よしだけじゅうたくあとはくつちょうさほうこくしょ							
書名	吉田家住宅跡発掘調査報告書							
副書名	平成 26・27 年度区画整理事業関連発掘調査							
巻次								
シリーズ名	陸前高田市文化財調査報告							
シリーズ番号	第 38 集							
編著者名	龍本正志（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 川根正教							
編集機関	（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒 020-0853 岩手県盛岡市下飯岡 11 地割 185 番地 TEL(019)638-9001							
発行年月日	2021 年 3 月 1 日							
所取遺跡名	所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東經	調査期間	調査対象面積	調査原因	
吉田家 住宅跡	岩手県 陸前高田市 氣仙町 字町裏 12・ 12-3・13-1・ 14-1・14-2	032107	-	39° 00' 32"	141° 36' 55"	2014.11.20 ~ 2015.03.16	4,090m ²	平成 26・27 年度 区画整理事業に 伴う発掘調査
						2015.05.25 ~ 2015.11.30		
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
吉田家 住宅跡	近世民家跡	中世	堅穴建物跡 カマド状遺構 鍛冶跡跡	陶磁器、金属製品、錢貨、 炉壁、鐵滓類	吉田家住宅建設以前の 15 世紀後半～16 世紀代と推定される 鍛冶関連遺構群を確認。			
		近世～ 近現代	主屋跡 土蔵跡 納屋（長屋）跡 味噌蔵跡 小屋跡 門跡	陶磁器、土・陶製品、 石製品、貝・角製品、 金属製品、錢貨	東日本大震災で被災した 吉田家住宅に関する 礎石建物跡を確認。			
要約	吉田家住宅は、仙台藩領氣仙郡の 24 箇村を治めていた大肝入の住宅遺構で、平成 18 年に岩手県有形文化財（建造物）に指定されたが平成 23 年の東日本大震災による津波で流失した。 今回の調査から、藩政期まで遡る主屋及び附属屋の礎石建物跡や吉田家住宅建設以前と考えられる中世の鍛冶関連遺構群が検出された。また、該期の様々な遺物も出土し、中世以降の土地利用の痕跡が明瞭に確認された。 見つかった遺構群は、藩政期に描かれた 3 枚の屋敷絵図に符合する箇所が多く、これらの絵図が当時の暮らしぶりを鮮明に伝えていることも実証された。							

陸前高田市文化財調査報告 第38集
吉田家住宅跡発掘調査報告書

平成26・27年度区画整理事業関連発掘調査

印刷 令和3年2月25日

発行 令和3年3月1日

- 編集 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話 (019)638-9001
- 発行 陸前高田市教育委員会
〒029-2292 岩手県陸前高田市高田町鳴石42番地5
電話 (0192)54-2111
- 印刷 (有)セーコー印刷
〒020-0877 岩手県盛岡市下の橋町2-23
電話 (019)651-3606

©陸前高田市教育委員会 2021